

阪大 —地域に生き世界に伸びる—

NOW

80th 原点へ
ANNIVERSARY
未来へ
2011
OSAKA UNIVERSITY



10

OSAKA UNIVERSITY 2010/No.120

トピックス

第10回

大阪大学フォーラムを グローニンゲンで開催

クローズアップ

国際交流教育の拠点をめざして

—「大阪大学留学生センター」から

「大阪大学国際教育交流センター」へ—



2010 10月号

No. 120

目次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
80周年	25
ナウススペシャル	30
キャンパスニュース	32
表彰等	52
人事	58
訃報	62
インフォメーション	64
職員インタビュー	67
海外拠点だより	68
交流協定大学	70
クラブ&サークル	71
トピックス	72



表紙写真：和洋の法文化

「正義の女神」像は古代神話の女神から由来し、秤・剣・目隠しのアレゴリーとともに西洋では古くから司法のシンボルとされてきたものであり、啓蒙思想家モンテスキューが著した『法の精神』（1748年）は立憲主義や権力分立論などを唱え近代憲法思想に多大な影響を与えた文献である。平安末期から鎌倉初期にかけて成立した『法曹至要抄』は訴訟裁判のための法解釈を集成した公家の法書、また1232年に編纂された『御成敗式目』は鎌倉幕府の基本法として武家社会の規範を定めた51条の法令である。これらは、西洋とわが国の法に関わる文化や伝統をそれぞれ象徴するものといえよう。（法学研究科所蔵）

表紙デザイン：株式会社ココティエ

第10回 大阪大学フォーラム開催

グローバルコラボレーションセンター長
人間科学研究科教授 栗本英世

第10回大阪大学フォーラム「グローバル化と紛争—ローカルとコスモポリタンな志向のからまりあい」（Globalization and Conflict: Entanglement between Local and Cosmopolitan Orientations）が、2010年9月28日から30日にかけての3日間、オランダのグローニンゲン大学で開催されました。本学からは、鷺田清一総長、辻毅一郎理事・副学長、小泉潤二理事・副学長ほか、約30名の教員・職員・大学院生が参加しました。

今回のフォーラムは、人間科学研究科と文学研究科を拠点とし、小泉理事・副学長を拠点リーダーとするグローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」の成果を国際的な場で発信することを第一の目的としていました。準備の過程で、たんなる一方的な発信ではなく、このフォーラムを機会に国際的なネットワークおよび大阪大学とグローニンゲン大学との連携の強化を図ることに目的を拡大しました。



「現代世界のグローバル化の動態は、コスモポリタンな普遍主義への志向とローカルな個別主義への志向のからまりあいにあり、そのあり方を探求することはグローバル化研究だけでなく紛争の研究にとっても必須である」。これは、グローバル COE プログラムが開始されたときからの基本的認識です。今回のフォーラムでは、これをグローニンゲン大学側にも共有してもらい、共通認識と位置づけました。そして、両大学のあいだで緊密な連絡をとりつつ、昨年度から準備を進めました。

大阪大学とグローニンゲン大学とのあいだには、教育研究上の交流の蓄積があり、相互の信頼関係も確立していることから、フォーラムを組織する作業は順調に進行しました。この過程で、グローニンゲン大学国際部、同文学部の関係者からは、真摯なご協力をいただきました。また、大阪大学グローニンゲン教育研究センターに多大なご尽力をいただきました。

3 日間にわたったフォーラムでは、両大学の総長・学長が出席した開会式、小泉理事・副学長の基調報告、合計 31 件の研究発表がおこなわれた五つの分科会と総合討論、大阪大学の特任研究員が制作した民族誌映画の上映、および大

阪大学側とグローニンゲン大学側がそれぞれホスト役を務めた二つのレセプションなどが実施されました。分科会では、両大学の教員だけでなく、多数の博士後期課程の大学院生およびポスドクの若手研究者が発表しました。また両大学の人的ネットワークを活用し、オランダ国内の他大学だけでなく、ドイツ、ベルギー、イギリス、アメリカなどから合計 8 名の優れた研究者を招へいし、フォーラムに参加していただきました。

グローニンゲン大学では、今回フォーラムに参加した教員を中心にしてグローバル化研究センターがあらたに設置されることが決定されています。今回のフォーラムをきっかけとして、今後人文科学分野とグローバル化研究の分野で、両大学の交流が一層進展することが期待されています。

グローニンゲン大学は、1614 年に創設された由緒ある大学です。同大学のご厚意で、アカデミックな香りに満ちた重厚な雰囲気の会場でフォーラムを実施することができました。また、大阪大学側が主催したレセプションには、日蘭の学術交流に貢献してくださっている在オランダ日本商工会議所会員の皆様もご出席くださり、百数十名が和やかに懇談したことを付け加えておきます。



大阪大学の国際教育交流の拠点を目指して ー「留学生センター」から「国際教育交流センター」へー

国際教育交流センター

はじめに

「留学生センター」は平成22年4月1日に「国際教育交流センター」と改組されました。大阪大学は平成21年度「国際化拠点推進事業（グローバル30）」に採択されたことに伴い、留学生数を現在の1,608人（2010年5月現在）から2020年までに3,000人に増加させる計画を立てました。また大学院と学部レベルで学位の取得できる英語コースを開設するとともに、大学全体の国際化を進めています。本センターはこの事業（以下「G30」と呼ぶ）に積極的に協力するとともに、この度の改組を機に、大阪大学の国際教育交流の拠点となることを目指しています。

旧「留学生センター」における「日本語教育部門」と「留学生交流指導部門」という2部門制から、新「国際教育交流センター」においては4チーム制に改編し、「I.日本語教育研究チーム」、「II.短期プログラム開発研究チーム」、「III.交流アドバイジング研究チーム」、そして国際部に設置されていた「IV.サポートオフィス」も本センターに置くことになりました。この組織改編にあわせて、これまで以上にチーム間での連携協力を進めています。またこれまでサポートの主な対象としてきた留学生やその家族だけでなく、研究者やその家族にも対象を拡大し、全学的なサポートを充実させる取組みを行っています。

I. 日本語教育研究チーム

充実した日本語教育プログラムの提供

国際教育交流センターでは、大阪大学に在籍する多様なカテゴリーの留学生を対象に、基本的なコミュニケーション能力の養成からアカデミックライティングやプレゼンテーションまで、ニーズに応じた各種日本語プログラムを開講しています。日本語を初めて学習するレベルから超上級まで幅広いレベルで開講されている日本語プログラムを、2010年春学

期は45カ国/地域の留学生が受講しました。

「国際交流科目日本語」（図1の③）を履修する短期留学生がわずか1年で約1.5倍（2008年度100名から2009年度146名）に達するなどの急激な量的拡大に対応しつつ、質の高い日本語教育を提供するために、本センターでは、独自の日本語教育システム（OUシステム）の構築とそれを支えるリソースの開発に着手しています（図2）。このシステムでは、対面授業での教育とともに、web上のリソースおよび

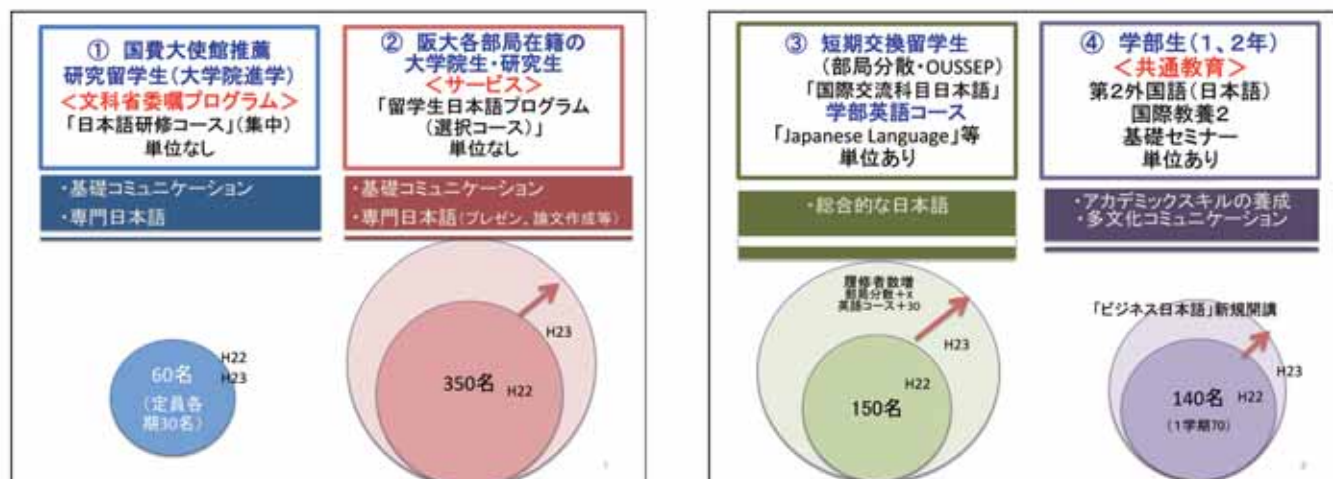


図1：主要な日本語プログラムと履修者数

e-learning コースを有機的にカリキュラムに取り入れて学習者の自学自習を促し、多様な日本語学習機会を提供することを目的としています。また、このシステムが完成すると、現在すでに実現している日本語のレベル診断、クラス配置から成績評価までの web 化に加え、本学に留学する学生の渡日前教育から、専門教育および研究活動と並行した日本語自律学習サポートなどの多様な対応も web 上で可能となる予定です。

一方、本学の研究者と家族（留学生・研究者）のためには、生活日本語学習支援プログラム「いちよう日本語プログラム」を開講し、日本滞在中の QOL 向上と居場所づくりにも貢献しています。

手続きは？



図2：(1) 日本語ウェブ登録システム（現状）



図2：(2) 開発中の OU システムの概要

II. 短期プログラム開発研究チーム

受け入れと送り出しの拡大

本チームでは、本学の一般学生の海外留学派遣と協定大学からの交換留学生の受け入れ拡大を通じて大学の国際化に貢献しています。送り出しでは、全学規模の海外留学オリエンテーションや渡航前の危機管理オリエンテーションの開催から個人面談までの様々な機会を設け、海外に雄飛する阪大生を支援しています。今年度は新たな試みとして留学して帰国した日本人学生によるスピーチコンテストを実施しました（写真1）。

送り出しと対になる受け入れについては、基幹プログラムとなるOUSSEP（Osaka University Short-term Student Exchange Program）（写真2）だけでなく、より多彩で柔軟な受け入れのために、新プログラムの検討・開発を行ってきました。平成22年度の夏休みは超短期プログラム Japanese Language and Culture に、タイと韓国から計25名の学生が二つのコースに分かれて2週間もしくは3週間のプログラムに参加しました（写真3）。



写真1
スピーチコンテスト受賞者
によるスピーチ（渡航前オ
リエンテーションにて）



写真2
OUSSEP 研修旅行（高野山
宿坊体験）



写真3
超短期プログラム研修風景

Ⅲ. 交流アドバイジング研究チーム

連携とネットワークを活かし、各種支援と交流推進

IRIS（留学生交流情報室）をベースに、部局の留学生相談室や地域のボランティア等と連携して、3キャンパスにおける同等の留学生サポートを目指し、これまでも留学生の相談対応、学生間の交流支援、地域との交流支援など、実施してきました。

例えば国際交流に関心のある学生グループ B.S.P. (Brothers and Sisters Program)、大阪大学留学生会 (OUIA : Osaka University International Student Association) や各国留学生会など、学生同士の交流を積極的に支援しています (写真4)。新規留学生向けキャンパスツアー、ウエルカムパーティ、各国料理パーティ、スポーツ大会、キャンプなど、学生が主体的に企画して実施する活動を IRIS では側面から強力に支援することを通して、学生たちが身近な国際交流を実践しています。一般学生の中には留学生との交流により刺激を受けて、留学や研修など海外に積極的に出かける者もいます。

また地域との連携の例として、ホームビジットタイプの大阪大学留学生ホストファミリープログラムは、地域のボランティア団体等との連携のもとで実施しています。(平成 6-22 年度春までの総組み合わせ数 1967 件) 平成 19 年度からは学



写真4：IRIS での交流風景



写真5：「大阪大学国際同窓会」設立記念行事

内教職員への案内も始め、4 年間で学内教職員から 42 件の申し込みがあり、この秋の組み合わせ予定数も入れて、47 件の組み合わせ数（延べ）となりました。(問い合わせ：IRIS：内線 7076、iris@isc.osaka-u.ac.jp)

更に、本学創立 80 周年記念事業の学生イベントの一つとして「世界に広がる大阪大学同窓会ネットワーク」を各国留学生会等と協力して準備しています。その一環としてこの 9 月 25 日（土）に東京にて「大阪大学国際同窓会」設立記念行事を実施しました（写真5）。

Ⅳ. サポートオフィス

来日前から卒業・離日までトータルに支援

G30 への採択に伴い、サポートオフィスは、特任教職員を配置し、サービスを格段に充実させました（資料1）。ビザ関連の支援としては、在留資格認定証明書（CESR）申請システムを改良し、大阪大学で受け入れるすべての留学生や外国人研究者およびその家族の代理申請手続きを開始しました。宿舎支援に関しては、学内宿舎の絶対的な不足が問題である中、大学周辺における民間住宅の開拓に取り組んでいます。その他、学内説明会（資料2）、毎月開催している新規来日者向けオリエンテーション（資料3）や、教職員向けの留学生・外国人研究者受入のためのハンドブック、留学生・外国人研究者対象のガイドブック（資料4）、ホームページ、コミュニティサイト（Global Campus Net, Osaka）をとおして、留学生・外国人研究者の支援のみならず、受入教職員等の負担軽減に取り組んできました。

3キャンパスにサポートオフィスを設置

サポートオフィス：吹田キャンパス（IC ホール2階）
豊中キャンパス（学生交流棟2階）
箕面キャンパス（B棟1階）

吹田キャンパス



豊中キャンパス



箕面キャンパス



資料1：サポートオフィス（3キャンパス設置）

今後も、サポートオフィスでは、関係部局との連携を持ちながら、本学滞在中の支援、キャリア支援、離日時のサポー

トも含めて、留学生・外国人研究者への来日前から卒業・離日にいたるまでを、大阪大学としてトータルに支援することを目指します。

サポートオフィス学内説明会の実施状況

	第1回目	第2回目	第3回目	第4回目
日時	2009年12月10日	2010年3月1日	2010年5月13日	2010年6月29日 2010年6月30日
場所	吹田 キャンパス	吹田 キャンパス	吹田 キャンパス	豊中 キャンパス 吹田 キャンパス
参加総数 (教職員)	160名	90名	77名	24名 46名 70名



第1回目 説明会の様子



第2回目 説明会の様子

資料2：サポートオフィス学内説明会実施状況

新規来日外国人向けオリエンテーション(実施状況)

	4月		5月		6月		7月		8月		9月		計
	吹田 キャンパス	豊中 キャンパス	吹田 キャンパス	豊中 キャンパス	吹田 キャンパス	豊中 キャンパス	吹田 キャンパス	豊中 キャンパス	吹田 キャンパス	豊中 キャンパス			
教職員	8	2	6	4	5	5	4	5	5	4		34	
研究者	7	1	3	4	5	3	2	5	3	2		25	
留学生	19	11	6	2	5	9	2	5	9	2		54	
計	34	14	15	10	15	17	8	15	17	8		113	

単位:人数

・4月 8日 10:30-12:00 (吹田キャンパス)
 ・4月 13日 10:30-12:00 (豊中キャンパス)
 ・5月 11日 10:30-12:00 (吹田キャンパス)
 ・6月 8日 10:30-12:00 (豊中キャンパス)
 ・7月 14日 13:00-15:00 (吹田キャンパス)
 ・8月 4日 10:30-12:00 (豊中キャンパス)
 ・9月 8日 10:30-12:00 (吹田キャンパス)

資料3：新規来日外国人向けオリエンテーション(実施状況)

サポートオフィス印刷物

教職員の留学生・外国人研究 員受け入れハンドブック	サポートオフィス 紹介パンフレット	来日編	暮らし編
第1刷 2009年12月、2000部 第2刷 2010年3月、2000部	2010年3月発行、5000部 2010年5月発行 中国語・簡体字版 1500部 中国語・繁体字版 500部 タイ語版 1000部 韓国語版 1000部 スペイン語版 1000部	2010年3月発行、3000部	2010年3月発行、3000部

資料4：サポートオフィス印刷物

終わりに

留学生を受け入れることは、日本人など一般学生の国際性を高める機会となります。また、積極的に海外へ出かけ、世界を直接体験することは、グローバルに活躍できる人材となる機会となります。留学生・外国人研究者の受け入れは、既に多くの部局や専攻や研究室で行われていることですが、本センターは阪大生の送り出しにつきましても、国際部学生交流推進課と連携しながら各種の取組みを行っています。本センターは、吹田がメインですが、豊中と箕面にも分室を持ち、3キャンパスにありますので、受入れ・送り出しに関して、もし何か困ったことや、心配なことがあれば、学内で相談できる場所の一つとして、本センターをぜひご活用ください。

国際教育交流センターでは、更に、サイバーメディアセンター、大学教育実践センターと協力して「大学教育のグローバル化に対応したFD支援事業」(<http://gfd.ime.cmc.osaka-u.ac.jp/>)を行うなど、教育の国際化のためのFD事業にも積極的に取り組んでいます。改組を機に、大阪大学における国際教育交流の拠点を目指し、これまで以上に留学生・外国人研究者のQOL向上と大阪大学の国際的な教育・研究環境整備に努めていきます。

(国際教育交流センター HP <http://www.isc.osaka-u.ac.jp/>)

問い合わせ先 (国際教育交流センターHP <http://www.isc.osaka-u.ac.jp/>)

I. 留学生の日本語教育について

日本語教育研究チーム (jpstaff@isc.osaka-u.ac.jp)
 吹田 10:00-16:30 (内線:7109)

II. 留学生短期受入・海外留学について

短期プログラム開発研究チーム (oussep@ex.isc.osaka-u.ac.jp)
 (<http://ex.isc.osaka-u.ac.jp/>)
 吹田 9:00-17:00 (内線:7127 / 7128)
 派遣留学相談(学生向け) (advising@isc.osaka-u.ac.jp)

III. 留学生の相談・支援・交流について

交流アドバイザー研究チーム IRIS (iris@isc.osaka-u.ac.jp)
 吹田 8:30-18:00 (内線:7076)
 豊中分室 10:30-17:00 (内線:5032)
 箕面分室 10:30-17:00 (電話:072-730-5020)

IV. サポートオフィスについて

サポートオフィス (supportoffice@office.osaka-u.ac.jp)
 (<http://www.rcnp.osaka-u.ac.jp/osaka-jp/supportoffice/index-j.php>)
 吹田 8:30-18:00 (内線:4750 / 4748)
 豊中 毎週火・木 10:30-17:00 (内線:6428 / 6528)

* カッコ内のアドレスは各問い合せ先メールアドレス

* 上記時間帯は、平成22年10月現在、土日祝日除く平日のスタッフ常駐の時間帯

* 豊中・箕面地区については、III. 各分室に問い合わせれば、各分室から関係するスタッフに連絡して対応

役員室だより

2010.10 Vol.38

大学の動き

経営協議会の開催

今年度2回目の経営協議会を9月24日(金)に吹田キャンパスで開催しました。普段は中之島センターで開催していましたが、学外委員の方に直接教育研究の現場を見学していただき、実状をご理解いただくために、昨年度から年に一度は各地区キャンパスで開催することにしたものです。

今回は工学部機械系の学生実習工場棟や実験研究棟を中心に案内し、昭和40年代に建てられ老朽化と狭隘化が進んだ施設設備の状況を見学していただきました。さらにテクノアライアンス棟、たけのこ保育園など新営建物についても説明し、新旧の施設が混在したキャンパスの現状を知っていただくよい機会となりました。キャンパス案内後は1時間にわたり審議、意見交換が活発に行われました。



馬場工学研究科長から説明を受ける経営協議会委員



学生実習工場棟で



実習の様子を熱心に見入る委員

各室の検討状況

総合計画室

学内措置による教育研究組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による教育研究組織の整備として、9月の役員会で次の事項が承認されました。

- 臨床医工学融合研究教育センターの改組(平成22年10月1日)
 - ・産学連携部門の新設(5部門→6部門)と部門名称の変更

平成23年度計画の策定

第2期の2年目となる平成23年度計画の策定については、平成22年度と同様に、各室から選出された室員で構成する「平成23年度計画作成検討ワーキング」を立ち上げ、同ワーキングで各部局、各室と摺り合わせしながら取りまとめていくこととなりました。なお、策定スケジュール、ワーキング委員は次のとおりです。

【策定スケジュール（予定）】

平成22年10月～平成22年12月	各部局で部局年度計画を作成
〃 12月～平成23年1月	部局年度計画を踏まえ各担当室で大学年度計画（素案）を作成
平成23年1月～ 〃 2月	ワーキングで大学年度計画（原案）を作成
〃 2月	各部局、各室あてに意見照会
〃 2月～ 〃 3月	部局の意見を踏まえ大学年度計画（案）を作成
〃 3月	関係会議に附議し、大学年度計画を策定
〃 3月31日	文部科学省へ提出

【平成23年度計画作成検討ワーキング委員】

氏 名	所 属 室	所 属 部 局 等
西 田 正 吾	総合計画室長	理事（主査）
土 井 健 史	評価室長	理事
中 岡 成 文	総合計画室	文学研究科
三 成 賢 次	総合計画室	法学研究科
滝 澤 温 彦	総合計画室	理学研究科
井 上 克 郎	総合計画室	情報科学研究科
小 林 傳 司	教育・情報室	コミュニケーションデザイン・センター
萩 行 正 憲	研究・産学連携室	レーザーエネルギー学研究センター
川 端 亮	評価室	人間科学研究科
村 上 伸 也	評価室	歯学研究科
山 中 伸 介	評価室	工学研究科
水 谷 規 男	評価室	高等司法研究科
吉 川 秀 樹	財務室	医学系研究科
岡 村 康 行	人事労務室	基礎工学研究科
宇 野 公 之	広報・社会学連携室	薬学研究科
鈴 木 睦	国際交流室	言語文化研究科

「大阪大学環境報告書2010」の公表

「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律（環境配慮促進法）」に基づき、本学における2009年度の環境パフォーマンスデータや環境保全活動を紹介する「大阪大学環境報告書2010」を作成し、9月30日に公表しました。

本報告書の詳細は、大学公式ホームページに掲載しており、「法人情報の公表」ページからアクセスできます。

<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/information/joho/files/report10.pdf>



教育・情報室

日本学術会議報告書「大学教育の分野別質保証の在り方について」

平成22年7月22日付で、日本学術会議から「大学教育の分野別質保証の在り方について」と題する報告書が文部科学省に提出されました。これは、文部科学省高等教育局長の依頼（平成20年5月）に対し、日本学術会議が詳細な検討に基づいて回答をまとめたものです。分野別の質保証、学士課程の教養教育、大学と職業の接続などについて根本的な考え方が示されており、今後の大学教育の方向性を示すものとして位置づけられます。以下のアドレスからダウンロードすることができます。（URL:<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-k100-1.pdf>）

なお、中央教育審議会では「中長期的な大学教育の在り方」に関して審議が進められており、平成22年6月29日には第四次報告書が発表されています。大学教育の質保証やグローバル展開、大学院教育の充実などについて報告されています。（URL:http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1295686.htm）



ダブルディグリー、ジョイントディグリー等について

大学教育のグローバル化にともない、海外の大学と日本の大学の間で共同の教育プログラムが検討されるようになり、また連携して学位を授与する例が増加しています。しかし、ダブルディグリー、ジョイントディグリー、デュアルディグリー、共同学位、複数学位など関連の用語や定義も統一されず、各国や各大学の制度も標準化されないまま、多様な名称のプログラムが曖昧さを残しながら個別に実施されているのが実情です。これについて文部科学省は中教審での検討結果に基づいて、「我が国の大学と外国の大学間におけるダブル・ディグリー等、組織的・継続的な教育連携関係の構築に関するガイドライン」（中央教育審議会大学分科会 大学教育の検討に関

する作業部会 大学グローバル化検討ワーキンググループ 平成22年5月10日付 URL:http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1294338.htm）を公表し、こうしたプログラムを実施する際の留意点等をまとめています。とくに、単一の論文で複数の大学からそれぞれ学位を取得可能とするプログラムについては慎重な姿勢が示されています。大阪大学の各研究科でも、海外の大学と連携する教育プログラムを検討する際には上記の文部科学省のガイドラインを参照し、必ず学生部学務課また教育・情報室と連絡をとり、教育課程委員会等での審議を経てからプログラムを実施してください。

外国語教育に関するアンケート調査結果

阪大NOW 8月号（2010 / No.119）でもお知らせしたように、教育基盤整備本部会議では、学生の教育に携わる全学部・研究科に対し、外国語教育へのニーズ、要望、あるいは考え方を把握するためのアンケート調査を実施しました。アンケートは英語教育に関するものと、英語教育を含む外国語教育全般に関する質問事項からなり、それぞれの部局から詳細に検討された回答を得ました。その結果、主なものとして右記の諸点が明らかとなっています。すべての回答を含む詳細な調査結果は、項目ごとに整理して全部局に配付されています。

なお去る3月には学際融合教育研究センターにより、学外の企業・団体・官庁に対して、外国語教育に対するニーズ調査が行われました。その結果、やはり英語の教育に対する期待が最も大きいものの、中国語や朝鮮語のニーズが高まっていること、その他の言語についてはニーズにそれほど大きな差はないこと、などが明らかになっています。

こうしたデータに基づいて、外国語学部を持つ唯一の国立総合大学である大阪大学として、独自の外国語教育を実現するための検討を続けています。

- ・英語教育の重要性については、全学的に完全な合意がある。
- ・とくにコミュニケーション力をつける英語教育が望まれている。
- ・英語で書く力、専門英語、会話力、読解力など、英語教育にはさまざまな側面があるが、それらに対する部局や専門分野ごとのニーズには違いがある。
- ・学部での必修言語は、2カ国語とすべきとする意見が非常に強い。
- ・言語教育は、異文化に対する感受性や異なる人々を理解する力を養うための教養教育として重要である、という考え方に対して十分な支持がある。
- ・現在全学共通教育として行われている外国語教育と、専門教育の中で行われている外国語教育とを体系的に連動させること、また高年次で英語教育を継続することが望まれている。
- ・優秀なネイティブの教員による授業が望まれている。

TAに関するアンケート調査の実施

本年度に設置された「TA・RAあり方検討ワーキング」(主査 藤田喜久雄教育・情報室員 工学研究科教授)では、10月にTAに関するアンケート調査を実施します。大阪大学におけるTA制度の実情や実施状況を知り、将来像についての認識や意見を収集し、今後の検討の基礎とすることが目的です。研究科などの各組織、TAを活用して授業を行っ

た教員、TA業務を担当した大学院生、以上が調査の対象となります。今回の調査に加えて、他大学の実状・動向調査、シンポジウムの開催、報告書の作成などにより、大阪大学の今後のTA等の制度設計などに反映するように検討を進めていきます。よりよい教育の実現のために、調査にご協力ください。

大学教育改革推進事業について

文部科学省の公募による大学教育改革推進のためのGP事業については予算が大幅に削減されており、本年度の大阪大学からの申請は採択されませんでした。

来年度の大学教育改革支援に関する予算も限定されたものになると思われますが、引き続き教育改革の計画を進めていただくようお願いします。

ファカルティ・ディベロップメント(FD)研修の開催

9月8日(水)に豊中キャンパス、9月17日(金)に吹田キャンパスで、全学FD研修が実施されました。今年で4年目を迎えた今回は、8日に寺崎昌男東京大学名誉教授による「大学改革とFD・SDの役割」、17日に潮木守一名古屋大学名誉教授による「ヨーロッパでの大学改革の示唆するもの」と題するご講演をいただきました。ともに現在の大学が置かれた状況と課題について、広い視点から明快に分析していただきました。

本年度も昨年度と同じく全学FD研修の時間を半日とし、研修後半の分科会については受講者による選択を可能としました。研修Aとして「教育の国際化」に関する授業のための事例研究、研修Bとして共通教育賞等の受賞者による「大阪大学におけるすぐれた授業実践」、研修Cとして「対話・体験を活用した学び」という3つのテーマによる分科会を組織し、そこから選択していただきました。

本年度の参加者は豊中キャンパスで114名、吹田キャンパスで81名のほか、職員も出席しました。

上記の寺崎・潮木両先生の講演、共通教育賞・共通教育賞特別賞の受賞者による授業実践の紹介、及び教育・情報担当理事による本学の教育理念と改革についての説明は、阪大ポータルサイトのWebCTを通じてビデオで視聴することができます。FD研修に参加されなかった方々も是非ご覧下さい。

今回のような研修に参加することは、ファカルティ・ディベロップメント(FD)への第一歩にすぎません。FDとは研修のことではなく、個々の教員が教育の能力を高め開発する不断のプロセスを意味します。今後もさまざまなFD活動を実施しますので、積極的にご参加ください。



大学院高度副プログラムの履修状況

修了要件 30 単位に加えて 8 単位のプログラムの履修により総長名の修了認定証が発行される「大学院高度副プログラム」は、大阪大学の個性が現れた特徴的なプログラムとして高く評価されるようになっています。とくに、高度の専門家や職業人を養成することが大学の使命であるにしても、特定専門分野の知識だけをもった学生を養成すべきなのか、多様な知識や複眼的な視野をもった人材を養成すべきではないか、コミュニケーション力など社会人としての能力が重要ではないか、という議論はますます強

まりつつあります。

平成 22 年度の大学院高度副プログラム等の履修状況は下表の通りです。履修者が多数にのぼる研究科や、多数の研究科の学生が混在して履修するプログラムなど、本プログラムの趣旨を実現している例が多数みられますが、さらに多くの学生の積極的参加が必要です。来年度からは修了要件 30 単位に加えて 14 単位を必要とする、「副専攻」制度も始まります。こうした制度の発展のために、皆様の協力をお願いします。

平成 22 年度 大学院高度副プログラム申請者数（1 学期）

プログラム名称	提案部局	受講対象者	課程	文学	人間科学	法学	経済学	理学	医学系（医）	医学系（保）	歯学	薬学	工学	基礎工学	言語文化	言語社会	国際公共	情報科学	生命機能	高等司法	連合小児発達	小計	合計	備考
1 ERASMUS MUNDUS英語授業・現代日本論	文学研究科	M・D	M																			0	0	
2 アート・メディア・テクノロジー入門講座—理論と実践	文学研究科	M	M	3			1	1					1		1							7	7	
3 医学修士の健康医療問題解決能力の涵養	医学系研究科(医科学専攻)	M	M						11	1												12	12	
4 高度がん医療人材育成プログラム	医学系研究科(保健学専攻)	M・D	M							1												1	1	
5 まちづくりデザイン学	工学研究科	M	M		2								12									14	14	
6 環境リスク管理学	工学研究科	M	M		1			1					6	1				2				11	11	
7 高度溶接技術者プログラム	工学研究科	M・D	M										22									22	22	
8 学際光科学	工学研究科	M・D	M					4					12	1								17	17	
9 光通信及びフォトニックネットワーク工学	工学研究科	M	M																			0	0	
10 認知脳システム学	基礎工学研究科	M・D	M		5								15	6				2				28	38	
11 言語情報処理の手法と展開 (旧応用自然言語処理理論と技術)	言語文化研究科	M・D	M		6				1				3									10	10	
12 グローバルリーダーシップ・プログラム	国際公共政策研究科	M・D	M										1	1								2	2	
13 IT Spiral	情報科学研究科	M1	M															10				10	10	
14 高度情報ネットワーク実践スペシャリスト	情報科学研究科	M	M															1				1	1	
15 感染症学免疫学融合プログラム	微生物病研究所	D	M																			0	0	
16 インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践	国際教育交流センター	M・D	M		1														1			20	20	
17 臨床工学・情報学融合領域の人材育成教育プログラム：専門科	臨床工学融合研究教育センター	M・D	M						4	13		3	9	8				9				46	48	
18 臨床工学・情報学融合領域の人材育成教育プログラム：高度職業人育成科	臨床工学融合研究教育センター	M・D	M						1	3	6	1	1									12	12	
19 コミュニケーションデザイン	コミュニケーションデザイン・センター	M・D	M	3	7		2	5	2	5			7	12				4	1			48	55	
20 金融・保険	金融・保険教育研究センター	M・D	M				24	33					2	18				8				85	90	
21 グローバル共生	グローバルコラボレーションセンター	M・D	M		6					3	4					5						18	19	
22 人間の安全保障と開発 (旧人間の安全保障・社会開発)	グローバルコラボレーションセンター	M・D	M		21	1	4	1	3	5		3	2		4		1	1				46	49	
23 司法通訳翻訳論	グローバルコラボレーションセンター	M・D	M		7	5			1			1					2					19	20	
24 現代中国研究	グローバルコラボレーションセンター	M・D	M		4	3	1			1					1							10	11	
25 サステナビリティ学	サステナビリティ・サイエンス研究機構	M・D	M		1				1				9					1				12	12	
26 ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム(博士前期課程高度学際教育)	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	M	M						11				25	21					1			58	58	
27 ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム(博士後期課程社会人特別選抜)	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	D	M																			0	0	
合計			M	6	55	9	32	57	28	36	0	8	124	68	22	0	3	38	2	0	0	488		
			D	1	9	0	3	1	20	0	1	1	6	1	5	1	0	1	2	0	0	52		
			計	7	64	9	35	58	48	36	1	9	130	69	27	1	3	39	4	0	0	540		

M・・・博士前期課程、修士課程、生命機能研究科博士課程1・2年生

D・・・博士後期課程、博士課程、生命機能研究科博士課程3年生以上

便宜上、高等司法研究科についてはDに計上

平成22年度大学説明会（オープンキャンパス）の実施

8月10日(火)から8月20日(金)にかけて、大学説明会（オープンキャンパス）が実施されました。11の学部ごとに、学部紹介、施設の公開、ツアー、模擬授業、在学生による説明等、それぞれの企画によるプログラムが実施されました。高校生、保護者などが全国から多数集まり、本年の参加者数総計は23,653人で昨年より4,900人増え、26.1%という高い増加率となりました。

優秀な学生人材が多数志願することは、大阪大学の発展にとってなにより重要です。そうした学生が大阪大学の教育研究と学生生活、またキャンパスや施設や設備について直接知る機会として、大学説明会はいへん貴重な機会です。一層充実した説明会となるよう学部ごとの検討をお願いします。

このほか、理事・副学長や入試委員会委員の教員、

入試課職員が、全国各地で説明会や進学ガイダンスに参加し、大阪大学がより広く深く理解されるよう努めています。本誌41ページの記事をご覧ください。



就職とキャリア形成

阪大NOW 6月号(2010 / No.118)でお知らせしたように、大学設置基準の一部改正(平成23年4月1日施行)により、学生の資質向上や社会的・職業的自立のために必要な能力を、教育課程や厚生補導を通じて培うことができるよう大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えることが要求されています。また、本誌8月号でお知らせしたように学校教育法施行規則等の一部改正が同じく平成23年4月1日付けで施行され、大学ごとに就職者数や進学・就職等の状況を公表することが義務付けられます。

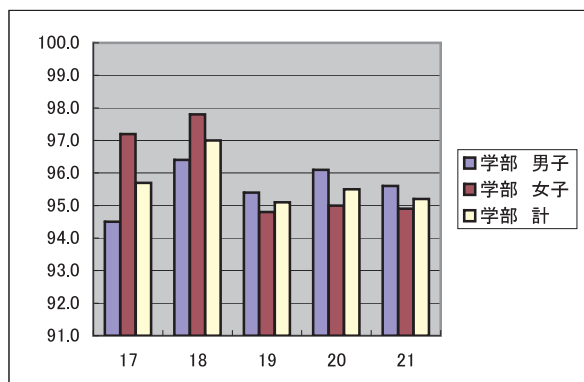
大阪大学の過去5年の就職状況は、平成22年4月1日時点での数値を含めて別表の通りです。

全国的に学生の就職が困難な状況となっていますが、この調査によれば、博士後期課程を除いて大阪大学ではあまり大きな変化は起こっていません。しかし今後も厳しい状況が続くことが予想されますので、

学生への一層の支援をお願いします。

その際、昨年10月に導入した「就職支援システム」と「進路・就職報告システム」を有効に活用するようお願いいたします。本誌64ページの記事をご参照ください。このシステムは、学生が就職に関連する情報収集をするためにも、また自分の就職内定などを報告し大学がデータを収集するためにも役に立ちます。残念ながら現時点では、学生の就職内定状況などについての入力率が低くとどまっています。上記のように来年4月からの法改正もありますので、各学部・研究科の就職担当者はこのシステムを有効に活用し、就職状況の体系的で網羅的な把握にリアルタイムで努めていただく必要があります。学生がこのシステムに積極的に入力・報告し、先輩の入力によって自分が助けられたと同じように自分の入力が後輩を助けるという循環が生まれるためには、教職員の指導と学生諸君の協力が必要です。

本学の就職率の推移(学部)

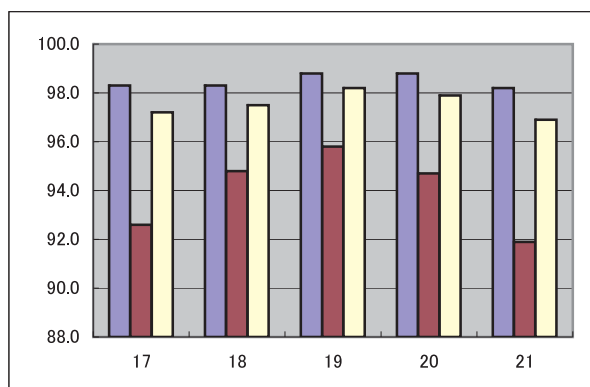


平成22年4月1日現在

	学部 男子	学部 女子	学部 計
17	94.5	97.2	95.7
18	96.4	97.8	97.0
19	95.4	94.8	95.1
20	96.1	95.0	95.5
21	95.6	94.9	95.2

(注) 医学部医学科、歯学部及び外国語学部夜間主を除く

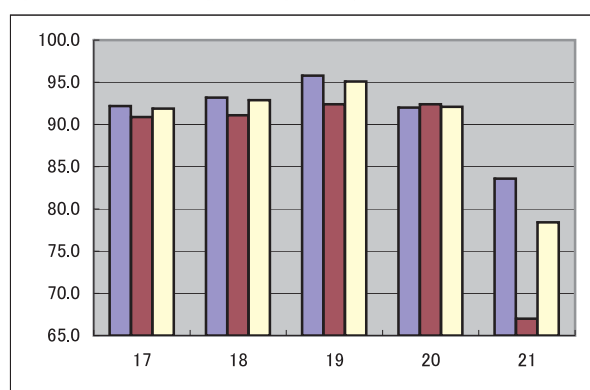
本学の就職率の推移(大学院・前期)



	前期 男子	前期 女子	前期 計
17	98.3	92.6	97.2
18	98.3	94.8	97.5
19	98.8	95.8	98.2
20	98.8	94.7	97.9
21	98.2	91.9	96.9

(注)医学系研究科、歯学研究科及び高等司法研究科を除く

本学の就職率の推移(大学院・後期)



	後期 男子	後期 女子	後期 計
17	92.2	90.9	91.9
18	93.2	91.1	92.9
19	95.8	92.4	95.1
20	92.0	92.4	92.1
21	83.6	67.0	78.4

(注)医学系研究科及び歯学研究科を除く

ステューデント・コモンズの受賞

昨年11月に、豊中キャンパスの大学教育実践センターに開設されたステューデント・コモンズが、第23回日経ニューオフィス賞「近畿ニューオフィス特別賞(アメニティ賞)」を受賞しました。詳しくは

本誌56ページの記事をご覧ください。さまざまな目的のために柔軟に使用することができるこの大阪大学独自のスペースを、自由な発想のもとに全学で有効に活用してください。

学生選書の実施

大阪大学未来基金(大学)の助成により、「学生選書ツアー」と「ウェブ選書」が実施されました。学生自身が書店やウェブ上で書籍を選び、未来基金から提供を受けた資金により附属図書館が購入する

ものです。これらの書籍には未来基金によることが明示されます。ご寄付をいただいた方々に感謝いたします。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ制度の開始

大阪大学は、関西地区の博物館や美術館と団体契約を結んでキャンパスメンバーズとなり、本学の学生や教職員が文化や芸術、科学や歴史に自由に接する機会を提供しています。これは大阪大学の理念としての「教養」の発展を目指し、いわば大阪大学キャンパスの延長として常時入場が可能となる施設を関西の各所に広げているものです。

平成22年10月1日から、吹田の国立民族学博物館へも大阪大学の学生・教職員の無料入館が可能となりました。これにより現時点でのキャンパスメン

バーズの制度の概要は下表の通りとなります。この制度の積極的な利用をお願いします。

大阪大学から国立民族学博物館に向かう際には、万博記念公園の自然文化園入口で学生証や教職員証(顔写真付き)を提示すれば、自然文化園の無料通行券が発行されます。これは国立民族学博物館への入館を目的とする場合のみ発行される通行券ですのでご注意ください。なお、公園東口ゲート横からは、自然文化園を通らず国立民族学博物館に入館することができます。

キャンパスメンバーズ加入状況

H22.10.1現在

区分	国立美術館	国立博物館	国立民族学博物館
制度内容	学校教育において美術館を有効に活用し、学生や教職員が美術に親しむ機会をより豊かにすることを目的とした制度です。	国立博物館と大学等とが連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する制度です。	国立民族学博物館と大学等との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした制度です。
利用施設	国立国際美術館（大阪市） 京都国立近代美術館（京都市）	京都国立博物館（京都市） 奈良国立博物館（奈良市）	国立民族学博物館（吹田市）
主な特典	本学学生（科目等履修生、聴講生、研究生等を含む。）及び教職員は、学生証又は教職員証の提示により、次の特典を受けることができます。 ①所蔵作品展無料観覧（何度でも可） ②特別展・共催展割引観覧（団体観覧料金（学生又は一般））	本学学生（科目等履修生、聴講生、研究生等を含む。）は、学生証の提示により、次の特典を受けることができます。 ①平常展の無料観覧（何度でも可） ※ゼミ等の引率教職員のみ、教職員証の提示により無料となります。 ②特別展の観覧料金割引（奈良：観覧料金 400 円、京都：団体（学生割引）料金） ※ゼミ等の引率教職員のみ、教職員証の提示により団体（一般割引）料金となります。	本学学生（科目等履修生、聴講生、研究生等を含む。）及び教職員は、学生証又は教職員証の提示により、次の特典を受けることができます。 ①展示の無料観覧（何度でも可） ※一部特別展では入館料が必要となる場合があります。 ②ミュージアム・ショップの割引利用
加入時期	平成 20 年 12 月 1 日	平成 20 年 12 月 1 日	平成 22 年 10 月 1 日

グローバル 30 学部・大学院英語コースの入学式

10 月 1 日に、グローバル 30 学部・大学院英語コースの入学式が、関係部局長の出席のもとで行われました。グローバル 30 プログラムにより設置された、理系の学部コース「化学・生物学複合メジャーコース」に入学した 13 名の留学生のほか、大学院の「統合理学特別コース」と「国際物理特別コース」に入学した 19 人の留学生が出席しました。詳細は本誌 50 ページをご覧ください。

なお、文系の「人間科学コース」は、平成 23 年秋に最初の学生が入学してスタートする予定で、現在入試やカリキュラム等の準備が進められています。



平成 22 年度卒業式・学位記授与式

平成 22 年度の卒業式・学位記授与式は、以下の通り大阪城ホールで行われます。

日 時：平成 23 年 3 月 25 日(金)

場 所：大阪城ホール（大阪市中央区大阪城公園内）
本年度も昨年度と同様、学部生の卒業式と大学院

修了者等の学位記授与式を一体化して執り行います。同伴者の方々にも会場に入場していただきます。本年度の卒業式での講話は、本学卒業の本学名誉教授で、文化勲章受章者・日本学士院会員の豊島久真男先生をお願いしています。

研究・産学連携室

学内プロジェクト「飛翔30」若手プログラム」の採択プログラム決定

“飛翔30”若手プログラムは、阪大NOW8月号(2010 / No.119)において、本制度の支援目的及び学内公募についてお知らせしました。

公募の結果、若手研究者(満37歳以下)から6分野(人文・社会科学系、数学・物理系、化学・材料系、工学・情報系、医学系、生物科学系)における総数が217件という多数の応募がありました。

本プログラムの選考は、本学を代表する研究者によって審査が行われ、その結果、下記のとおり採択プログラム30件を決定しました。

なお、下記採択者については、本学の若手研究者トップ30として“飛翔30”若手プログラム「飛翔研究フェロー」を10月6日(水)に授与いたしました。

「飛翔研究フェロー」一覧(30名)

分野	研究者		研究課題名
	氏名	所属	
人文・社会科学系	田中 沙織	社会経済研究所	時間割引機能の発達とその脳機構の解明
	宮崎 麻美	国際公共政策研究科	越境大気問題をめぐるネットワークによる「緩やかな制度」の形成・アジア太平洋の異種制度間相互作用の可視化に向けて・
	毛 新華	人間科学研究科	社会的スキル・トレーニングプログラムに関する通文化的検討
	山田 一憲	人間科学研究科	ニホンザルの寛容性に関する行動遺伝学的研究
	山本 和博	経済学研究科	集積とイノベーションの関連：空間経済学の動学的研究
数学・物理系	神吉 輝夫	産業科学研究所	室温ゆらぎを利用した新規情報伝達ナノ材料に関する研究
	高橋 篤史	理学研究科	ホモロジー的ミラー対称性と非可換ホッジ理論の研究
	伏屋 雄紀	基礎工学研究科	固体中ディラック電子によるエネルギー効率の高い伝導機構の開発
	若林 裕助	基礎工学研究科	表面×線回折法による有機デバイスの高度化
化学・材料系	是津 信行	工学研究科	半導体ナノ粒子の精密分散によるdeep-blue有機・無機ハイブリッドLEDの開発
	田中 克典	理学研究科	癌細胞上での革新的化学反応を基盤とした“生きている動物内”での癌転移の可視化と制御
	谷口 正輝	産業科学研究所	単一分子デバイスの熱物性
	田原 一邦	基礎工学研究科	外部刺激による空孔サイズ制御型二次元多孔性分子ネットワークの構築
	鷹巣 守	工学研究科	不活性化学結合の直截変換を可能にする触媒反応の開発
	柳田 剛	産業科学研究所	自己組織化酸化ナノワイヤによる極微グリーンデバイスの探索
工学・情報系	菅原 武	基礎工学研究科	温和な条件における分子状水素貯蔵媒体の探求
	清 和成	工学研究科	水生植物の根圏で特殊微生物が集積・活性化されるメカニズムの分子生物学的解析
	橋本 昌宣	情報科学研究科	乱数品質を保証するオンチップ物理乱数発生器の研究
	藤岡 慎介	レーザーエネルギー学研究センター	次々世代高集積半導体製造用の6nm帯軟X線光源の高効率化に向けた基礎研究
	松山 智至	工学研究科	空間分解能30nmを持つアクロマティック硬X線顕微鏡の開発
医学系	櫛引 俊宏	工学研究科	光技術を用いた細胞機能制御に関する研究
	西野 邦彦	産業科学研究所	多剤排出蛋白質による細菌機能制御解明と人工的制御法開発
	馬場 義裕	免疫学フロンティア研究センター	ストア作動性カルシウム流入シグナルソームの分子機序と生理機能
	藤田 盛久	微生物病研究所	GPI アンカー型蛋白質の構造変化と選別輸送シグナルの解明
	山本 雅裕	医学系研究科	トキソプラズマ原虫ROP18による宿主自然免疫攪乱機構の解析
生物科学系	田中 秀明	蛋白質研究所	謎の巨大粒子ボルトの全立体構造決定から機能解明への道を切り開く
	船戸 洋佑	蛋白質研究所	CRMP2の酸化を介したセマフォリンシグナル伝達の新規メカニズムの解明
	古澤 力	情報科学研究科	ラボオートメーションによる人工進化実験を用いた有用微生物創成プラットフォーム
	堀 雄一郎	工学研究科	ヒストン修飾酵素の活性を検出する蛍光プローブの生物応用
	柳澤 琢史	医学系研究科	多チャンネル脳磁計による神経義手の開発と神経難病への応用

最先端ときめき研究推進事業「ときめき研究アワード」を授与

総長室において、最先端ときめき研究推進事業の採択者に「ときめき研究アワード」を授与し、鷲田総長、西尾理事・副学長とを交えた懇談会を実施しました。

懇談会では、鷲田総長から採択者に対して、本学の次世代を担う若手研究者としてときめきを持って研究に取り組んでほしいとの期待が寄せられ、各採択者からは超領域的なグループ研究に対する抱負等が語られるなど、和やかな雰囲気のもと懇談会が行われました。



研究推進・産学連携スタッフディベロップメント講演会開催

産学連携推進本部は、9月8日(水)に研究推進・産学連携スタッフディベロップメント講演会「研究推進・産学連携業務の今後と大学職員の役割」を開催しました。

会場の銀杏会館ホールが本学職員に加え学外からの多数の参加者により満席となる中、馬場章夫本学総長補佐の挨拶に始まり、文部科学省技術移転推進室の橋爪 淳室長の講演「産学官連携の現状と今後の展望」、広島大学 高等教育研究開発センターの山本 眞一センター長・教授による特別講演「研究管理に従事する大学職員の能力開発」へと続きました。山本教授は、今後の職員の役割として 経営・管理・運営への参画や、教育・研究の企画・支援、教員との協働を挙げ、プロ職員養成の必要性を説かれ



ました。

後半のセッション「研究推進・産学連携業務における大学職員の役割」では、まず、東京農工大学産学連携・知的財産センターの伊藤 伸教授から、中期計画に 専門性を有する職員が長期安定的に活躍できるよう戦略的な人事異動を行うこと、職員を国際イノベーション人材として育成することを掲げ、英国の大学で研修を行った事例が紹介されました。また、立命館大学研究部の中谷吉彦部長・教授は、スタッフの資質として理系分野に対する興味は必要だが専門知識は必要ではないとし、四つのワーク（フットワーク、ネットワーク、チームワーク、フレームワーク）を遂行できる人材を育成すべきと説かれました。続いて、静岡大学産学連携チームの鈴木健太主査からは、この分野では自らが関わった事例がマスコミで取り上げられたりすることが多く、これがモチベーションアップの一因となっていること、新たな業務、課題が次々に生じていること等、経験に基づいたエピソードが語られました。財団法人全日本地域研究交流協会の馬場裕二主任調査研究員からは、コーディネータ等の多くが任期付である現状において、職員を戦力化するために各大学での教育等が求められるが、現実に実施している大学は少数に留まっている等の分析結果が示されました。

最後に、鈴木達也本学研究推進部長が総括を行い、盛況のうちに散会となりました。

文部科学省「大学等産学官連携自立化促進プログラム」の 中間評価で最上位の「S」評価を獲得

本学は、平成20年度から実施しております文部科学省「大学等産学官連携自立化促進プログラム」の中間評価において、最上位の「S」評価を獲得しました。

本学産学連携推進本部は、平成20年度から実施しているこのプログラムの「国際的な産学官連携活動の推進」に採択され、実施して参りましたが、海外企業との共同研究・受託研究数、MTA（Material Transfer Agreement）数等の実績、国際ユニットを各部の活動に横断的に関与させている点や、シーズ育成を予算的に支援する制度（GAP FUND）等が高く評価され、S、A、B、C、Dの5段階の最上位である「S」評価を獲得しました。

る「S」評価を獲得しました。

本プログラムは、大学等の研究成果を効果的に社会につなぐため、国際的な産学官連携活動や特色ある産学官連携活動の強化等を国として支援することにより、大学等が産学官連携活動を自立して実施できる環境の整備を図ることを目的とするものです。

今後は、先端的な技術シーズのインキュベーションによる事業化に重点を置き、本学海外拠点の活用、外国政府との緊密な連携、テクノアライアンス棟（平成23年度供用開始予定）の積極的活用により、国際産学官連携活動を推進して参ります。

平成23年度科学研究費補助金説明会を3地区で開催

本学では、今年度も、吹田、豊中、箕面の3地区において説明会を開催しました。

今年度は、相談員として登録いただいている教員が、科学研究費補助金制度の概要に加え、研究テーマの選び方・計画調書の書き方のポイントについて、講演を行いました。

なお、同説明会では、「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」に基づく競争的資金等の不正使用防止についての説明を併せて行うことで、本学教職員の不正防止への取り組みに係る理解増進と問題意識の向上を図っています。



評価室

部局達成状況評価（確定評価）の実施

部局達成状況評価は、各部局が自己点検・評価をもとに作成した「部局年度計画達成状況評価シート」に基づいて、評価室が各部局の年度計画に対する達成状況の評価を行うものであり、各部局の中期目標・中期計画を達成するための支援、及び各部局の教育研究活動等の展開をより一層図っていただくことを目的としています。

なお、今年度は「平成21年度及び第1期中期目標期間に係る達成状況評価（確定評価）」となっており、これについては、各部局からの意見を踏まえて、11月下旬に、確定版として送付する予定です。

各部局におかれましては、本評価書の内容を踏ま

えて、中期目標・中期計画の達成度の確認を行っていただくとともに、次年度計画の策定等に活用していただくよう、お願いします。

また、今年度は、より公正性、正確性等を高めた達成状況評価の構築に向けて、いくつかの部局を訪問して、「評価室と部局との意見交換」を試行として実施させていただきました。

来年度以降、この「評価室と部局との意見交換」を本格実施するかどうかは、今回試行の検証を十分行った上で、評価室において、今後検討していきたいと考えております。

「平成22年度計画部局達成状況評価シート」作成等に係る説明会の実施



第2期中期目標期間における国立大学法人評価については、国立大学法人評価委員会より、その方向性が示され、評価方法の簡素化等、改善が図られました。

一方で、留意点として、着実な自己点検・評価の実施、教育研究活動等の情報の公表促進等が求められたことから、「H22業務実績報告書作成検討WG」を設置し、大学としての対応方針の検討を行いました。

その後、WGでの検討結果を踏まえて、9月27日(月)にコンベンションセンターにおいて、各部局の達成状況評価シート作成担当教員及び事務担当者を対象に「平成22年度計画部局達成状況評価シート」作成等に係る説明会を開催しました。

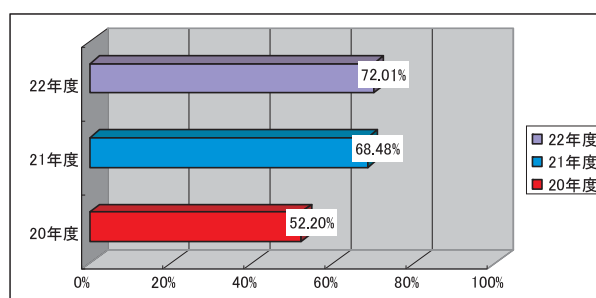
教員基礎データの更新状況

教員基礎データは、本学に所属する教員の教育研究等の諸活動を示す基本データであり、本学ホームページ上の「研究者総覧」に掲載し、広く社会に公表しているものです。

今年度の上半期終了時（9月30日現在）における教員基礎データ更新率は、下表のとおりとなっております。

ります。

各教員におかれましては、ご自身の教育研究等の諸活動について、もれなく、また、常に最新のデータに更新いただきますよう、引き続きご協力をよろしくお願いいたします。



※1：基準日：各年度の9月30日現在

※2：更新率＝更新人数（教員基礎データにおいて、データを登録・更新した人数）÷更新率算出対象者数（教員基礎データ収集対象教員等の人数）

財務室

平成22年度予算補正（第1次）について

平成22年度予算補正（第1次）（案）が承認されました。その内容は、国際化拠点整備事業（G30）における留学生獲得方策である「超短期プログラム」の特別聴講学生に係る授業料、参加費の徴収が今年

度後期より新たに行われることに伴う予算補正並びに間接経費増額等に伴う戦略的経費等の予算補正を行うものであります。

平成22年度 予算補正（第1次）

大阪大学
（単位：千円）

区 分	当初予算額	補正額	改予算額	備 考
収 入				
運営費交付金	49,891,496		49,891,496	
授業料、入学科及び検定料収入	13,343,204	1,210	13,344,414	個別収入対応経費へ充当
附属病院収入	29,995,203		29,995,203	
雑収入	1,083,772	4,492	1,088,264	個別収入対応経費へ充当
計	94,313,675	5,702	94,319,377	
寄附金収入	3,597,546		3,597,546	
産学連携等研究収入	23,060,637	1,862,020	24,922,657	うち全学的間接経費分198,813千円を戦略的経費等へ充当
著作権及特許権等収入	65,387		65,387	
計	26,723,570	1,862,020	28,585,590	
施設整備費補助金	7,599,199		7,599,199	
国立大学財務・経営センター施設費交付金	122,000		122,000	
長期借入金	1,419,130		1,419,130	
計	9,140,329	0	9,140,329	
合 計	130,177,574	1,867,722	132,045,296	
支 出				
人件費	46,954,210	181,052	46,773,158	戦略的経費等へ充当
役員人件費	216,981	923	216,058	
教員人件費	28,537,940	118,832	28,419,108	
職員人件費	14,408,858	61,297	14,347,561	
退職手当	3,790,431		3,790,431	
物件費	49,502,918	385,567	49,888,485	
管理運営経費	8,014,994		8,014,994	
教育研究基盤経費	6,911,301		6,911,301	
診療経費	18,407,777		18,407,777	
事項指定経費	541,271		541,271	
個別収入対応経費	1,408,537	5,702	1,414,239	
概算要求事項経費	10,475,636	22,438	10,453,198	戦略的経費等へ充当
戦略的経費等	3,743,402	402,303	4,145,705	
計	96,457,128	204,515	96,661,643	
寄附金支出	3,567,546		3,567,546	
産学連携等研究費	20,947,184	1,663,207	22,610,391	
著作権及特許権等経費	65,387		65,387	
計	24,580,117	1,663,207	26,243,324	
大型特別機械整備費	150,000		150,000	
病院特別医療機械整備費	373,960		373,960	
施設整備関係経費	8,616,369		8,616,369	
計	9,140,329	0	9,140,329	
合 計	130,177,574	1,867,722	132,045,296	

注）今後の人件費所要額減による予算額、資金運用による運用益、学内貸付制度に係る利息分及び全学的間接経費増加額については、総長の決定により戦略的経費等へ組み入れることとする。

平成22年度教育研究等重点推進経費の執行計画について

「教育研究等重点推進経費」の第4次執行計画（案）が承認されました。採択事業は以下のとおりです。

第4次執行計画

部 局 等 名	事 項 名
研究・産学連携室	飛翔30'若手プログラム
執行計画額	計 90,000 千円

財務面からの検証について

財務室では、8月上旬から10月初旬にかけて、複数年度継続して実施され既に終了している事業並びに設備を導入した事業について、約90件の検証を行いました。これは、阪大NOW 8月号（2010 / No.119）



検証風景（基礎工学研究科）

に掲載しました「第1期中期目標期間において戦略的経費等で措置した事業の検証について」に基づくものです。今後、検証結果をとりまとめ、11月の部局長会議に報告する予定です。



検証風景（医学系研究科）

人事労務室

特例職員採用試験（第2回）実施について

阪大NOW 6月号（2010 / No.118）にて既にお知らせしているとおり、このたび、特例職員採用試験（第2回）の筆記試験を10月9日（土）に実施することとし、その募集要項を学内に公表したところ、多

くの応募がありました。

今後、面接試験を経て、選考の上、11月30日（火）に合格発表を行う予定です。なお、合格者については平成23年4月1日付けの採用を予定しています。

大阪大学功績賞の制定について

このたび、本学では、教員に対する新たなインセンティブ制度として、大阪大学功績賞を制定いたしました。

大阪大学功績賞は、これまでの「教育」と「研究」に対する功績を対象とした「教育・研究功績賞」と「教育・研究功績にかかる昇給」の2つの制度を発展的に解消し、「社会・国際貢献」、「管理運営」に対する功績を加え、広く教員の功績を顕彰する制度です。これは、「教育部門」、「研究部門」、「社会・国際貢献部門」、「管理運営部門」のそれぞれの部門におけ

る功績が特に顕著な教員を顕彰する「功績賞」のほか、極めて権威のある表彰を受けた者又はそれと同等以上の功績がある者に「特別賞」を授与するというものです。

選考は、年1回、毎年4月から3月の間の功績を対象として、理事、総長補佐、部局長からの推薦に基づき、選考委員会において行います。

受賞者に対しては、表彰状のほか、副賞を授与することとし、毎年夏頃に表彰を行う予定としております。

平成22年度第1回男女共同参画セミナーの開催について

多様な人材活用推進本部・男女共同参画推進オフィスは、国立大学の中でも男女共同参画の推進について先進的な取り組みを実施している東村博子名古屋大学男女共同参画室長と朴木佳緒留神戸大学前男女共同参画推進室長を講師としてお招きし、9月22日(水)に平成22年度第1回男女共同参画セミナーを開催しました。

当日は、本学からは、関係部局長、多様な人材活用推進本部委員、男女共同参画推進オフィス室員のほか、多数の教職員や学生が参加しました。

両講師からは、女性研究者の採用加速や、ワーク・ライフ・バランスの取組み、意識啓発などについて、実際の苦労談なども交えながら、具体的にそれぞれの大学の状況について講演していただきました。

特に、女性研究者の採用加速について、両大学は今年度から科学技術振興調整費「女性研究者養成システム改革加速」(以下「加速プログラム」)に採択されていることから、「加速プログラム」への申請

に当たっての各大学内での調整における苦心や、実効性のある女性研究者の採用方法の工夫などについての詳細な講演があり、講演後も女性研究者の具体的な公募方法などをめぐり、活発な意見交換や質疑応答が行われました。

本学も来年度に向けて「加速プログラム」の採択を目指しており、両大学において採択に向けての中心的役割を担われた方々と直接情報を交換できたことは、大変貴重な機会となりました。



広報・社会学連携室

「卒業生の集い」

昨年度、初めて開催いたしました「卒業生の集い」ですが、今年も12月17日(金)に「第2回大阪大学卒業生の集い」としまして東京の学士会館にて開催いたします。

この「卒業生の集い」は、関東地方に在住される本学同窓生の皆様が、旧交を温めて頂く場として今年もご提供させていただきます。



昨年の様子

「OSAKA 光のルネサンス」

毎年12月に、中之島地区で開催される「OSAKA 光のルネサンス」に、本学は今年も参加します。

中之島センターにおいて、12月11日(土)から12月25日(土)の17時から22時までの期間でライトアップを予定しております。

また、今年も、12月1日(水)から12月10日(金)をプレビュー期間として、中央会場(市役所周辺、中之島公園通り)の一部では、イルミネーションが点灯されます。



O+PUS 稼動、1 周年

多目的ディスプレイ「O + PUS (オーパス)」の本格稼動が開始して1年が経過しました。

O + PUS は、学生へのイメージリテラシー教育の充実を図るとともに、学内のコミュニケーション活性化の新たなツールとして設置され、この1年間に「阪大百景」「VARIABLE CRITERION」のような映像コンテンツのほか、図書館情報やインフルエンザ対策等の学生への有益情報、「shutter buggy」等の学生が企画・制作したコンテンツなど、数多くのコンテンツが放映されました。

また、創立80周年記念事業の学生イベントとして「O + PUS 映像コンテスト」を実施いたします。この事業により、多くの学生が映像を通じ新たな世界

を感じ、より豊かな感性が育まれることを期待しています。



学生企画のインタビューの様様

国際交流室

海外における本学関連イベント

この秋は海外でのイベントが多く行われています。まず、阪大NOW 8月号(2010 / No.119)で紹介した大阪大学留学プログラム総合説明会・同窓会は9月4日にバンコクのホテルで、北京大学・大阪大学学術交流デーは9月20日から21日にかけて北京大学で開催されました。いずれも本学から多くの先生方が参加され模擬講義・講演・学部説明等を行っていただき、大阪大学の知名度を上げ、留学生のリクルート、共同研究に繋がる有意義なイベントでした。G30では京都大学が新しくベトナムのハノイに設置した海外共同利用事務所の開所式(9月17日)に、仁平教授(ベトナムとの交流促進WG座長)他3名が出席しました。今後、この共同利用事務所の活用を視野に入れています。また、大阪大学フォーラムは9月28日から30日まで、オランダ・グローニン

ゲン大学で Globalization and Conflict: Entanglement between Local and Cosmopolitan Orientations というタイトルで行われました。これらイベントのうち、バンコクとグローニンゲンには鷲田総長が参加され、バンコクでは約100名の参加者に総長から大阪大学の紹介の講演が行われました。大阪大学フォーラム参加に際しては、往路にアーヘン工科大学(基礎工学研究科がJSPS 日独共同大学院プログラムを実施中)学長を表敬訪問、さらに9月30日にはフランクフルト大学との大学間学術交流協定締結式を両大学学長出席の下で行いました。在フランクフルト日本国総領事館の重枝豊英総領事がフランクフルト大学に大阪大学を紹介されたのが協定締結へのきっかけであったとのことで、締結式に立ち会われました。



グローニンゲン大学とのつながり

本年4月にグローニンゲン大学の文系・理系の学生が、それぞれツアーを組んで来日し、大阪大学も訪問しました。文系の部では、本学の人間科学部の学生が対応し、グローニンゲン大学の学生と活発なディベートを行ったことは、本誌でも紹介されました。理系の学生は、歓迎パーティで鷲田総長に会い、また本学の医学部の黎明期にオランダから来日したエルメレンス先生の碑を訪れました（写真）。エルメレンス先生はグローニンゲン大学で医学の学位を得た後、1870年28歳のときに大阪医学校へ赴任され、以後、約7年間、医学の教育に熱心に取り組みました。帰国後38歳の若さで急逝されましたが、この知らせを聞いた門下生がこのことを悼み、寄付を集めて中之島に碑を建立（現在は吹田キャンパスに移設）し、同先生の業績を顕彰しました。今年、医学研究科はグローニンゲン大学の医科学部と大学間学術交流協定のもとでの部局間学術交流協定を締結し、インターンシップの学生交流を行うことになりました。エルメレンス先生の時代から約140年の期間を経て、医学分野での交流が再開されることになった、とい

う訳です。今回の大阪大学フォーラムでも実感されましたが、グローニンゲン大学の学長を始めとするトップの方々、研究者、スタッフが大阪大学との交流の進展に極めて協力的で、今後双方にとって有益な交流関係が確立されるものと期待できます。グローニンゲンに本学の海外拠点を置いた価値があったと言えるでしょう。



海外同窓会の会員増強についてお願い

大阪大学では、今後の国際レベルでの人材の育成、教育研究活動を支援し、また同時に、大学のグローバルなプレゼンス向上を図るため、海外拠点活動に取り組んでいることはご承知の通りです。これらの拠点では、海外で活躍されている大阪大学や旧大阪外国語大学の卒業生・関係者のネットワークを強力に形成するため、各拠点地域の同窓会活動のお手伝いを行うことをミッションの一つとして位置付けています。これまで明確な形では組織化されていなかった北米地域では、2006年1月に大阪大学北米同窓会が結成され、NPO法人として登録されております。また、同年には大阪大学タイ同窓会、大阪大学上海同窓会が組織されました。一方、欧州については対応が遅れていますが、今から一年以内に欧州での同窓会を設立しようと弘津グローニンゲンセンター長を中心として鋭意準備中です。

以上が現状ですが、大きな悩みは、海外に居住する大阪大学関係者の把握がなかなか難しい、という点です。名簿を利用することには種々の困難が伴いますし、長期出張されている場合でも、駐在期間が終了すれば帰国されるなどで、なかなか外国に一時的にでも居住されている方々を見つけることは難しいのです。このことについて海外拠点本部運営委員会でも議論しましたが、効果的な方法の一つはやはり本学関係者からの情報提供であろうと思われます。海外同窓会がより強力になり、大阪大学関係者の一層の活躍のための礎ともなりますので、皆様方のお知り合いで現在海外居住中の方を、差し支えない範囲で国際部国際連携課までご紹介下さいますようお願い申し上げます。なお、同窓会への参加勧誘については国際交流室・海外拠点本部のもとで個人情報の保護に十分注意して行います。

UR 都市機構との新しい住宅借り上げ方式について

外国人留学生・研究者の受入に際し、常に住宅確保が問題となります。最近では、外国人研究者用に春日丘ハウスが開設されたり、吹田キャンパスに隣接するJICA（国際協力機構）の研修用宿泊施設の利用なども進めています。今後、研究者・留学生の更なる増加が予想される中で、宿舍の確保は大きな課題です。最近、国際教育交流センターの近藤佐知彦教授を中心として、UR都市機構との間で新しい住宅の借り上げ方式が提案され、この秋からその方式で実際に借り上げを実施しています。その骨子は、UR都市機構が所有する物件を大阪大学が借り上げ、留学生にシェア（1戸の2DK集合住宅に2名入居）させて貸し出すもので、実際の運営・管理はUR都市機構・大阪大学とは別の管理会社に委託する方式

です。大阪大学の役割は、こうして確保した住宅に学生を斡旋して入居させることで、近藤教授の場合は、OUSSEP（短期留学受入プログラム）の学生の一部（20名）の宿舍をこの方式で確保するとしています。稼働率が極めて高くないと適用が難しいという難点がありますが、OUSSEPの場合は、プログラム自体の期間が11カ月であり、これまでの実績から、OUSSEPでは予定通り滞在しない学生はほとんどいないということ、また提供される住宅が青山台で吹田キャンパスに近いので、実施することになりました。幸い管理会社も見つけることができました。今後、外国人研究者・留学生受入れなどに関して、この方式が有効である場合があると思われます。詳しいことは国際部学生交流推進課にお問い合わせください。



創立 80 周年記念事業



原点へ 未来へ

大阪大学は 2011 年に創立 80 周年を迎えます



創立 80 周年記念事業パンフレットを作成しました。

このたび、創立 80 周年記念事業委員会では、本学の創立 80 周年を記念する事業について学内外に広く周知するために、本委員会の各実行委員会の協力を得て、パンフレットを作成しました。

パンフレットの表紙には、創立 80 周年記念のバナー、創学当時の中之島の写真を掲載しました。また、見開きには総長からのメッセージや記念事業等を、裏表紙には 2011 年の本学の創立記念日（5 月 1 日）を中心とした記念事業日程を掲載しています。さらに、学生イベントに関するチラシも別途作成し、パンフレットに挟み込んでいます。このパンフレットの詳細については、26 ページをご覧ください。

なお、パンフレットは、教職員・学生、企業、自治体、他大学等に配布するほか、近隣の駅等に配架する予定です。

大阪大学創立 80 周年記念事業

地域に生き世界に伸びる



中之島で生まれて 80 周年



パンフレット表紙

創立 80 周年記念ラッピングバス運行開始

4 月から豊中・吹田・箕面の 3 キャンパス間で運行しているスクールバスに、創立 80 周年記念事業社会学連携イベント実行委員会事業の一環として、本学が創立 80 周年を迎える事を広く知っていただくためにラッピングバス 2 台の運行を開始しました。

ラッピングバスは、平成 22 年 10 月 1 日から平成

23 年 5 月 31 日までの 8 ヶ月間、3 キャンパス間をシャトル運行し、本学が創立 80 周年を迎えることを学内外に広くアピールいたします。

大阪大学でラッピングバスが走るのは初めてのことです。ぜひ、そのデザインを確認してみてください。





大阪大学創立80周年にあたって

大阪大学は、江戸時代末期、商都・大坂の北船場にあった当時最高の蘭学塾「適塾」を原点とし、さらに遡って、大坂の学びの象徴「懷徳堂」の精神を汲みつつ、昭和6年（1931年）、大阪帝国大学として大阪の政財界や市民の熱烈なご支援をいただき産声をあげました。以来、「地域に生き世界に伸びる」というモットーのもと、わが国を代表する総合大学として多彩な教育研究活動を展開してまいりましたが、さらに新たな発展をめざし、平成19年（2007年）10月、外国語教育・研究の西の雄である大阪外国語大学と統合し、平成23年（2011年）に創立80周年の記念すべき年を迎えます。

本学では、創立80周年を迎えるにあたり、「原点へ・未来へ」を事業タイトルとして、さまざまな記念行事や公開講座などを大阪国際会議場（グランキューブ大阪）や本学発祥の地である中之島、さらに吹田、豊中、箕面の各キャンパスにおいて開催いたします。

教育研究活動のグローバル化が進むなか、今後も最高の学問の府となることをめざし、いっそう邁進してまいりますので、引き続き皆さまのご支援・ご協力をいただきますようお願いいたします。

大阪大学総長

菅田清一



創立80周年記念事業

2010年1月—2011年12月 <http://www.osaka-u.ac.jp/ja/80thAnniversary>

記念式典・祝賀会

- 国際交流懇談会【2011年4月】
- 創立80周年記念式典・祝賀会【2011年5月】
- 創立80周年記念公演（文楽上演）【2011年5月】
- 大阪大学会館竣工記念式典・祝賀会【2011年5月】

国際シンポジウム

- 創立80周年記念国際シンポジウム・シリーズ
創立80周年記念式典・祝賀会に平行して4件の国際シンポジウムを開催【2011年5月】（裏面参照）
 - ・ International Symposium on Cognitive Neuroscience Robotics【2011年5月又は6月（予定）】
 - ・ Bioinspired Materials and Functionality（仮称）【2011年6月（予定）】
 - ・ International Symposium on the Dynamics of Biosystems and Large Scale Information Systems【2011年7月（予定）】
 - ・ グローバル COE コンフリクトの人文学講演会（仮称）【2011年8月（予定）】

社会学連携イベント

- 司馬遼太郎記念学術講演会【2011年5月】
- 21世紀懷徳堂講座【2011年5月・秋期】
- ホームカミングデイ【2011年5月】
- ロボットシンポジウム（仮称）【2011年5月】
- 21世紀懷徳堂シンポジウム【未定】
- 適塾特別展【2011年6月】
- 天神祭船渡御「阪大船」【2011年7月25日】
- 適塾記念講演会【2011年11月】
- 大阪大学卒業生の集い（東京）【2011年11月又は12月】
- 緒方洪庵生誕200周年記念事業（総合学術博物館、医学部・

記念出版・展示

- 記念写真集「OU DAYS」（仮称）刊行
- 情報発信本「ときめきサイエンス」（仮称）刊行
- 展覧会・シンポジウム等「手塚治虫と大阪大学」（仮称）【2011年4月—6月】
- 創立80周年協賛事業：2011年度博物館秋季企画展 「脳と情報—このあやふやなもの?」（総合学術博物館・

産学官連携イベント

- 大阪大学プレジデント・サミット【2011年5月】
- 産業界との連携のあゆみ（展示）【2011年5月】
- ロボカップジャパンオープン2011大阪【2011年5月】（予定）
- オープンイノベーション・フォーラム in 大阪（仮称）【2011年9月】
- あしたへの夢—小中高生の未来予想のコンテスト—【2011年】（予定）

モニュメント構築

- 大阪大学会館整備【2011年3月】
- 銅像設置（旧制大阪高等学校同窓会寄贈）「青春の像」【2009年11月】※
- 銅像設置（旧制浪速高等学校同窓会寄贈）「旧制浪速高等学校生の像「友よ我らぞ光よと」」【2010年5月】※

学生イベント

- 創立80周年課外研究奨励費【課外研究期間：2010年6月—2011年3月、成果発表会：2011年5月】
- 学生企画による創立80周年記念広報事業
 - ・ 創立80周年イルミネーション【2010年12月—2011年5月（予定）】
 - ・ 創立80周年記念ペイント【2011年4月—8月】
- 創立80周年課外活動奨励費【課外活動期間：2011年4月—12月】

連携事業

- 懷徳堂記念会創立100周年記念シンポジウム
総合探求 21世紀市民の「学びのかたち」—懷徳堂記念会のこれまでの100年とこれからの100年—【2010年11月】※

The 80th Anniversary of the Foundation of Osaka University “Reflecting on the Origin, Looking to the Future”

Osaka University will celebrate the 80th anniversary of its founding in 2011. On this occasion, we will be reflecting on the origin and looking to the future of our university by holding a variety of events and open lectures at various locations— Osaka International Convention Center (Grand Cube Osaka), the university's birthplace in Nakanoshima, and at its campuses in Suita, Toyonaka and Minoh.

Osaka University draws its spirit from the *Kaitokudo*, once the main symbol of learning in Osaka, as well as from *Tekijuku*, the country's most renowned school of Dutch Studies of the Edo period. Osaka University was established as Osaka Imperial University in 1931 through the fervent support of the local political leaders, business communities and Osaka citizenry. More recently, Osaka University's research and education capacities were strengthened by the merger with Osaka University of Foreign Studies in October 2007. Under the motto of “Live Locally, Grow Globally”, Osaka University has become a leading national university of Japan and an academic institution of global caliber.

As we celebrate the 80th anniversary of our foundation, let us reaffirm our commitment to excellence with renewed vitality and vigor, not only in a national but also a global context. In this endeavor, we look forward to your continued support and cooperation.

President of OSAKA UNIVERSITY

K. Umeda



大阪大学会館

大阪大学の「原点」の一つである旧制浪速高等学校の校舎（豊中キャンパスの共通教育本館（イ号館）：登録有形文化財建造物）は、本学関係者の共通の思いを寄せる施設、さらには大阪における学術の伝統を受け継ぐシンボル「大阪大学会館」として生まれ変わります。

懐徳堂、適塾といった原点を意識し、大阪大学のモットーである「地域に生き世界に伸びる」のもと、未来指向の社会学連携、産学連携、国際連携などのさまざまな活動拠点として、この会館を活用します。

2010年9月1日現在

■ 一般の方が参加可能な事業です。但し、記念事業によっては事前の申込が必要な場合があります

■ 本学の教職員、学生やOB・OGが参加可能な事業です

■ その他 ※ プレイベント

- ・ International Conference on Martensitic Transformations 【2011年9月】
- ・ The 4th International Symposium on Atomically Controlled Fabrication Technology (仮称) 【2011年11月(予定)】
- ・ グローバル COE 生命環境化学国際会議 (仮称) 【2011年12月(予定)】
- ・ EDIS2011 (The 3rd Global COE International Symposium on Electronic Device Innovation) (仮称) 【未定】
- ・ The 4th Global COE International Symposium on Physiome and Systems Biology (仮称) 【未定】

このほかフォトリソグラフィ先端融合研究拠点が国際シンポジウムを開催予定【タイトル及び時期未定】

医学系研究科・連携事業) 【2010年4月ー7月】※

協賛事業) 【2011年10月ー12月】

■ 大阪大学イノベーションフェア2010 【2010年11月】※

■ 産産学ビジネスマッチングフェア2010 with 大阪大学 【2010年11月】※

■ 創立80周年記念大学祭シリーズ

- ・ いちよう祭 【2011年5月】
- ・ 夏まつり 【2011年7月】
- ・ まちかね祭 【2011年11月】
- ・ 中之島祭 【2011年11月】

■ 中之島ウォークラリー大会 【2011年5月】

- 世界に広がる大阪大学同窓会ネットワーク 【2011年5月】
- 学生支援に対する感謝状贈呈式 【2011年5月】
- 学生による高校生のための大学紹介 【2011年5月】
- オーパス映像コンテスト 【2011年5月】

大阪大学創立記念日（5月1日）を中心とした創立80周年記念事業日程

■ 一般の方が参加可能な事業です。但し、記念事業によっては事前の申込が必要なものがあります
 ■ 本学の教職員、学生やOB・OGが参加可能な事業です
 ■ その他
 2010年9月1日現在

2011年 4月30日〔土〕	■ 国際交流懇談会【リーガロイヤルホテル】
5月1日〔日〕	■ 創立80周年記念式典【大阪国際会議場】10:00-11:15 ■ 創立80周年記念祝賀会【大阪国際会議場】12:00-13:10 ■ 産業界との連携のあゆみ(展示)(於：創立80周年記念祝賀会)【大阪国際会議場】 ■ 学生支援に対する感謝状贈呈式(於：創立80周年記念祝賀会)【大阪国際会議場】 ■ 創立80周年記念公演(文楽上演)【大阪国際会議場】14:00-14:20 ■ 司馬遼太郎記念学術講演会【大阪国際会議場】14:30-17:30 ■ 国際シンポジウム「先進ナノバイオデバイスの新展開と環境・医療応用(仮称)」【大阪国際会議場】13:30-18:30 ■ 国際シンポジウム「第16回大阪大学—上海交通大学学術交流セミナー」【大阪国際会議場】13:30-18:00 ■ 大阪大学プレジデント・サミット【リーガロイヤルホテル】
5月2日〔月〕	■ 大阪大学会館竣工記念式典・祝賀会【豊中キャンパス：大阪大学会館】 ■ いちよう祭【豊中、吹田キャンパス】 ■ 国際シンポジウム「先進ナノバイオデバイスの新展開と環境・医療応用(仮称)」【大阪国際会議場】9:30-17:30 ■ 国際シンポジウム「第16回大阪大学—上海交通大学学術交流セミナー」【大阪国際会議場】9:30-17:00 ■ 国際シンポジウム「Dynamism of Immune Reactions & Regulation」【大阪国際会議場】9:30-16:30 ■ 国際シンポジウム「コトバと国家の1世紀」【大阪国際会議場】11:00-17:00 ■ 21世紀懐徳堂講座【大阪大学中之島センター(予定)】 ■ 世界に広がる大阪大学同窓会ネットワーク【大阪国際会議場】13:30-17:30 ■ 中之島ウォークラリー大会【大阪市北区中之島界隈】 ■ 創立80周年課外研究奨励費成果発表会【豊中キャンパス】
5月3日〔火・祝〕	■ いちよう祭【豊中、吹田キャンパス】 ■ 国際シンポジウム「Dynamism of Immune Reactions & Regulation」【大阪国際会議場】9:30-16:30 ■ ホームカミングデイ【豊中キャンパス：大阪大学会館】10:00-13:30(予定) ■ 21世紀懐徳堂講座【大阪大学中之島センター(予定)】 ■ 学生による高校生のための大学紹介【豊中キャンパス：大阪大学会館】 ■ オーバス映像コンテスト【豊中キャンパス：総合図書館】
5月4日〔水・祝〕	■ 21世紀懐徳堂講座【大阪大学中之島センター(予定)】
5月5日〔木・祝〕	■ ロボットシンポジウム(仮称)【サンケイホールブリーゼ】13:00-17:00





まちかね祭

平成23年11月4日(金)～6日(日)(予定)
豊中キャンパス
ステージ企画・模擬店・研究室開放など

中之島祭

平成23年11月20日(日)(予定)
吹田キャンパス
ステージ企画・模擬店・正田杯駅伝大会・
創立80周年記念大学祭シリーズフィナーレなど

11月

大阪大学創立80周年記念事業 学生イベント

10月

9月

8月

7月

6月

学生による高校生のための大学紹介

平成23年5月3日(火・祝)
豊中キャンパス 大阪大学会館

夏まつり

平成23年7月10日(日)(予定)
箕面キャンパス
ステージ企画・模擬店・盆踊りなど

創立80周年記念課外研究奨励費

成果発表会: 平成23年5月2日(月)
豊中キャンパス

O+PUS (オーパス) 映像コンテスト

エントリー期間: 平成22年11月1日～12月28日(予定)
コンテスト: 平成23年5月3日(火・祝)
豊中キャンパス 総合図書館ラーニング・commons

世界に広がる 大阪大学同窓会ネットワーク

パネルディスカッションなど
平成23年5月2日(月)
大阪国際会議場

2日

いちよう祭

平成23年5月2日(月)～3日(火・祝)
豊中キャンパス・吹田キャンパス
ステージ企画・模擬店・研究室開放など

学生支援に対する 感謝状贈呈式

平成23年5月1日(日)
大阪国際会議場

5月

中之島ウォークラリー大会

参加者募集期間: 平成22年12月～平成23年3月(予定)
ウォークラリー: 平成23年5月2日(月)

創立80周年記念課外活動奨励費

学生イベント募集期間: 平成22年7月20日～9月10日
学生イベント実施期間: 平成23年4月～12月

4月

2011

学生企画による創立80周年記念広報事業

中之島センター イルミネーション | スクールバス ラッピング
実施期間: 平成23年1月～5月(予定) | 実施期間: 平成23年4月～8月(予定)



阪大学生フォーミュラチームOFRAC 全国大会にて悲願の総合優勝!

工学研究科機械工学専攻准教授
(OFRAC チームファカルティアドバイザー)
吉田 憲 司

阪大学生フォーミュラチーム“OFRAC (Osaka-univ. Formula RAcIng Club)”(<http://ofrac.net/>)は、第8回全日本学生フォーミュラ大会(<http://www.jsae.or.jp/formula/jp/>)に参戦し、悲願の総合優勝を達成しました。

OFRACは工学部、基礎工学部の学部生、大学院生、工学研究科機械工学専攻の教員2名からなる28名の学生主導のクラブチームで、工学研究科附属フロンティア研究センターの学生推進プロジェクトや大阪大学課外研究奨励費のプロジェクトのテーマに採択されている活動です。

■ 大会概要

全日本学生フォーミュラ大会は(社)自動車技術会の主催で、学生の自主的なものづくりの総合能力を養成し育成の場を提供する公益・教育活動として毎年開催されています。本大会は2003年に第1回大会が開催されて以来、今年度で8回目の開催となります。今年度は9月7日(火)~11日(土)の5日間の日程で、昨年度に引き続き静岡県の小笠山総合運動公園エコパにて開催されました。全国から85チームのエントリーがあり、書類選考を通過した70チーム(国内64チーム、海外6チーム)が集い、熱い戦いが繰り広げられました。阪大チームOFRACは第1回大会から継続して参戦しており、一昨年度は総合6位、昨年度は4位と、参加チームが年々増加するなか着実に実力をつけ、今年度の大会ではついに悲願の総合優勝を勝ち取ることができました。

本大会は、学生が大学ごとにチームを組んで1年間かけて自らの手で企画・設計・制作したフォーミュラスタイルの小型レーシングカーを、持ち寄り、車両の走行性能のみならず、車両の設計能力、製作・コスト管理能力、プレゼンテーション能力など、ものづくりの総合力を競う、いわば「ものづくりコンペティション」です。



■ 大会初日

大会初日は製作した車両に対する車検が行われました。

車検は競技項目には入っていないのですが、車検に通過できない車両は3日目以降に実施される動的審査に一切参加することができず、厳しい第一ハードルともいえる重要なものとなっています。車両の安全性の確認、設計要件の適合の確認、緊急時に備えてのドライバーの5秒以内脱出試験、またブレーキ試験、騒音試験などが行われ、阪大チームは1回の車検で問題なく無事に車検を通過することができました。

■ 大会2日目

大会2日目の9月8日は台風9号が静岡県地方を直撃し、この影響を受けて大会会場でも一時避難指示が出されるなど、審査場所やスケジュールの変更を余儀なくされる事態となりましたが、このような状況下でも阪大チームは冷静に対応し、ケガ人を出したり、事故を起こすことなく無事に静的審査に臨むことができました。静的審査のうち、コスト審査では事前に提出しているコストレポートをもとに、車両製作に関わるコスト管理やコスト計算の正確性、レポートと実際の車両との適合性、また部品製造プロセスの知識を問う審査が行われました。コスト審査では、阪大チームは昨年度1位を獲得していましたので、連覇を目指して審査に臨みました。プレゼンテーション審査では自分たちの車両を製品として見立てて優れている点をアピールするプレゼンテーションに対する審査が、またデザイン審査では実車両ならびに事前に提出しているデザインレポートをもとに、車両の仕上がり具合や車両設計の工夫点・革新性、製作についての審査が行われました。



■ 大会 3 日目

大会 3 日目は、実際に車両を走らせて走行性能を競う動的審査のうち、アクセラレーション（直線 75m 加速性能評価）、スキッドパッド（8 の字旋回によるコーナリング性能評価）、オートクロス（約 800m コースの 1 周のタイムアタック）の各競技が行われました。各競技には、2 名のドライバーが 2 回ずつ合計 4 回の走行を行います。前日からの雨により路面には水たまりができており、小雨が降ったり止んだりの天候のもと、路面コンディションが良かった一瞬の晴れ間について阪大チームはアクセラレーションとスキッドパッドの競技に臨み、好タイムをたたき出すことができました。



■ 大会 4 日目

大会 4 日目にはエンデュランス（約 900m のコースを 20 周する耐久走行）と燃費審査が行われました。このエンデュランスは、マシンの耐久性と信頼性、またドライバーの正確なドライビング技術を要求され、毎年マシントラブル等により完走できないチームが数多くある、マシンにとってもドライバーにとっても大変厳しい競技です。この競技は 2 名のドライバーが途中で交代をはさんで各 10 周ずつ走行します。今年度の阪大チームのマシンは、コーナー脱出速度の向上を目標とした徹底的な低重心化とセミオートマ開発によりドライバビリティの向上、高エンジンパワー化・高効率化を達成し、耐久走行競技中には、全参加車両中の最速ラップを記録するなど絶好調でした。また両ドライバーもほとんどミスのない走行ができたため好成績をおさめることができました。

■ 大会最終日

大会最終日には、デザイン審査上位 5 チームによるデザインファイナル審査が行われました。デザインファイナル審査は全参加チームの前でマシンをお披露目しながら審査を受けるいわば晴れ舞台で、参加全チームの目標となっています。阪大チームは一昨年に引き続きこのデザインファイナル審査に残ることができ、自分たちの車両・設計について存分にアピールすることができました。その後に全体の集合写真撮影、表彰式が行われました。全参加車両・参加者の映っている集合写真では、阪大チームのライムグリーンの車両が最前列中央の一番目立つ位置に映っています。（<http://www.jsae.or.jp/formula/jp/img/2010groupphotob.jpg>）

■ 大会結果

今大会の阪大チームの成績は以下のとおりです。（エントリー 85 チーム中）

静的競技：コスト審査（1 位） デザイン審査（4 位）
プレゼンテーション審査（4 位）

動的競技：アクセラレーション（1 位）
スキッドパッド（3 位） オートクロス（15 位）
エンデュランス（3 位） 燃費（8 位）

これにより受賞した各賞は以下のとおりです。

・総合優秀賞 1 位（総合優勝）

・コスト賞 1 位

・加速性能賞 1 位

・スキッドパッド賞
3 位

・FISITA 賞、経済
産業大臣賞、静岡
県知事賞、日本自
動車工業会会長賞



なお、この結果は 9 月 21 日（火）に鷲田総長へ直接報告いたしました。



左から小泉潤二理事・副学長、池内祥人君、
吉田憲司准教授、奥西晋一君、久堀拓人君、鷲田総長

■ 最後に

今回念願の総合優勝を飾ることができたのは日頃のチーム学生の努力、ならびに関係者の皆さまのご支援ご理解の賜物です。阪大チーム OFRAC は工学部、基礎工学部の学部生、大学院生、工学研究科機械工学専攻の教員 2 名からなる 28 名の学生主導のクラブチームで、工学研究科附属フロンティア研究センターの学生推進プロジェクトや大阪大学課外研究奨励費のプロジェクトのテーマに採択され、ご支援いただいております。また活動場所には工学研究科機械工学専攻ならびに学生実習工場を提供いただいております。この場をお借りして活動をサポートしてくださるスポンサーの皆様や関係各位の温かいご支援ご声援に感謝申し上げます。次年度はディフェンディングチャンピオンとして臨む大会となりますが、新チームにも更なる活躍を期待します。



平成22年度 国公立大学附属病院医療安全セミナー

医学部附属病院では、6月15日(火)から17日(木)までの3日間にわたり、医療安全教育トレーニングプログラム開発事業プロジェクトによる「国公立大学附属病院医療安全セミナー」(文部科学省後援)を大阪大学コンベンションセンターにて開催しました。

このセミナーは、国公立大学附属病院において病院全体の医療安全を担う医師、看護師、薬剤師、事務職員等を対象として毎年実施しており、本年は全国から199名の参加がありました。

セミナーは福澤正洋医学部附属病院長の挨拶に始まり、新木一弘文部科学省高等教育局医学教育課長、渡辺真俊厚生労働省医政局総務課医療安全推進室長をはじめとする20名の講師による講演やパネルディスカッションを中心に進行了しました。

今年度は中心的なテーマとして、医療におけるノンテクニカルスキルと教育の実際を取り上げ、参加者からの反響も大きく熱心な意見交換が行われました。



小林宏之氏による講演

高橋りょう子助教(医学部附属病院中央クオリティマネジメント部)による「医療におけるノンテクニカルスキルの重要性」の講演では、医療事故で

妻を亡くした英国のパイロット、Martin Bromiley氏のDVD「Just a Routine Operation」(中央クオリティマネジメント部により日本語版作成)を用い、これまで医療界では大きく取り上げられることのなかったノンテクニカルスキルについて、その重要性が提示されました。

また、小林宏之氏(日本航空機操縦士協会副会長/元日本航空機長)による「航空界のCRM」の講演では、航空業界において「状況認識」「問題解決」「コミュニケーション」「効果的なチーム作り」等に代表されるノンテクニカルスキルが、1980年代から体系的に教育・訓練されていることなどが紹介されました。

Crew Resource Management: 航空業界における人的資源の管理。

これらの講演を受けて行われた、パネルセッション「医療における教育手法」【座長: 中島和江病院教授(医学部附属中央クオリティマネジメント部)、任和子部長(京都大学医学部附属病院看護部)】では、中村京太診療部長(横浜市立大学附属病院救急部)、森本剛講師(京都大学大学院医学研究科医学教育推進センター)、中島伸科長(国立病院機構大阪医療センター脳神経外科)、米井昭智主任部長(倉敷中央病院麻酔科)の4名を交えて、主に医療現場におけるノンテクニカルスキルに関する教育やトレーニング導入の可能性について、活発な議論が行われました。

参加者アンケートでは、「医療安全に対する知識を深めることができた」、「ノンテクニカスルスキルの教育に今後取り組みたい」等の高い評価を得ており、有意義な情報を伝達できたと考えております。

(医学部附属病院)

平成22年度 大阪大学社会教育主事講習の実施

人間科学部において、6月14日(月)~7月23日(金)に、平成22年度大阪大学社会教育主事講習が実施されました。社会教育主事講習は、文部科学省からの委託により、社会教育主事の職務を遂行するに必要な専門的知識、技能を修得させ、社会教育主事となりうる資格を付与することを目的として実施される講習です。

今年度は、近畿6府県から社会教育に従事している40名の参加がありました。

受講生の皆さんは、初日の自己紹介で不安や緊張を隠せない様子でしたが、最終日の班別演習では充実感あふれる笑顔が印象的でした。40日間、業務を離れて色々気掛かりもある中、その機会に活かされるものは多く、それぞれの府県から受講された方々とのネットワーク作りは学外研修のたびに深まり、意見を交わすごとに新たな気づきと溢れるアイデアの数々に驚き、「社会教育」の幅の広さを実



感して、いつもの業務がこれまでより身近で重要に感じられたと意欲的な感想をいただきました。また、楽しみにされていた学食や阪大グッズのおみやげ、学生生活も満喫していただけたようです。

(研究推進部研究推進課)

国際社会で活躍するためには 前UNESCO「行動する事務局長」松浦晃一郎氏 講演会開催

国際公共政策研究科は7月9日(金)、前国連教育科学文化機関(UNESCO)事務局長松浦晃一郎氏を招き、朝日新聞大阪本社、大阪大学国際公共政策学会、グローバルコラボレーションセンターと共催し、基礎工学研究科シグマホールにて、特別講演会「国際社会で活躍するためには」を開催しました。

松浦氏は外務省入省後、駐仏大使などを経て、1999年から10年間、UNESCOの事務局長を務められました。任期中には、米国のユネスコ復帰の実現や無形文化遺産保護条約や文化多様性条約など文化遺産保護に尽力し大きな業績を残した日本を代表する国際人です。本年からは、国際公共政策研究科の客員教授に就任されています。

講演では、『国際社会で働くためには、コミュニケーション能力、グローバルな視点、日本人としての自覚が必要である』と強調されました。また、大学教育期間中はもちろんのこと、生涯を通じて自ら学ぶ姿勢を持ち続けることの重要性も訴えられました。



定員を超える116名の参加者があり、『国連に就職するにはどのような準備をすればよいのか』、『事務局長時代に感じたジレンマや記憶に残るエピソードを紹介してほしい』など、活発な質問が相次ぎました。

(国際公共政策研究科)

理学研究科・理学部 ロゴマーク決定

理学研究科・理学部では、本研究科・学部のロゴマークを制定するにあたり、平成21年11月にデザインを公募したところ、教職員及び学生等36名から65点の応募がありました。

応募された作品の中から厳正な審査のうえ、篠木久美事務補佐員並びに堀口祥子事務補佐員によるユニット“Forest Breeze”制作の作品を選定し、デザイナーの協力のもと、平成22年7月15日(木)にロゴマークを制定いたしました。

8月19日(木)に開催された理学研究科・理学部オープンキャンパスの際には、本ロゴマークが印刷されたのぼりが立てられる等、今後、本研究科・学部の広報活動に広く活用されていくこととなります。



【ロゴマークコンセプト】

「知を拓き、未来へ紡ぐ」

理学とは、多様な自然の営みに誠実に向き合い、真理を探究していく学問である。その自然は元来、学問領域を超え、秩序だって調和している。この様を透明感のある球体として表現した。

広範な自然科学の素養、柔軟な発想力、豊かな社会識見を持つ『光る』人材を金色の“S”(Science)で表し、世界トップレベルの基礎科学研究を推進することで、人類の知に貢献する大阪大学理学部、理学研究科の姿をイメージした。

(理学研究科・理学部)

総長への表敬訪問

インドネシア・ガジャマダ大学の表敬訪問について

7月20日(火)インドネシア Gadjah Mada 大学 Sudjarwadi 学長、Tumiran 工学部長、Rachmat Sriwijaya 国際交流課長が、鷲田清一総長を表敬訪問しました。本学からは、辻穀一郎理事・副学長、原島俊生物工学国際交流センター長、松野明久国際公共政策研究科教授、有川友子国際教育交流センター教授、柴田祐工学研究科助教、江藤靖弘国際交流課長が同席し、将来、大学間協定を締結することについて、意思確認書を取り交わしました。その後、IC ホールにて Sudjarwadi 学長による大学紹介がありました。



意思確認書を取り交わす Sudjarwadi 学長と鷲田清一総長

インドネシア・ムハマジア大学の表敬訪問について

8月9日(月)インドネシア Muhammadiyah 大学 Bambang Setiaji 学長、H.Suyatno 同大学 UHAMKA 校学長、Muhammad Da'i 薬学部長が、辻穀一郎理事・副学長を表敬訪問しました。本学からは、平田収正薬学研究科副研究科長、鳩澤歩経済学研究科准教授が同席し、大学間学術交流の可能性に関する懇談が行われました。



中央左:辻穀一郎理事・副学長 右:Bambang Setiaji学長

ドイツ・Applied Sciences Augusburg大学の表敬訪問について

8月26日(木)ドイツ Applied Sciences Augusburg 大学 Joachim Vossiek 機械工学部長、Ingrid Hahn-Eisenhardt 国際交流エラスムスコーディネーターが、辻穀一郎理事・副学長を表敬訪問しました。本学からは、笠井秀明工学研究科教授も同席し、グローバル30についての意見交換と、Vossiek 教授が専門とされている環境テクノロジーや摩擦学等の分野での学術交流の可能性についての意見交換が行われました。



前列左より、Ingrid Hahn-Eisenhardt 教授、Joachim Vossiek 教授、Mr.Satoshi Doering (Applied Sciences Augusburg 大学学生)
後列左より、笠井秀明教授、辻穀一郎理事・副学長

台湾国立清華大学の表敬訪問について

8月31日(火)台湾国立清華大学 Lih-Juann Chen 学長、Ji-Jung Kai エネルギー環境研究センター施設長、Rong-Long Pan 生命科学部長、Wei-Chung Wang 国際交流部長が、鷲田清一総長を表敬訪問しました。本学からは、辻穀一郎理事・副学長、菊野亨国際教育交流センター長、亀岡雄国際部長、江藤靖弘国際交流課長が同席し、今年2月に学長に就任された Chen 学長からのご挨拶と、今後の両大学の活動についての意見交換が行われました。また、表敬訪問の前後には、免疫学フロンティア研究センター、微生物病研究所、サスティナビリティ・デザイン・センター、蛋白質研究所において、施設見学および各分野の研究内容と実績の紹介が行われました。



前列中央左: Lih-Juann Chen 学長
右: 鷲田清一総長

日独6大学学長会議開催

7月29日、30日に、日独6大学（大阪大学、京都大学、東北大学、ハイデルベルグ大学、ゲッチンゲン大学、カールスルーエ工科大学）の学長会議がハイデルベルグ大学の主催により開催されました。会議には、6大学の学長、副学長、教授、国際交流担当者など約100名が参加しました。この会議はドイツBosch財団からのサポートによるものであり、「日独6大学の学術研究協力のネットワークを作り上げる」ことを目的としています。このドイツ側3大学は、2007、2008年に選定されたドイツでの9つのExcellence Initiative（mediaでは9 elite universitiesのように呼ばれている）のうちの3大学であり、当6大学の連携は今後の日独の学術研究交流推進において先導的な役割を果たしていくことが期待されています。

会議初日は、ドイツ側、日本側6大学学長からの各大学の紹介から始まり、その後、学術研究交流の現状と今後の交流の進め方についての基調講演と討論のセッションが開かれた。

2日目は、9つの文系理系学術研究グループに分かれて

のグループ討論、研究発表などが実施されました。これらの研究討論会のテーマの多くはドイツ側からの提



案であり、参加者の研究成果発表に基づいて今後の共同研究、共同プログラム申請などが協議されました。この会議の最後に、今後の教育・学術研究上の連携に関する日独6大学学長会議のJoint Statementが披露され合同署名が行われました。最後のレセプションでは、神余・駐ドイツ日本大使からの激励のスピーチもありました。なお、今回の日独6大学連携の企画は、日独交流150周年記念行事の一つとして、ドイツ側ハイデルベルグ大学の音頭で実現に漕ぎつけたものです。

（国際部国際連携課）

第5回 APRU学部学生サマープログラムに参加

本学が加盟しているAPRU（Association of Pacific Rim Universities: 環太平洋大学協会）は、毎年、加盟大学の学生同士の交流を目的に学部学生サマープログラムを開催しています。今年は7月5日（月）から16日（金）までの間、去年に引き続きシンガポール国立大学で開催されました。対象者は「リーダーシップ」に関心のある学部学生で、大阪大学からは多数の応募者の中から選ばれた、外国語学部3年の庄山雪さん、法学部2年の大石真依子さんが参加しました。

多岐分野にわたる講義やワークショップのみならず、課外活動でも参加各国の学生と貴重な交流ができ、たくさんの収穫があったとのこと。今後もこういったプログラムに本学学生の積極的な参加を期待します。

サマープログラム概要

テーマ：“ising to New Challenges - Impactful Leadership in the 21st Century”

内 容：著名研究者・教員による講義と質疑応答、ワーク



ショップ、参加学生によるプレゼン、シンガポール観光（博物館、ナイトサファリ等）

他の参加大学：

南カリフォルニア大学、カリフォルニア大学、（デービス校、サンタバーナラ校）、ワシントン大学、メルボルン大学、シンガポール国立大学、香港大学、清華大学、オーストラリア国立大学、オレゴン大学、シドニー大学、北京大学、高麗大学校、中国科学技術大学、オークランド大学、香港科学技術大学、南京大学、チリ大学、国立台湾大学、インドネシア大学、マラヤ大学、京都大学、東北大学、東京大学 等

参加者数：49名

（大阪大学国際交流室のサイトに参加者のレポートが掲載されています。こちらをご覧ください。）

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/international/iab/index.html>

（国際部国際交流課）

AEARU Student Summer Camp 2010に参加

本学が加盟しているAEARU（:The Association of East Asian Research Universities : 東アジア研究型大学協会）は、毎年、加盟大学の学生同士の交流を目的に学部学生サマーキャンプを開催しています。今年は8月16日(月)から20日(金)までの間、浦項工科大学(POSTECH)・大韓民国で開催され、大阪大学からは多数の応募者の中から選ばれた4名(法学部3年のWOLFE Justinさん、外国語学部2年の伊藤延繁さん、外国語学部3年の山口七瀬さん、外国語学部4年の西村美峰さん)が参加しました。

キャンプ中に企画されていたワークショップでは、大阪大学メンバーは、“Education, the Key to Leading Northeast Asia”をテーマに「大学間遠隔教育プログラム」について発表し、多くの賛同・称賛を得られたとのことで



す。今後もこういったプログラムに本学学生の積極的な参加を期待します。

サマープログラム概要

テーマ：“How can Northeastern Asia Lead the World?”

内容：ワークショップ、ディスカッション、歴史的建造物や研究所・産業施設の見学、等

参加大学：15校

韓国科技術院、浦項工科大学校、ソウル国立大学、京都大学、東京大学、筑波大学、東北大学、東京工業大学、南京大学、復旦大学、北京大学、中国科学技術大学、清華大学(新竹)、香港科技大学、大阪大学

参加者数：53名、開催校スタッフ24名



(大阪大学国際交流室のサイトに参加者のレポートが掲載されています。こちらをご覧ください。)

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/international/iab/index.html>

(国際部国際交流課)

2010年 日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア

8月29日(日)、日韓両国政府の奨学金によって韓国の高校卒業生100名程度を日本の国立大学理工系学部に入入れる事業(日韓理工系学部留学生事業)の推進フェアが、韓



国ソウルの国立国際教育院で行われました。日本から29校(その他資料参加のみ3校)が参加した同フェアでは、同事業の第2次第2期筆記試験合格者150名とその保護者を対象に、日本側各大学が各々の研究・教育の特徴をアピールしました。

本学からは、留学生受入部局である理学研究科、工学研究科、基礎工学研究科の担当教員、そして受入事務を担当する国際部学生交流推進課の担当者が参加したほか、当日の通訳として、本学在学中の本事業学生(3期生、7期生、9期生の各1名ずつ)が参加し、各学部の特色等を熱心に説明しました。このほかにも、本学在学中の韓国人留学生1名、本学に留学経験のある韓国人学生1名、及び本年10月から来学予定の第2次第1期生6名のうち4名が応援に駆けつけてくれました。筆記試験合格者の多くが本学ブースを訪問し、盛況のうちにフェアは終了しました。

(国際部学生交流推進課)

学生支援ステーション

障害学生支援ユニット、『大学に花を咲かせよう! with エコ・レンジャー』を開催

学生支援ステーション障害学生支援ユニットでは、障害に関わる事柄をより身近な問題として考え直す機会を提供することを目的にカフェを開催しています。このたび、7



植え付けの様子

月22日(木)に、豊中キャンパスCMCプラザにおいて、ステーション・カフェ第5回『大学に花を咲かせよう! with エコ・レンジャー』を開催しました。

大阪大学では、多様な人材活用推進支援室の下、学内の清掃、園芸、駐輪整理といった業務の一部を知的障害のある職員の皆さん(エコ・レンジャー)が担っています。今回のステーション・カフェでは、豊中市で緑化活動を行ってられる「豊中緑化リーダー会」の皆さんに準備の段階からご協力を頂いて、エコ・レンジャーと一緒にCMCプラザの花壇にニチニチソウとコリウスの植え付けを行いました。当日は強い日差しの中での作業となりましたが、豊中緑化リーダー会の皆さんに教えて頂きながら、エコ・レンジャーと参加者がコミュニケーションを取りつつ、積極的に取り組んでいました。障害学生支援ユニットでは、今後、他のキャンパスでもエコ・レンジャーとの交流の機会を作っていく予定です。

(学生支援ステーション / 学生部キャリア支援課)

「第4回パンキョー革命(学生・教職員懇談会)」で共通教育を熱く語る!

8月6日(金)イ講堂にて「第4回パンキョー革命(学生・教職員懇談会)」を開催しました。このイベントは、共通教育のよりよい在り方を学生と教職員が対話をしながら、共に考えていくために企画されています。参加者は学生19名、教員16名、職員8名を数え、前回よりも多くの参加者を集めました。工藤眞由美大学教育実践センター長の挨拶の後、パンキョー革命推進チームによる「『教養』って何でしょうか?」のプレゼンテーションが行われました。それを踏まえて、学生・教員・職員別にグループに分かれて、それぞれ「教職員に対する要望・疑問」「学生に対する疑問・要望」についてのグループ討論を行い、日ごろ思っていることについて、お互いに率直な意見交換を行いました。

後半のグループワークでは、「学生+教員」「学生+職員」でグループを構成し、前半の議論で出された問題のいくつかをテーマとして設定しました。各グループで熱心な討論がなされた後、議論の経過と結論が発表されました。そのいくつかを紹介します。

「学生と教員双方の授業への取り組み方」のテーマでは、教員も工夫しているが限界があるので、学生も難しく考えずに素直に質問し、むしろ授業を乱すぐらいの反応が必要であることが話し合われました。「学生は授業に何を求めるか」のテーマでは、学生は面白さや広い視野を求め、教員は長期的視点から必要なことを教えようとする、教員にはいつの間にか勉強させられているような授業、学生



には「お客様の態度」の改善が必要であること等が報告されました。「学生と職員の交流」のテーマでは、双方とも交流したい気持ちはあるが、交流会には一部の人しか参加しない問題などについて議論され、日常的な交流の場の構築も必要であることが提案されました。

2時間以上に及ぶ熱い語らいは、さらに懇親会へと続き、多数が参加して最後まで盛り上がりました。懇親会では2月に刊行された「パンキョー革命提議書」で提示された改革案の進捗状況について、工藤センター長と学生メンバーの間で質疑応答があり、教育改善が進行中であることが示されました。今後、より多くの幅広い学生・教員・職員を巻き込みながら対話を継続し、さらに広がりのある取組にしていきたいと考えています。

(大学教育実践センター)

人権問題に関する講演会開催

人権問題に関する講演会が7月26日(月)に基礎工学研究科シグマホールにおいて開催されました。この講演会は、毎年7月及び12月に本学の人権問題啓発行事の一環として開催されているもので、今回は本学外国語学部非常勤講師の権 仁燮(クォン インソプ)氏を講師に招き、「私は何人? - 在日朝鮮・韓国人学生の思い - 」と題してご講演いただきました。

講演会では、権先生の講義を受講した学生たちの授業感想文を通じ、現代の日本における在日朝鮮・韓国人学生の抱える在日朝鮮人問題や今後の日本社会と在日朝鮮人との在り方等についてお話いただき、講演終了後には質疑応答が行われるなど大変有意義な講演会となりました。

当日参加した約80名の教職員・学生は最後まで熱心に聴講し、在日朝鮮・韓国人学生の問題に関する知識を深めることができました。



(総務部総務課)

株式会社パソナとの教育研究連携に関する協定に調印

国際公共政策研究科は、8月11日(水)に株式会社パソナとの教育研究連携に関する協定書に調印しました。調印式は、パソナ東京本社で行われ、国際公共政策研究科からは、松繁寿和研究科長、多胡圭一特任教授(本学名誉教授)と野村美明教授が、株式会社パソナからは南部靖之代表取締役が出席しました。

当研究科はパソナとの連携により、企業や国際機関などでトップを務めた著名人を講師に招き、世界で活躍するためのリーダーシップのあり方について語っていただく授業を10月に開講します。講義はパソナ東京本社と豊中キャンパスの2会場でインターネット回線を使って同時進行し、両会場の講師と受講者が意見交換も行える画期的な授業となります。活発な議論を通じ、主体的な人材養成を目指します。

今後も企業との連携を進め、教育・研究の一層の充実と学生の資質の向上を図り、人類が共有する公共的価値の実現のために地域や世界で活躍する高い倫理性とリーダーシップを備えた人材の養成を推進していきたいと考えています。

今後も企業との連携を進め、教育・研究の一層の充実と学生の資質の向上を図り、人類が共有する公共的価値の実現のために地域や世界で活躍する高い倫理性とリーダーシップを備えた人材の養成を推進していきたいと考えています。



協定書を取交す松繁研究科長と南部代表取締役



記者発表の様様

(国際公共政策研究科)

平成22年度 「生涯生活設計セミナー」(退職準備セミナー)開催

8月20日(金) 文部科学省共済組合・大阪大学主催、大阪教育大学・和歌山大学・国立民族学博物館・和歌山工業高等専門学校・国立国際美術館共催による平成22年度「生涯生活設計セミナー」(退職準備セミナー)が人間科学研究科において開催されました。



このセミナーは、定年退職を間近に控えた国立大学法人等の教職員並びにその配偶者を対象に行われたもので、退職に当たっての心構えや退職後の生活設計に必要な知識を提供することにより将来への不安を解消し、今後の社会生活、家庭生活の基礎づくりのための支援を行うことを目的として開催されたものです。今年度は、約70名の参加者があり、退職後の生活設計についての関心の高さをうかがわせました。

尾山理事による開会挨拶の後、財団法人教職員生涯福祉財団のセミナー推進員による退職後の「生活設計」「健康管理」「生きがい」「経済生活」など充実した内容の講義が行われました。

セミナー後に実施したアンケートでは、「まだ先のことと思っていたが、これを機によく考えていきたい。大いに参考になった。」「体験をまじえて講義をすすめていただいたので、実感できることが多くあった。」等の感想が寄せられました。

(総務部人事課)

第7回 行動経済学研究センターシンポジウム開催

8月25日(水)、『結婚と出産の経済学』をテーマに、社会経済研究所第7回行動経済学研究センターシンポジウムが、中之島センター佐治敬三メモリアルホールにおいて開催されました。

本シンポジウムは、平成16年に新しい学問分野である行動経済学の現代社会への有用性や魅力を、一般に紹介することを目的として始まりました。今まで取り上げてきたテーマには、神経経済学と呼ばれる脳科学と経済学の融合領域の研究結果の紹介(「脳科学と経済学の対話」)、肥満やダイエットに関わる経済学研究の紹介(「ダイエットと経済学」)などがあり、毎年、学生、研究者から一般の方まで、多くの方々に参加いただけてきました。

第7回目となる今回は、不況と結婚出産・少子化対策と経済成長をテーマに取り上げました。就職氷河期の卒業生の長期的な影響や景気変動と結婚出産についての研究で業績がある本研究所講師の近藤絢子氏と出生率と経済成長の関係や家族の経済学で業績がある名古屋市立大学大学院経済学研究科講師の木村匡子氏という二人の専門家の講演の



後、大竹文雄センター長の司会で一般参加者を含めて議論が行われました。会場からは多くの質問があり、質疑応答は約1時間続きました。来場者数は121名を数え、行動経済学に対する関心の高さが伺われるシンポジウムとなりました。

(社会経済研究所)

第60回 教職員懇親会開催

毎夏の恒例行事である教職員懇親会が8月31日(火)にアサヒビール株式会社吹田工場ゲストハウスにおいて開催されました。この懇親会は、昭和25年から続く伝統ある行事で、アサヒビール株式会社のご厚意により毎年行われているものです。第60回を迎えた今回は、本学から鷺田清一総長、小泉潤二理事・副学長、土井健史理事・副学長、門田守人理事・副学長、尾山眞之助理事・副学長、辻毅一郎理事・副学長、関順一郎監事をはじめ、名誉教授、退職



鷺田総長

事務職員及び現職の教職員が、また、アサヒビール株式会社様からは高橋正哲専務取締役以下本学の卒業生を含む関係者の出席がありました。

開会に先だち、高橋専務取締役及び鷺田総長の挨拶があり、小泉理事・副学長の発声による乾杯で懇談会が開始され、抽選会が催されるなど、終始和やかな雰囲気の中、出席者が互いの旧交を温め合い、盛会のうちに終了しました。



高橋専務取締役

(総務部総務課)

在阪報道各社と大阪大学との懇談会開催

9月6日(月)、中之島センターにおいて、本学の最新の教育・研究活動について情報発信するとともに、報道関係者との意見交換を目的とした「在阪報道関係者との懇談会」が開催されました。

中之島センター9階の会議室において開催された懇談会には、本学からは高杉英一理事・副学長、土井健史理事・副学長、門田守人理事・副学長、部局長等が出席し、報道関係からは11社から14名の出席がありました。



大学関係者及び報道関係者全員の自己紹介の後、「大阪大学の最近の取り組み」について各部局長等と報道各社との意見交換が行われました。

また、懇親会では、大学・科学記者クラブ幹事社である共同通信社の発声により乾杯が行われ、懇談会に引き続き本学関係者と報道各社の方々の活発な情報交換が行われ、貴重な機会となりました。

(企画部広報・社会学部事務室)

三大学(大阪大学、京都大学、神戸大学)合同大学説明会

大阪大学、京都大学、神戸大学の三大学が合同で大学説明会を実施しました。今年で三回目となる合同説明会は、会場を昨年のお阪・広島に加えて京都でも開催し、7月11日(日)の京都会場(みやこめっせ)には540名、7月19日(月・祝)の広島会場(広島国際会議場)には614名、8月1日(日)の大阪会場(梅田スカイビルタワーウエスト)には966名と参加者は年々増加しており、三会場とも満員の盛況でした。

説明会では、三大学の理事・副学長(大阪大学 - 小泉理事・副学長、京都大学 - 西村理事・副学長(広島会場)・



大学の説明紹介をする南川京都大学理事補(右側)
小泉大阪大学理事・副学長(中央)
石田神戸大学理事・副学長(左側)



三大学の理事・副学長等の大学紹介説明を
熱心に聞き入る受験生や保護者

南川理事補(京都会場)・苧阪副学長補佐(大阪会場)・神戸大学 - 石田理事・副学長)によるパネルディスカッション「大学のトップが語る 京阪神大学紹介」があり、参加した受験生や保護者等は熱心に聞き入っていました。引き続いて、「現役大学生が本音で語る こうやって私は受験を乗り切った。そして今...」として三大学の現役学生によるパネルディスカッションと大学紹介が行われました。

また、会場では個別相談コーナーとして、各大学の学生や教職員に説明会では聞けなかったことを直接質問できるコーナーも設けられ、多数の受験生が訪れていました。

(学生部入試課)

大学説明会(オープンキャンパス)

8月10日(火)から20日(金)の間の7日間に学部毎(11学部)に大学説明会(オープンキャンパス)を開催しました。

今年も同伴の保護者を含め、多くの参加があり、昨年に比べ、医学部保健学科で3.01倍、薬学部で2.26倍の参加者数となるなど、大学全体では昨年を5,000名近く上回る23,653名の方々にご来場頂きました。

今年は例年にも増して暑い日が多く、熱中症等の心配がありました。数名の体調不良者が出たものの、各学部や保健センター職員の迅速な対応により、幸い大事には至りませんでした。



理学部の学科説明の様子



人間科学部の模擬授業の様子

学部紹介、施設の公開、模擬授業、在学生による説明等、各学部で工夫をこらしたプログラムを企画し、参加した高校生、保護者等はどの会場でも熱心に聞き入っていました。毎年増加する多数の参加者に対応するため、プログラムの一部に予め整理券を配布する学部もありました。

また、各学部のプログラムと並行して開設された現役学生企画の個別相談コーナーも年々相談者が増え、今年は1,300名余りの受験生等が受験勉強や大学生活に関する質問をし、学生達は実体験を交えながらアドバイスしていました。

(学生部入試課)

「主要大学説明会」等学外進学ガイダンスへの参加

8月8日から9月19日の間、東京大学主催の「主要大学説明会2010」が全国7会場（札幌・新潟・東京・名古屋・大阪・広島・福岡）で開催され、本説明会開始当初から参加している本学は、昨年に引き続き全会場に参加しました。

今年で6回目となる本説明会は、年々高校生や保護者等の関心が高まっています。今年は昨年から約1,700人増となる10,000人近くの参加があり、会場によっては収容人数の関係で、やむを得ず事前申込を打ち切るほどの盛況となり、本学が用意した大学案内等の資料もほとんどなくなりました。

説明会は大学説明講演とブースでの個別相談で構成され、本学の大学説明講演は小泉理事・副学長と高杉理事・副学長がそれぞれ担当する会場で、高校生等が本学を知り理解を深めるよう、広報・社会学連携室が作成したDVDや教育・情報室が作成したスライドに基づく講演を行いました。



大学説明講演を行う小泉理事・副学長



大学説明講演を行う小泉理事・副学長

地元大阪会場では本学経済学部並びに基礎工学部の学生も参加し、パネルディスカッション方式による「現役大学生の体験談」では多くの高校生が熱心に聞き入っていました。

また、入試広報小委員会の教員と学生部職員で対応した個別相談ブースでは、大学の教職員に直接話しが聞ける貴重な機会として、各会場とも多数の高校生等が資料ではわからない疑問点について質問していました。

本説明会を含め、本学では入試広報小委員会委員及び学生部各課協力体制のもと、毎年多数の学外進学ガイダンスに参加しています。参加件数は年々増加し、今年は23会場となりました。

今後も優秀な学生の確保に向け、機会を捉えて本学の広報活動を進めます。

（学生部入試課）

平成22年度 大阪大学職員のための英語プレゼンテーション能力養成研修について

9月8日（水）、医学部銀杏会館において、標記研修を実施しました。本研修は、国際交流業務に携わる職員を対象とし、英語による効果的なパワーポイント資料の作成とそのプレゼンテーション方法を学び、情報発信能力を向上させることを目的として実施するもので、今年で3回目の開催となりました。

今回から新たな試みとして、初級から中級者向けの導入コースと中級から上級者向けの応用コースに分けて実施し、合計22名が参加しました。

研修では、辻 毅一郎国際交流室長の挨拶の後、Robert O'Mochain-Mahon 言語文化研究科特任准教授による講義、グループワーク等が行われ、受講者は講義で学んだ技法を用いて、実際にプレゼンテーションを行いました。受講者からは、定期的な開催を望む声もあり、大変好評を得まし



た。最後に、亀岡 雄国際部長の総括により研修は終了しました。

（国際企画推進本部、国際交流課）

大阪大学

留学プログラム総合説明会(バンコク)“Let's Study at Osaka University”開催

タイは中国、韓国に引き続き、本学への留学生が多い国ですが、更に多くのタイ人学生に本学での教育研究を理解していただくため、大阪大学留学プログラム総合説明会“Let's Study at Osaka University”を、9月4日(土)、タイ・バンコクにおいて開催しました。この説明会は、本学が独自で開催する初めての留学説明会です。



開催にあたっては、各部門に教職員の派遣を依頼し、外国語学部をはじめとして、人間科学、経済学、理学、工学、基礎工学の各学部・研究科、言語文化研究科、国際教育交流センター、日本語日本文化教育センター、

生物工学国際交流センター、並びに国際部から20名の教職員に参加をいただきました。また、情報科学研究科には、急速、テレビ会議システムを通じて参加いただきました。

本説明会の中で、鷲田総長からは、タイの学生に熱いメッセージをお送りいただきました。また、辻理事・副学長には、保護者に対して本学の留学サービスを説明していただきました。

午前中のモデル講義(7コマ)に始まり、総長、卒業生によるお話「留学の勧め」、各プログラムに対応したブースでの個別説明(13ブース)、保護者への説明、さらにスカイプを通しての本学に留学中のタイ人学生との交流などが実施されました。

運営にあたっては、本学タイ同窓会にご支援いただき、さらに在タイ日本国大使館、日本学生支援機構バンコク事務所、元日本留学生協会、泰日経済技術振興協会にもブース出展によるご協力をお願いし、奨学金や留学に関する情報提供をいただきました。

当日は保護者も含めて124名の方に来場いただき、熱心に各プログラムの説明を聞く姿が見られました。なお、来場者の在学(卒業)校のトップ3は、チュラロンコン大学、カセサート大学、マヒドン大学でした。

(海外拠点本部・バンコク教育研究センター)

大阪大学タイ同窓会・咲耶会バンコク支部合同同窓会を開催しました

大阪大学タイ同窓会と咲耶会(大阪外国語大学同窓会・大阪大学外国語学部同窓会)バンコク支部は、合同同窓会を9月4日(土)、タイ・バンコクにおいて開催しました。

同窓会は、Pornchai Yongwattanasoontornタイ同窓会事務局長(平成2年工学部電子卒、平成4年大学院修士課程修了)の司会で始まり、鷲田総長、Itthichai Arungsrisangchai大阪大学タイ同窓会会長(平成15年工情報・論文博士)と政岡勲咲耶会バンコク支部長(昭和40年卒)の挨拶があり、白川功名誉教授(工学研究科)の乾杯で開宴しました。参加者は総数で148名、内訳はタイ人卒業生と同伴者が90名、



Itthichai 会長によるあいさつ

日本人卒業生とその同伴者が30名、本学教職員等関係者28名でした。

旭日中綬章を受章したSuvit Vibulsresth氏(昭和39年工学部通信卒)、大手建設会社を営するPlew Trivisvavet氏(昭和44年工学部通信卒、昭和46年大学院修士課程修了)、Prasit Prapinmongkolkarn

氏(タイ国家電気通信委員会理事長)、Prayoon Shiwattana氏(前科学技術開発長副長官)ほか要職を務める卒業



経済学部の同窓生と高橋教授

生も出席しました。古城紀雄名誉教授のお世話で用意をいただいた阪大グッズを景品に、クイズなどの企画もあり、参加者が旧交を温め、世代と国籍を超えて新たなネットワークを築く機会となりました。

今後、さらなる同窓会活動の充実のため、バンコク教育研究センターが活用されることを期待しています。なお、大阪大学タイ同窓会は、大阪大学、大阪大学外国語大学の正規課程の卒業・修了生のみならず、論文博士取得者や短期留学をした方々も構成員としています。まだ登録をされタイ同窓会の登録・お問い合わせ

admin-bkk@hpc.cmc.osaka-u.ac.jp

(海外拠点本部・バンコク教育研究センター)

島根県江津市立桜江中学校修学旅行生との交流会を実施

日本語日本文化教育センターでは、9月16日(木)に島根県江津市立桜江中学校修学旅行生と本学留学生との交流会を実施しました。

同中学校からは2年生32名と引率教員3名の計35名が来学され、本学からはベルギー、ポーランド、ノルウェー、ブルガリア、ニュージーランド及びインドネシアからの留学生計6名と当センター教員が加わり、6つの小グループに分かれての話し合いが行われました。

この企画は、同校の関西方面への修学旅行プログラムの一環として、早い時期から大学の雰囲気に触れさせ、将来



の進路を考えさせるために、大学での施設見学とあわせて、世界各国からの留学生が日本語や日本文化について学んでいる当センターで是非交流会をもちたいという桜江中学校の学校長からの強い要望により実現したものです。

交流会では生徒さん達は、事前に準備し持参したCDで町の風景等の映像を流しながら、英語をとり入れた自己紹介や自分達の住む町の紹介などに一生懸命に取り組まれていました。一方、留学生側からは、日本留学の動機や異文化理解の大切さなどについてユーモアを交えての話があり、終始和やかなムードで、感受性豊かな生徒さん達にとってはかけがえのない時間を過ごされたようでした。

最後に、当センターの加藤均教授から、「留学生が日本の文化、社会を理解する中で日本語がその鍵になるように、皆さんが世界に目を向けようとするとき、英語をはじめとした外国語という鍵が必要になります。将来は、是非本学に進学して、さまざまな鍵を手に入れてください。」との激励があり、生徒代表のお礼の言葉で無事交流会を終了しました。

当センターでは、これを機会に大学進学前の高校生や中学生の方々と積極的に交流を図っていきたいと考えています。

(日本語日本文化教育センター)

附属図書館で国立大学図書館協会近畿地区協会助成事業 「変容する大学図書館 - 図書館とは何をするところ - 」セミナーを開催

国立大学図書館協会近畿地区協会が主催する標記セミナーが9月16日(木)に大阪大学附属図書館・総合図書館・図書館ホールを会場におこなわれました。

小泉潤二大阪大学理事・副学長(附属図書館長)の挨拶に続き、京都大学附属図書館研究開発室准教授の古賀崇氏から「大学図書館、「次の一步」は? - 情報源の多様化と学習支援 - 」と題する基調講演、大阪大学大学教育実践センター准教授の堀一成氏から「ラーニング・コモンズを利用した授業と学習支援の試み」、神戸大学附属図書館大学文書史料室講師の野邑理栄子氏から「大学図書館の新たな役割とその模索 - 文書館機能の付与について - 」、長崎大学学術情報部学術情報管理課長の甲斐重武氏から「九州地区のリポジトリ論文集を支援する大学図書館」と題した事例発表がありました。その後、パネルディスカッションがおこなわれ、京都大学附属図書館の川瀬事務部長が進行をつとめました。パネルディスカッションでは、基調講演・事例発表をうけ、多様な業務に取り組む図書館の現状とその課題について活発な意見交換がおこなわれました。

セミナーのあとは、事例発表でもとりあげられた総合図書館ラーニング・コモンズの見学会も、盛況に開催されました。



パネルディスカッションの様子

このセミナーは、大学図書館近畿イニシアティブの後援をうけ、近畿地区の公立大学・私立大学にもひろく参加を呼びかけたほか、他地区の国立大学からの参加も受け付けた結果、80名を超える多数の参加者がありました。参加者は基調講演・事例発表・パネルディスカッションをとおり、変容する大学図書館の現状と今後のあるべき方向をさぐりました。

(附属総合図書館)

共通教育本館(イ号館)から旧制浪速高等学校時代の「奉安庫」を発見

共通教育本館(イ号館)は、本学の前身の一つである旧制浪速高等学校の本館として昭和3年に建築され、国の登録有形文化財に指定されています。9月から耐震改修工事



報道陣からの質問に答える江口太郎総合学術博物館館長

に入り、来年5月には「大阪大学会館」として装いも新たに竣工の予定です。

9月16日(木) 浪高時代の校長室にあたる南東角部屋(旧博物館展示室)の壁の取り壊し工事中、壁に埋め込まれた金庫型の「奉安庫」が発見されました。「奉安庫」は独立建築型の「奉安殿」と同様、戦前の学校で天皇・皇后の「御真影」や「教育勅語」を納めたもので、その多くは戦後GHQの「神道指令」を受けて撤去・移築あるいは転用されています。21日(火)から専門業者による解体作業が行われましたが難航し、24日(金)にようやく内部が明らかになりました。内部は上から見ると三角形の空間で、木張りの上に深緑色のフェルト素材が貼られていたとみられます。

戦後60数年間、壁の中で眠っていた浪高の「奉安庫」は、戦前・戦中の教育史の貴重な遺構です。現在関係各方面と調整の上、保存方法を検討中です。

(総合学術博物館)

第49回 全国七大学総合体育大会で大阪大学が総合優勝

名古屋大学の主管で開催されました第49回全国七大学総合体育大会(通称 七大大戦)は、9月25日(土)の閉会式をもって全日程が終了し、本学が見事に総合優勝を成し遂げました。



優勝旗の授与を受ける 前田前体育会委員長

今大会は、7月から9月の期間を中心として41競技(うち2競技は雨天のため中止)により競われ、本学は陸上競技の2年連続男女アベック優勝や自動車競技の大会5連覇など8競技で優勝を飾り、また、他の競技も日頃の練習の成果を十分に発揮された結果、総得点210点を獲得し、2位の名古屋大学に11点差をつけての優勝となりました。

本学の七大大戦での総合優勝は、本学が主管校を務めた第45回大会(平成18年度)以来、4年ぶり6回目のことであり、「主管破り」と呼ばれる非主管校としての優勝は本学では初の快挙です。

10月15日(水)には、本学の総合優勝を祝し、本学体育会の主催による優勝報告会を鷺田清一総長や小泉潤二理事・副学長などを招いて、豊中キャンパスにて開催される予定となっております。(学生部学生支援課)

第49回名古屋大会結果速報

速報・歴代記録は七大戦公式ホームページで閲覧できます。

Seven Universities Movement! Hokkaido, Tohoku, Tokyo, Nagoya, Kyoto, Osaka, Kyushu
http://www.7-u.jp/

競技名		参加 校数	北海道大学		東北大学		東京大学		名古屋大学		京都大学		大阪大学		九州大学	
			順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点
アイスホッケー		7	1	10	4	4	3	6	6	2	7	1	5	3	2	8
スキー		5	不参加		不参加		5	3	3	6	1	10	4	4	2	8
航空		7	7	1	5	3	2	8	1	10	4	4	6	2	3	6
馬術		6	3	4	2	6	4	3	1	8	5	2	該当団体なし		6	1
柔道		7	1	10	3	5	3	5	2	8	5	2	5	2	5	2
バスケットボール	男子	7	5	3	4	4	1	10	2	8	7	1	3	6	6	2
	女子	7	3	6	6	2	7	1	4	4	1	10	2	8	5	3
少林寺拳法		7	6	2	4	4	2	8	7	1	3	6	1	10	5	3
硬式庭球	男子	7	6	2	7	1	1	10	2	8	3	6	4	4	5	3
	女子	6	1	10	4	4	不参加		3	6	5	3	2	8	6	2
ヨット		7	7	1	5	3	4	4	6	2	3	6	2	8	1	10
剣道	男子	7	5	3	7	1	3	6	6	2	4	4	2	8	1	10
	女子	7	2	8	7	1	4	4	5	3	3	6	6	2	1	10
水泳	男子	7	5	3	7	1	6	2	4	4	1	10	2	8	3	6
	女子	7	4	4	6	2	2	8	5	3	3	6	1	10	7	1
空手道	男子	7	4	4	6	2	1	10	7	1	5	3	2	8	3	6
	女子	6	5	3	不参加		1	10	6	2	4	4	3	6	2	8
陸上	男子	7	6	2	5	3	4	4	3	6	2	8	1	10	7	1
	女子	7	3	6	6	2	4	3.5	2	8	4	3.5	1	10	7	1
ラクロス	男子	6	6	2	3	6	1	10	2	8	4	4	5	3	不参加	
	女子	雨天のため競技中止														
硬式野球		6	不参加		3	6	6	2	2	8	4	4	1	10	5	3
バレーボール	男子	7	2	8	1	10	4	4	7	1	6	2	3	6	5	3
	女子	7	3	6	4	4	7	1	6	2	1	10	5	3	2	8
準硬式野球		7	2	8	7	1	6	2	4	4	1	10	3	6	5	3
バドミントン	男子	7	2	8	6	2	5	3	7	1	4	4	3	6	1	10
	女子	7	2	8	5	3	4	4	1	10	7	1	6	2	3	6
体操		7	2	8	7	1	4	4	6	2	3	6	1	10	5	3
ハンドボール		7	7	1	6	2	5	3	1	10	2	8	4	4	3	6
相撲		5	該当団体なし		4	2	1	6	2	4	3	3	該当団体なし		5	1
フェンシング		5	該当団体なし		2	4	3	3	該当団体なし		1	6	4	2	5	1
弓道	男子	7	1	10	2	8	3	6	5	3	4	4	7	1	6	2
	女子	7	2	8	1	10	4	4	3	6	6	2	7	1	5	3
アーチェリー		7	4	4	1	10	3	6	2	8	6	2	5	3	7	1
自動車		7	3	6	4	4	5	3	2	8	7	1	1	10	6	2
ソフトボール		雨天のため競技中止														
ソフトテニス	男子	5	7	1	5	3	6	2	3	6	4	4	1	10	2	8
	女子	7	5	3	1	10	7	1	4	4	2	8	3	6	6	2
ゴルフ		7	4	4	5	3	1	10	2	8	3	6	6	2	7	1
卓球	男子	7	5	3	3	6	1	10	4	4	2	8	6	2	7	1
	女子	7	2	8	4	4	6	2	1	10	7	1	3	6	5	3
総 合 得 点			178		147		191.5		199		189.5		210		158	
順 位			5 位		7 位		3 位		2 位		4 位		1 位		6 位	

得点表

該当団体数	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
7	10	8	6	4	3	2	1
6	8	6	4	3	2	1	
5	6	4	3	2	1		
4	4	3	2	1			

大学院学位記授与式

9月22日(水)午前11時からコンベンションセンターMOホールにて、大学院学位記授与式が行われました。

修了者は199名(修士51名、課程博士126名及び論文博士22名)を数え、修士及び博士の受領代表者20名が鷲田清一総長から学位記を授与されました。

列席した受領者には、総長からの式辞で「真のプロフェッショナル」について、述べられました。

(総務部総務課)



大阪大学大学院学位授与式総長式辞

本日ここに修士/博士の学位を得、授与式を迎えられたみなさんに対し、まずは心よりお祝いを申し上げます。また、幼少の頃からこの日まで、みなさんの勉学を支えてこられたご家族の方々の長きにわたるご苦労に対しても、心より敬意を表したく存じます。

これから企業や行政、あるいは民間の研究所やシンクタンクに活動の場を移される方もおられれば、さらに大学で研究を続けられる方もおられるでしょうが、それぞれに本学で培った知恵と知識と技能を存分に発揮されてゆかれることを、心より願っております。

さて、みなさんは専門的な研究の最初の一つをまとめ、ここに学位を得られました。学術の領域においてプロフェッショナルとしての一步を踏み出されたわけです。

ところで、そもそも学位とはいかなるものなのでしょうか。学術におけるプロフェッショナルとはどういうひとのことでしょうか。

この夏に遭遇した一つの出来事についてご紹介すること



から始めたいと思います。いま名古屋では、あいちトリエンナーレ2010が開かれています。そのオープニングを飾る作品として、「森の奥」という演劇作品が上演されました。新聞などでも大きく取り上げられましたのでご存じの方もおられると思いますが、この作品は、ヒトとロボットが共演する世界で初めての演劇です。そしてこのロボット演劇、じつは大阪大学で制作された作品なのです。アフリカの森林のなかにある霊長類の保護と研究のための施設で、ヒトとその同僚として働くロボットとが、サルとヒトとロボットに本質的な違いがあるのか、「理解する」というのはどういうことなのか、「人間」とは何者であるかを議論しあうという、ひじょうに哲学的な内容の演劇です。

ロボット工学者として世界的に有名な、基礎工学研究科の石黒浩教授はこれまで、人間科学研究科の認知科学の研究者らと協力しながら、みずから製作した精緻なロボットを媒介として、ヒトの「こころ」と「ふるまい」の研究をしてこられました。そんなある日、わたしは彼に、本学コミュニケーションデザイン・センター教授であり劇作家でもある平田オリザさんを紹介しました。わたくしの想像を超えて意気投合された二人は、やがて、ロボットとヒトが共演する演劇作品をいくつか実験的に作られました。ロボット研究の専門家と、人間の知覚や行動や情動の研究の専門家に、現代演劇の旗手が加わったのです。平田さんから石黒さんが教わったこと、それは、ロボットにヒトに似たふるまいをさせるには、ヒトのすべてのふるまいを模倣させるのではなくて、ふるまいのいくつかのポイントを抽出すべきだということでした。そして、そうしたいいくつかのポイントを押さえるだけで、人形を人間以上に人間らしく見せる文楽の技を、人形遣いの桐竹勘十郎さんからもしっかりと学び、平田さんのシナリオと演出の下、ロボット演劇を完成させていったのです。

現代の先端科学と現代演劇と伝統芸能の素晴らしいコラ

ポレーション、これを実現するには、さらに多くのプロフェッショナルの力が必要でした。ロボットのプログラマー、ロボットを長時間駆動させるためのコンデンサーの技師、そして俳優、プロデューサー、舞台装置や小道具の制作者、さらにはポスター制作者、広報のプロ、予算を組む経理のプロといったひとたちです。それら多数のプロフェッショナルがそれぞれの「持ち場」を、まるでオーケストラのように交響させるなかで、この世界初のロボット演劇は生まれました。

このエピソードは、プロフェッショナルの何かを教えてください。

プロフェッショナルとは、専門の知識や技能をもった職業人のことだと、まずは言えるでしょう。いいかえると、プロには「その道一筋」とか「専門を究めているひと」というイメージがとまいます。余人がとてもかなわないような特定の「わざ」を身につけているひと、というイメージです。

これ自体はまちがいでありませんが、誤解を生むイメージではあります。というのも、いまお話しした例にあるように、どんなプロフェッショナルも、他のプロ、あるいは他のノン・プロと協働しなければ、何一つ専門家としての仕事をなしえないからです。

情報端末の微細な回路設計を専門とする技術者がいるとします。その彼は、超微細な回路を実現するためには、それを可能にするような材料の専門家と組まねばならない。どんな機能をどんなふうに乗せるのかについてシステム設計の専門家と組まねばならない。さらに、それを新製品として実現するためには、さらに別のプロ、たとえば消費者とじかにつながっている営業のプロ、広報のプロ、そしてもちろんコスト計算をしてくれる会計のプロとも組まねばならない。

ここで注意を要するのは、これら協働するプロたちにとって、組む相手はいずれもじぶんの専門領域からすればアマチュアだということです。当然のことですが、じぶんもまた相手からすれば素人にほかならないのです。ある筋のプロは、具体的な事業の場では、部分的な専門家、いいか



えると「特殊な素人」にほかならないと言ってもいいでしょう。

とすれば、プロというのは、他のプロ——じぶんからすればアマチュア——とうまく共同作業できるひとのことであり、そういう意味でのアマチュアにじぶんがやろうとしていることの大事さを、そしてそれがいかにわくわくするものであるかを、きちんと伝えられるひとであり、そのために他のプロの発言にもきちんと耳を傾けることのできるひとであり、とどのつまりはノン・プロと「いい関係」をもてるひとだということなのです。

専門という、じぶんの蛸壺に閉じこもっているひとは、優れたプロではありません。いやプロの名に値しません。大学院を出て博士号をとっているひとは、専門の研究とはちょっとずれた研究をやってくれと言うと「それはわたしの専門ではありません」とあたりまえのように拒否するとばかり企業人がよくおられますが、これは正当なぼやきだと思います。一つのことしかできないというのは、ほんとうのプロフェッショナルではない。たんなるスペシャリストにすぎないということです。

先日、ビデオカメラの手振れ補正の技術や、デジタルテレビ放送の基本技術といえる階層型伝送方式で知られるパナソニックの技術顧問の大嶋光昭氏と、お話しする機会がありました。その機会に、企業が真に求める博士課程の人材とはどういうものかについて質問しました。それに対して大嶋さんは、こんなふうに答えてくださいました。

「新しい分野の研究を始める際には、科学的で理論的なアプローチが不可欠です。わたしの経験でも、博士課程のひとは、論理的に解析を進めたうえで、物理モデルを作成し、あまり実験をすることもなく、見事に問題を解決してくれました。確かにいったん物理モデル等が確立してしまうと、博士課程でない一般研究者でも進められますので、確立した研究テーマにおいては博士課程の人材が不可欠ではありません。実のところこれまでの日本企業には新しい研究に挑戦する機会があまりありませんでした。しかし、日本はいまアジアなどの中進国に追い上げられますので、自然と新しい分野の研究をせざるをえなくなりつつありま

す。そういう意味で、科学的なアプローチ手法と、広い基礎知識をもつ博士課程の方の需要は今後大きくなると思います。こんなふうにおっしゃいました。

ポイントは、学術のプロというのは、「分野」のプロなのではなくて、「研究」のプロだということにあります。

たしかに、ある分野でのプロには、他のひとたちが気づいていない問題領域で、問題を突き詰めるために、独りがき、苦しみ、悩みぬいてきたという自負があります。けれどもそうした問題領域でしかその能力が発揮できないというのではなくて、なにかある一つの問題を究めるという経験をとことんしてきたことで、問題を究めるというその仕方あるいはスタイルが身について、だから別のどんな問題でも究める用意があるということこそが、真のプロフェッショナルであることの条件なのではないでしょうか。

じぶんにしかできないことを知っているというのは、裏返して言えば、じぶんにはできないことをも明確に知っているということです。そしてじぶんにはできないことを知っている別のひとと協働しないことには、じぶんにしかできないことすらも実現できないことを知っているということです。

このことが意味しているのは、逆説的な言い方になりますが、ある分野の専門研究者が真のプロフェッショナルでありうるためには、つねに同時に「教養人」でなければいけないということです。教養とは、一つの問題に対して必要ないくつかの思考の補助線を立てることができるということです。いいかえると、問題を複眼で見ること、いくつ



かの異なる視点から問題を照射することができるということです。このことによって、ひとの知性はより客観的なものになります。わたしたちの知性がそのように複眼的になるためには、常日頃から、じぶんの関心とはさしあたって接点のない思考や表現にふれるよう心懸けていなければなりません。じぶんの専門外のことがらにたいしていつも感度のいいアンテナを張っていること、そう、専門外のことがらに対して狩猟民族がもっているような感度の高いアンテナを、いつもじぶんのまわりに張りめぐらせていなければならないということです。要するに、狩猟民族が数キロメートル離れた地点での自然環境の微細な変化に的確に感應するのと同じような仕方で、同時代の社会の、微細だけれども根底的な変化を感知するセンスをもつということです。

そういうグッドセンスを、みなさんにはこれから一層磨いてほしいと思います。そうしてこそはじめて、みなさんは、みずからの限られた専門知を広く社会に活かすことができるようになります。じぶんの専門領域に関することがらを、その専門領域を知らないひとたちに、魅力あるものとして語ることもできるようになります。

以上が、今日、プロフェッショナルとしての一步を踏み出されたみなさんに、わたくしがぜひとも伝えたかったことです。

さて、最後になりましたが、みなさんお一人お一人がこれからの長い生涯、健康と幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、わたしの式辞といたします。

グローバル30学部・大学院英語コース入学式が挙行されました。

10月1日に、グローバル30により設置された学部・大学院英語コースの入学式が、東島清理学研究科長、馬場章夫工学研究科長、戸部義人基礎工学研究科長のほかインターナショナルカレッジ副カレッジ長の理学研究科深瀬浩一教授ら関係者の出席のもと、ステューデント・ commonsにて挙行されました。

当日は、理系の学部英語コースである「化学・生物学複合メジャーコース」に入学した13名の留学生のほか、大学院英語コースである「統合理学特別コース」及び「国際物理特別コース」に入学した19人の留学生がそろって顔をそろえ、あいさつに立った各学部長、副カレッジ長からは、合格を祝う言葉とともに、これからの勉学に対する心構えなどが訓示されました。

入学式終了後は、学部と大学院に分かれて履修オリエンテーションが行われ、その後、理学部の会場にて、教員と学生との懇親を深めるためのウェルカムパーティーも催されました。

前日からの雨も上がり、さわやかな秋晴れの下、新入生は大きな希望を胸に新生活への第一歩を踏み出しました。

なお、文系の学部英語コースである「人間科学コース」は、平成23年10月のスタートに向けて、現在入試やカリキュラム等の準備が進められています。



学部英語コース



大学院英語コース

(国際部学生交流推進課)

「研究支援員制度」利用者、研究支援員インタビュー

大阪大学は、平成19年11月より「研究支援員制度」を開始しました。この制度は、出産・育児・介護等で研究時間が確保できにくくなっている女性研究者の研究面での支援を行うため、院修了者・卒業生・学生を「支援研究者」や「研究補助員」として採用・配置するものです。

これは同時に、支援する院修了者・卒業生・学生に対しても、ロールモデルと接することにより、キャリア形成を促すことをねらいとしています。

今回は、本制度の利用者として、世界言語研究センターの石黒暢准教授と、研究支援員として宮崎恵研究補助員にお話を伺いました。

（インタビュアー）

今回は、文系研究者の研究支援員制度利用者と研究支援員の方を訪問させていただきました。研究支援員制度を利用させていただき、いかがでしょうか。

（石黒准教授）

宮崎さんには、コピーや資料整理から、北欧の社会についての新しい情報収集にいたるまで、多岐にわたる仕事をしてもらっています。

北欧社会の情報収集では、具体的にはデンマークに関する英語ニュースにアクセスしてその記事の要約をしてもらっています。私の方は、デンマーク語のサイトにアクセスしています。

小さい子供を抱えて、夕方早目に帰る必要があり、また授業にも追われているのですが、宮崎さんには、論文で使用するグラフや表をワード・エクセルで作成することをお願いしています。彼女はパソコンでの作成スピードも速く、いろんな支援をしてもらえるので、精神的余裕もできています。

また、デンマーク語専攻には4名の研究スタッフがいますが、宮崎さんはデンマーク語専攻研究室のホームページの編集に中心的に関わっていて、実質的にウェブマスターのような役割を果たしてもらっています。

研究支援員制度は大変ありがたく、この制度なしの研究生活はありえないと思うほどです。

（宮崎研究補助員）

この10月で、石黒先生の研究支援員になって1年になります。



宮崎研究補助員（左）と石黒准教授（右）

専攻はフランス語ですが、英語のニュースを要約する時には、ヨーロッパ全体の話に触れることとなり、仕事の中で勉強することができます。また、北欧は普段は目を向けにくい地域なので、普段のニュースにアクセスすることで、北欧の制度などを知ることができます。

研究支援員になったことで、自分が受けている授業の先生とは異なる先生と関係を持つことができ、研究するとはどのようなことか、授業をしていない時ではどのようにしているのか、研究者の先生を身近に見ることができます。

（インタビュアー）

ありがとうございました。文系の研究者支援にも研究支援員制度が大変お役に立てていることが分かり、大変うれしく思います。お二人の今後のご活躍を祈念いたします。

（多様な人材活用推進支援室）

岩崎真梨子さん第21回日本心エコー図学会学術集会 Young Investigator's Awardを最年少で授賞

医学系研究科保健学専攻機能診断科学講座博士前期課程2年の岩崎真梨子さん（超音波医学研究室）が、2010年5月に開催されました第21回日本心エコー図学会学術集会において約270題の発表演題の中から栄えあるYoung Investigator's Award 優秀賞を受賞しました。日本心エコー図学会は心エコー図学に携わる医師、技師、研究者を中心としたこの分野では国内最大の学会です。Young Investigator's Award は第8回学術集会から設立されましたが、岩崎さんは設立以来最年少での授賞です。授賞対象となった研究は「心尖部の捻れは左室全体の拡張能に寄与する：心筋固定器具を用いた人為的心尖部回転運動停止下での検討」です。心臓は収縮と拡張を繰り返していますが、その際同時にタオルを絞るような捻れ運動も行っています。岩崎さんは心エコー法を用いてこの捻れ運動が収縮・拡張にどの程度寄与しているのかを実験を通じて明らかにしました。心臓メカニクスに迫る意義深い研究であることが評価されたものと考えられます。



中央が岩崎真梨子さん

（医学系研究科・医学部）

基礎工学研究科博士後期課程2年 Quang-Hong Ngo君 「レーザー学会第30回年次大会 優秀論文発表賞」受賞

大学院基礎工学研究科システム創成専攻電子光学科学領域博士後期課程2年Quang-Hong Ngo君が、レーザー学会第30回年次大会において、優秀論文発表賞を受賞しました。

この賞は、レーザー学会年次大会において最も優れた論文発表を行った若手研究者に対して授与されるものです。授賞式は、2010年5月31日にレーザー学会総会に引き続きホテル阪急エキスポパークにて行われました。

受賞対象となった研究論文は「Microwave signal generation by difference frequency generation in a LiTaO₃ microwave rectangular waveguide」です。この論文は、新しいマイクロ波・ミリ波発生デバイスの提案・動作実証実験に関する報告です。この論文で提案するデバイスは、強誘電性非線



形光学結晶を用いた方形導波管における分散特性を巧みに利用して差周波発生を行うことにより、マイクロ波・ミリ波からサブミリ波の生成を可能とするものです。これまでの研究成果を元に、さらに高周波帯での信号発生に挑戦するものであり、着想の新規性・今後の発展性が高く評価されました。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

基礎工学研究科博士前期課程2年 齊藤輝彦君
「第24回International Conference on Organometallic Chemistryポスター賞」受賞

基礎工学研究科・物質創成専攻・機能物質化学領域・有機金属グループの齊藤輝彦君（博士前期課程2年）が、台湾で行われた国際学会第24回 International Conference on Organometallic Chemistry でポスター賞を受賞しました。この賞はポスター発表者（378件）の中から特に優れた研究結果の発表に授与されるものです。

齊藤君は“Salt-free Reduction of TaCl₅ by Bis(trimethylsilyl)cyclohexadienes: Generation of a Catalyst for Linear Trimerization of Ethylene”のタイトルでポスター発表を行い、前周期遷移金属の新しい還元剤である1,4-ビス(トリメチルシリル)シクロヘキサ-2,5-ジエン誘導体を還元剤として用い、3塩化タンタルを発生させ、エチレン3量化の高活性、高選択的な触媒になることを見出しました。また、この還元剤が塩の副生を伴わないという特徴を活かし、反応中間体であるタンタラシクロペンタンの同定を行うことに成功しエチレン3量化反応の反応機構を決定することに成功しました。さらにこの還元剤と酸化還元活性な配位子を用いた錯体合成にも成功しています。この新しい還元剤の塩の副生を伴わないという特徴は新しい触媒反応の開発、



ポスター賞授与式での齊藤輝彦君（右）とChi Yun 教授（左）

錯体合成法の開発など、有機金属化学の幅広い分野に影響を与え、学術的に高く評価されたことが今回の受賞につながりました。ポスター賞は、国際会議終了式の中で組織委員の一人であるChi Yun 教授から楯が贈られました。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

石井克典助教、粟津邦男教授、間久直助教が
「平成21年度日本生体医工学会論文賞・阪本賞」共同受賞

工学研究科環境・エネルギー工学専攻の石井克典助教、粟津邦男教授、高度人材育成センターの間久直助教が、「平成21年度日本生体医工学会論文賞・阪本賞」を共同受賞しました。

日本生体医工学会論文賞・阪本賞は、生体医工学領域における学問および技術に大きな貢献をなした論文の著者を表彰するもので、機関誌「生体医工学」に発表された論文のうち、特に優秀なものを毎年1編選び、その著者に贈呈されるものです。

受賞対象となった筆頭著者である石井助教の論文は「波長5.75 μmのナノ秒パルスレーザーによる粥状動脈硬化症の低侵襲血管形成術の開発（生体医工学46(5):529-535, 2008）」で、波長5.75 μmという眼に見えない中赤外波長域の短パルスレーザーを用いて、粥状動脈硬化病変のみを選択的に除去治療することができるという新規レーザー生体相互作用を実験的に示しています。現在この研究は、企業の協力を得ながら臨床現場で使用可能な小型レーザーの開発が進められており、また、臨床への橋渡し研究のフェーズにきていることから、さらに今後も興味深い進展が期



石井克典助教（筆頭著者）代表して

待されます。

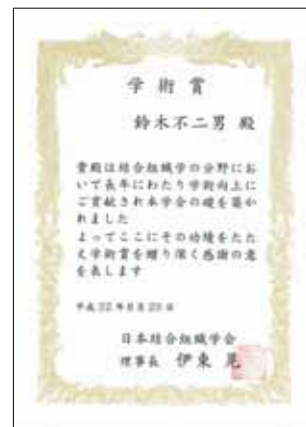
なお、授賞式は第49回日本生体医工学会期間中の2010年6月25日(金)に、大阪国際交流センターにおいて行われました。

（工学研究科・工学部）

鈴木不二男名誉教授 日本結合組織学会「学術賞」受賞

日本結合組織学会は、全身に分布する結合組織や細胞外マトリックスを巡って、基礎および臨床の研究者が一堂に会して討論を行う学際的な学会です。理学部化学科出身の鈴木不二男名誉教授は、1977年に歯学部生化学講座の教授に就任される数年前から成長軟骨細胞培養系を用いて骨形成の研究に取り組み、内軟骨性骨形成の初期段階をシミュレートする培養系の確立に成功されました。その結果、2001年にSan Antonio, Texasで開催された「第1回成長板軟骨国際会議」において、軟骨代謝という新たな研究分野の開拓に貢献したとしてY. Ali教授（英国）、D. Howell教授（米国）とともに顕彰されました。さらに第2回環太平洋結合組織シンポジウム（パリ島）ではVice-Chairmanを、第3回同シンポジウム（ハワイ島）ではOrganizing Committee Memberを務められました。

日本結合組織学会においては、1982年以来、評議員、1986年からは理事として同学会の運営に参加され、1993年には会頭として、第25回学術大会を主催されました。これらの功績により1994年には同学会の名誉会員に推挙されておられます。以上のように鈴木名誉教授は軟骨由来増殖分化因子や軟骨由来血管新生阻害因子の研究などを通



じて、結合組織研究の発展に大きく貢献されました。日本結合組織学会では今回あらためて同名誉教授の功績を称え、学術賞を授与することを決定しました。

授賞式は、8月20日、秋田拠点センター・アルヴェにおいて開催された第42回日本結合組織学会学術大会の総会に引き続いて行われました。

（歯学研究科・歯学部）

古谷 優君「第88回 International Association for Dental Research General Session in Barcelona IADR/Heraeus Travel Award」受賞

歯学研究科分子口腔科学専攻歯科保存学博士課程3年の古谷 優君が、第88回 International Association for Dental Research（IADR: 国際歯科研究会）General Session in Barcelonaにおいて、IADR/Heraeus Travel Awardを受賞しました。

IADR/Heraeus Travel Awardは、歯科材料学部門において斬新な研究手法の探索、ならびに新規材料の開発に携わる若手研究者に対して送られる賞です。

受賞研究は、“UV strengthens human dentin under rehydrated condition.”で、これは紫外線照射による歯の強化ならびにそのメカニズムについて検討を行ったものです。歯の喪失の大きな原因である歯根破折を防止するための、新しい予防・治療法開発への可能性が高く評価されての受賞となりました。

7月14日（水）スペイン・バルセロナにて受賞発表、ならびに橋の授与が行われました。



授賞式の様子（スクリーン中央が古谷君）

（歯学研究科・歯学部）

第7回日本e-Learning大賞 審査委員特別賞を受賞

外国語学部平成17～19年度現代的教育ニーズ取組支援プログラムにおいて開発された「異文化障壁を乗り越える対話と交渉能力の育成 - シミュレータ教材の開発と開発ツール」が、第7回日本e-Learning大賞（e-Learning WORLD 2.0 実行委員会、フジサンケイ ビジネスアイ及び（株）シー・エヌ・ティ 主催）の審査委員特別賞に選定され、去る7月28日（水）の13時から東京ビッグサイト内の特設ステージにおいて、その授賞式及び受賞者によるプレゼンテーションが行われました。

「日本e-Learning大賞」は、新しいe-Learningの可能性を例証し、ブロードバンド社会におけるe-Learningの健全な発展、市場の確立及びコンテンツ・サービス提供企業の育成を支援することを目的として2004年に創設されたもので、企業・自治体・団体におけるe-Learningを用いた生産コストダウン・生産性向上・業務改革、また、学校・個人においては新しい学習の可能性・学力向上に役立つさまざまなコンテンツ・サービス並びにソリューションが選定され、表彰されるものです。

今回、本学が受賞した「異文化障壁…」は、対話と交渉能力の育成を行うことを目的として、外国語学部が旧大阪



外国語大学時代から長年培ってきた言語教育のノウハウと異文化研究の成果を基に実践的なe-Learning言語教育ツールを研究開発したもので、世界初の19言語を網羅した独自の多言語マルチメディア教材であり、e-Learningの特性を活かした反復訓練を行うことができるツールとなっています。

（外国語学部）

森田清三教授「The 2010 IUVESTA Prize for Technology」受賞

工学研究科電気電子情報工学専攻の森田清三教授が、国際真空科学・技術・応用連合（International Union for Vacuum Science, Technique and Applications, IUVESTA）の「The 2010 IUVESTA Prize for Technology」を受賞しました。受賞業績は、「原子間力顕微鏡を用いた室温元素識別と原子操作の開発への傑出した貢献」です。

この賞は世界30カ国の真空関連学協会の国際連合体であるIUVESTAが3年毎に開催する国際真空会議（International Vacuum Congress, IVC）で、IUVESTA Prize for Scienceと共に各1人に授与されるものです。IUVESTAは応用表面科学、電子材料・プロセス、ナノ構造、プラズマ科学と技術、表面工学、表面科学、薄膜、真空科学・工学の8つの部門からなり、IUVESTA Prize for Technologyは技術や装置に関する国際的な画期的成果に対して授与される賞で、ローザンヌ連邦工科大学が選んだ主要な国際的賞（理工系全分野で175件）の1つでもあります。

8月23日（月）に北京で開催され、2,100人以上が参加したIVC-18初日の開会式場で表彰式が行われ、賞状と記



念メダルが授与されました。また、会議3日目の8月25日（水）には、受賞記念基調講演を行いました。

（工学研究科・工学部）

ステューデント・コモンズが日経ニューオフィス賞受賞



9月3日(金)大阪キャッスルホテルにて行われた第23回日経ニューオフィス賞(近畿ブロック)表彰式において、大学教育実践センターのステューデント・コモンズが「近畿ニ

ューオフィス特別賞(アメニティ賞)」を受賞しました。この賞は、日本経済新聞社等が主催し、経済産業省、日本商工会議所等の後援を得て、創意と工夫をこらしたオフィスなどを表彰するものであり、賞の名称のとおり主にオフィスワーカーが創造的な活動を起こしやすくする環境が整っているオフィスを評価するものですが、特別賞として本

施設が受賞しました。

受賞理由については次のとおりです。

従来の「教える」から、学生自らが自発的に「学ぶ」への転換、それを支える「環境」が求められており、当該施設ステューデント・コモンズが作られた。施設の基本構想の段階から学生を含む教職員が一体となって企画しており、「あるべき環境」が理想的なプロセスで作られている。カフェは食事と学習のちょうど中間という位置づけとなっており、「まじめでフランク」なディスカッションがうまれている。セミナールームは、すべて可動式家具となっていて、フレキシブルな運用を可能とし、グループワークにも最適な環境としている。結果、自由で多様性のある環境が学生の自主性を触発し、さまざまな「自発的な学びの場」を生みだしている。

(大学教育実践センター)

小島世誠君、堀瀬友貴さんに「第7回マイクロン奨学金」授与

平成16年度から創設された米国マイクロンテクノロジー基金からの奨学寄附金に基づく第7回マイクロン奨学金授与式が、7月15日(木)に工学研究科及び基礎工学研究科において、それぞれ開催されました。

この奨学金は、マイクロエレクトロニクス分野(物理工学、電気工学、化学・生物工学、機械工学、システム工学、コンピューター工学、情報工学など)を専攻する大学院博士前期課程に入学した学生で、優秀な学部学業成績をおさめた上、なおかつ優れたリーダーシップを発揮できる人物を対象に2年間奨学金が授与されます。

両研究科の選考委員会において、奨学生が選考され、授与式当日にはマイクロン・ジャパン社の関係者、両研究科の研究科長、選考委員会委員等の関係教員、奨学生等が出席のもと、奨学金授与式が執り行われました。

両研究科の栄えある第7回奨学金受賞者は、下記の2名で、城野圭司マイクロン・ジャパン株式会社ファブマネジャーから奨学金証書及び楯が、両研究科長から奨学金証書が授与されました。

受賞者の栄誉を称え、今後の活躍を期待いたします。

第7回マイクロン奨学生

- ・大学院工学研究科電気電子情報工学専攻
博士前期課程 1年次 小島 世誠
- ・大学院基礎工学研究科機能創成専攻
博士前期課程 1年次 堀瀬 友貴



工学研究科第7回マイクロン奨学生(小島世誠君)を囲んで、マイクロン・ジャパン社関係者と工学研究科関係者



基礎工学研究科第7回マイクロン奨学生(堀瀬友貴さん)を囲んで、マイクロン・ジャパン社関係者と基礎工学研究科関係者

(工学研究科・工学部、基礎工学研究科・基礎工学部)

上田 顕博士研究員「Reaxys PhD Prize 2010 Runners-up」受賞

理学研究科化学専攻（物性有機化学研究室）の上田 顕博士研究員（日本学術振興会特別研究員PD）が、Reaxys PhD Prize 2010 のRunners-upを受賞しました。

Reaxys PhD Prize は、化学反応検索システムとして世界的に広く活用されている Reaxys を開発した Elsevier 社が本年新たに設立した国際賞であり、有機化学、有機金属化学、および無機化学の分野で独創的かつ革新的な研究成果を挙げた、世界各国の優れた若手研究者（博士課程修了後1年以内または博士課程在籍）に贈られるものです。詳細は Reaxys Prize のホームページ（<http://prize.reaxys.com>）に記載されております。

上田博士は、理学研究科化学専攻の森田 靖准教授の指導の下、三次元的な電子スピン構造を有する非平面 π 共役型の安定な開殻有機分子の合成と物性に関する研究を行い、本年3月に理学博士の学位を取得しました。非平面型の開殻有機分子は、三次元的な電子スピン構造を有する希少な有機化合物として、基礎および応用の両面から近年注目を集めています。しかし、これらの化合物群は、従来空気中で不安定であり、これまでその構造や物性に関する分子レベルでの詳細な研究は皆無でした。上田博士は、有機合成化学を基盤とした独自の分子設計指針を基にして、曲面型の π 共役系分子骨格上に電子スピンが高度に非局在化した空気中でも安定な開殻有機分子を、世界に先駆けて開発しました。そして、構造・物性有機化学の観点から、その特異な構造的および電子的特性を詳細に明らかにしました。これらの結果は、ドイツ化学会誌 *Angew. Chem. Int. Ed.* やアメリカ化学会誌 *J. Am. Chem. Soc.* に学術論文として掲載



表彰状を受け取る上田博士（左）

され、世界的に大きな注目を受けました。以上の研究成果が世界各国の一流化学者で構成される Reaxys PhD Prize 審査委員会で高く評価され、今回の受賞に至りました。有機 π 電子系物質の合成や各種の物性創出に関する基礎研究を行う構造・物性有機化学分野では、日本人唯一の受賞者です。

なお、受賞式および受賞講演は、2010年8月29日から9月2日にかけて、ドイツ・ニュルンベルクで開催された「The 3rd EuCheMS Chemistry Congress」で行われました。

（理学研究科・理学部）

新教授紹介

加 藤 洋 介 （かとう ようすけ）

大学院文学研究科



【略歴】

- 昭61. 3 名古屋大学文学部文学学科卒業
- 63. 3 名古屋大学大学院文学研究科国文学専攻博士前期課程修了
- 平元. 3 名古屋大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程退学
- 元. 4 国文学研究資料館整理閲覧部助手
- 4. 4 愛知県立女子短期大学講師
- 7. 4 愛知県立女子短期大学助教授
- 10. 4 愛知県立大学助教授
- 14.10 愛知県立大学教授
- 18. 4 大阪大学助教授大学院文学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院文学研究科
- 22.10 大阪大学教授大学院文学研究科

所 属：大学院文学研究科文化表現論専攻国文学・東洋文学講座
専門分野：日本平安文学

石 黒 真 吾 （いしぐろ しんご）

大学院経済学研究科



【略歴】

- 平 3. 3 立命館大学経済学部経済学科卒業
- 5. 3 京都大学大学院経済学研究科経営学専攻修士課程修了
- 8. 3 京都大学大学院経済学研究科経営学専攻博士後期課程認定退学
- 8. 4 南山大学講師経営学部
- 11. 3 博士（経済学）（京都大学）
- 12. 4 立命館大学助教授経済学部
- 14. 4 大阪大学助教授大学院経済学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院経済学研究科
- 22.10 大阪大学教授大学院経済学研究科

所 属：大学院経済学研究科経済学専攻理論分析講座
専門分野：応用ミクロ経済学

鳩 澤 歩 （ばんざわ あゆむ）

大学院経済学研究科



【略歴】

- 平元. 3 大阪大学経済学部経済学科卒業
- 3. 3 大阪大学大学院経済学研究科経済学専攻博士前期課程修了
- 3. 5 大阪大学大学院経済学研究科経済学専攻博士後期課程退学
- 3. 6 大阪大学助手経済学部
- 4. 4 滋賀大学助手経済学部
- 6. 4 滋賀大学講師経済学部
- 7. 4 大阪大学講師経済学部
- 10. 4 大阪大学講師大学院経済学研究科
- 13. 4 大阪大学助教授大学院経済学研究科
- 13.11 博士（経済学）（大阪大学）
- 19. 4 大阪大学准教授大学院経済学研究科
- 22.10 大阪大学教授大学院経済学研究科

所 属：大学院経済学研究科経済学専攻歴史分析講座
専門分野：経済史、経営史

新教授紹介

木 原 進 士 (きはら しんじ)

大学院医学系研究科



【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学医学部医学科卒業
 平元. 3 大阪大学大学院医学系研究科博士課程修了
 元. 3 医学博士（大阪大学）
 元. 7 川崎病院循環器科医員
 3. 1 米国ペイラー大学細胞生物科学研究員
 12.10 大阪大学助手大学院医学系研究科
 19. 4 大阪大学助教授大学院医学系研究科
 19. 6 大阪大学講師大学院医学系研究科
 22. 8 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科保健学専攻医療技術科学分野生体情報科学講座
 専門分野：心血管代謝学

野々村 祝 夫 (ののむら のりお)

大学院医学系研究科



【略歴】

- 昭61. 3 大阪大学医学部医学科卒業
 61. 4 大阪大学大学院医学系研究科博士課程入学
 大阪大学医学部（泌尿器科学教室）において研究に従事
 61. 5 大阪大学医学部附属病院において臨床補助の研修に従事
 平 2. 3 大阪大学大学院医学系研究科博士課程修了
 2. 3 医学博士（大阪大学）
 2. 4 東大阪市立中央病院医員（～平3.9）
 3. 6 大阪大学医学部研究生（泌尿器科学教室）（～平5.12）
 3.11 米国National Institutes of Health 研究員（～平5.12）
 6. 1 大阪大学助手医学部
 10. 8 大阪大学講師医学部
 17. 2 大阪大学助教授大学院医学系研究科
 19. 4 大阪大学准教授大学院医学系研究科
 22.10 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科器官制御外科学（泌尿器科学）
 専門分野：泌尿器癌（特に前立腺癌、腎癌）・男子内分泌学・泌尿器内視鏡外科

橋 本 均 (はしもと ひとし)

大学院薬学研究科



【略歴】

- 昭62. 3 京都大学薬学部薬学科卒業
 平元. 3 京都大学大学院薬学研究科修士課程薬学専攻修了
 3. 9 京都大学大学院薬学研究科博士後期課程薬学専攻退学
 3.10 大阪大学助手薬学部
 5. 5 博士（薬学）京都大学
 10. 4 大阪大学助手大学院薬学研究科
 10. 7 大阪大学講師大学院薬学研究科
 13.11 大阪大学助教授大学院薬学研究科
 18. 4 大阪大学医学系研究科附属子どものこころの発達研究センター兼任助教授
 大阪大学准教授（薬学研究科）
 20. 8 米国バンダービルト大学・医学センター・精神医学部門客員准教授（平21.8まで）
 22. 9 大阪大学教授大学院薬学研究科

所 属：大学院薬学研究科応用医療薬科学専攻神経薬理学分野
 専門分野：分子神経薬理学

新教授紹介

辻 川 和 丈 (つじかわ かずたけ)

大学院薬学研究科



【略歴】

- 昭57. 3 大阪薬科大学薬学部製薬学科卒業
- 59. 3 大阪大学大学院薬学研究科応用薬学専攻前期(修士)課程修了
- 59. 4 藤沢薬品工業株式会社探索研究所研究員(昭60.3まで)
- 60. 5 大阪大学薬学部研究生
- 63. 9 大阪大学助手薬学部
- 平元. 3 博士(薬学)(大阪大学)
- 5.10 ハーバード大学ダナ・ファーマー癌研究所研究員(平7.3まで)
- 18. 4 大阪大学助教授大学院薬学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院薬学研究科
- 22. 9 大阪大学教授大学院薬学研究科

所 属：大学院薬学研究科応用医療薬科学専攻
細胞生理学分野
専門分野：分子腫瘍生物学、免疫学

保 坂 淳 (ほさか あつし)

核物理研究センター



【略歴】

- 昭57. 3 京都大学理学部卒業
- 59. 3 東京都立大学大学院理学研究科修士課程物理学専攻修了
- 62. 3 東京都立大学大学院理学研究科博士課程物理学専攻修了
- 62. 3 理学博士(東京都立大学)
- 62.11 西ドイツレーゲンスブルク大学研究員
- 平 1. 9 米国ペンシルバニア大学研究員
- 3. 9 カナダTRIUMF研究員
- 5. 4 沼津工業高等専門学校講師
- 7.10 沼津工業高等専門学校助教授
- 12. 4 沼津工業高等専門学校教授
- 13. 4 大阪大学助教授核物理研究センター
- 19. 4 大阪大学准教授核物理研究センター
- 22. 8 大阪大学教授核物理研究センター

所 属：核物理研究センター核物理理論研究部門
専門分野：原子核物理学(理論)

村 上 匡 且 (むらかみ まさかつ)

レーザーエネルギー学研究センター



【略歴】

- 昭58. 3 大阪大学工学部電気工学科卒業
- 60. 3 大阪大学大学院工学研究科博士前期課程修了
- 62. 4 日本学術振興会特別奨励研究員(昭63.9まで)
- 63. 3 大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了(工学博士)
- 63. 9 西独マックスプランク量子光学研究所研究員
- 平 3. 1 (財)レーザー技術総合研究所研究員
- 5. 6 大阪大学助手レーザー核融合研究センター
- 15. 4 大阪大学助教授レーザー核融合研究センター
- 16. 4 大阪大学助教授レーザーエネルギー学研究センター
- 19. 4 大阪大学准教授レーザーエネルギー学研究センター
- 22. 8 大阪大学教授レーザーエネルギー学研究センター

所 属：レーザーエネルギー学研究センター
光・量子放射学研究部門
専門分野：プラズマ物理、慣性核融合、流体力学、高エネルギー密度物理

新教授紹介

後 藤 芳 一 （ごとう よしかず）

大学院工学研究科



所 属：大学院工学研究科附属高度人材育成センター若手研究者育成部門
専門分野：産業政策（モノ作り、中小企業、福祉技術）、企業経営（経営戦略、新事業）

【略歴】

昭53. 3 東京工業大学工学部機械工学科卒業
55. 3 東京工業大学大学院理工学研究科機械工学専攻修士課程修了
55. 4 通商産業省工業技術院総務課
56. 5 通商産業省機械情報産業局航空機武器課
57. 4 通商産業省機械情報産業局航空機武器課係長
58. 7 通商産業省大臣官房総合エネルギー対策推進本部事務局
59. 5 通商産業省機械情報産業局総務課技術第一係長
60. 6 通商産業省工業技術院基盤技術研究開発推進室基盤技術係長
61. 1 米国オハイオ州マイアミ大学大学院政治学科(科学技術庁「宇宙留学」)
61.11 通商産業省資源エネルギー庁省エネルギー石油代替エネルギー対策課
62. 7 通商産業省資源エネルギー庁省エネルギー石油代替エネルギー対策課課長補佐
63. 5 通商産業省機械情報産業局航空機武器課課長補佐
平 2. 6 通商産業省工業技術院国際研究協力課課長補佐
4. 6 通商産業省機械情報産業局総務課課長補佐
5. 6 新エネルギー・産業技術総合開発機構医療福祉機器開発課長
7. 6 通商産業省機械情報産業局医療・福祉機器産業室長
10. 7 通商産業省環境立地局環境指導室長
11. 7 新エネルギー・産業技術総合開発機構企画調整部長代理、技術革新研究所事務局長
13. 3 博士(工学)(東京工業大学)
13. 7 経済産業省製造産業局国際プラント推進室長
15. 8 経済産業省産業技術環境局標準課長
16. 6 経済産業省中小企業庁技術課長
18. 7 (独)中小企業基盤整備機構理事
20. 7 経済産業省製造産業局次長
22. 4 経済産業省大臣官房審議官(製造産業局担当)
22. 9 大阪大学教授大学院工学研究科

佐々木喜男名誉教授(薬学部)逝去



大阪大学名誉教授、佐々木喜男先生は、敗血症にて平成22年6月25日に逝去されました。享年85歳でした。

佐々木先生は、1948年3月京都大学医学部薬学科をご卒業、1957年6月に大阪大学薬学部薬化学講座講師として大阪大学に着任されました。その後、同講座助教授を経て、

1976年2月より1988年3月まで、同学部薬品分析化学講座教授として、研究室の運営に当たられました。

ご専門は、当初、主として植物塩基の検索と構造決定でしたが、その際に使用された核磁気共鳴法(NMR)の将来性にいち早く着目され、有機化学におけるNMRの導入に先導的役割を果たされました。同時に、量子化学的手法の有機薬化学への導入に力を注がれ、常に薬学に新しい光を向けられてきたそのご慧眼に、余人の追隨を許さなかったことは、異論はないところです。退官後もご研究は続けられ、2002年には勲二等瑞宝章叙勲の栄に浴されました。ライフワークとなった医薬品の構造活性相関解析へのエントロピー項の導入に関しては、お亡くなりになる直前までご研究を続けられていたとのこと。薬学に様々な概念を導入された佐々木先生のお姿を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表させていただきます。

(薬学研究科・薬学部)

花崎伸作名誉教授(工学研究科)逝去



本学名誉教授花崎伸作先生は、平成22年7月1日(木)に呼吸不全のためご逝去されました。享年70歳でした。

先生は、昭和38年大阪大学工学部をご卒業後、昭和40年大阪大学大学院修士課程を修了、昭和43年博士課程を修了され、大阪大学助手、助教授を経て、昭和62年大阪大学教授に昇任、平成10年大阪大学大学院工学研究科教授に配置換えとなり、平成16年に大阪大学を定年にて退職され、名誉教授の称号を授与されました。

この間、先生は長年にわたって広い視野と高邁な識見で、学生の教育、研究の推進並びに後進の指導育成に努められ、多くの優れた研究者、技術者を社会に送り出されました。

研究においては、ガラス繊維強化プラスチック(GFRP)の切削時の工具摩耗、熱可塑性プラスチックシートの円筒深絞り加工、BMCの射出成形、スタンパブルシートの成形加工など複合材料の加工について研究を進められ、多く

の業績を残されました。金属切削では、金属組織と切削機構の関係、チップブレイカの開発、SEM内微小切削による切削時の切削機構の解明など、卓越した研究業績をあげられました。また高ニッケル合金、チタン合金、超硬合金など難削材の切削についても、工具摩耗機構に対する研究を進められ、これらの分野における研究進展に貢献されました。さらに深穴を連続高送り穴あけ可能なツイストドリルの開発を進められ、これらの研究成果も高く評価されています。これらの研究成果により、機械工作の分野において、牽引役を務めるとともに産業界に大きく貢献されました。

学内においては、大阪大学工作センター長、工学部工作センター運営委員会委員長、学生実習工場運営委員会委員長、教務委員会委員などを務められ、本学の管理、運営及び発展に貢献されました。

学外においては、文部省学術審議会専門委員、大阪商工会議所推進委員・専門委員、大阪大学工業会理事などを歴任されました。また、民事訴訟の鑑定人も務められ、我が国の学術行政と科学技術の推進に貢献されました。

また、学会活動においては、精密工学会評議員、精密工学会関西支部長、日本型性加工学会評議員、日本機械学会生産加工工作機械部門運営委員会委員などを務められ、学協会の発展にも尽力されました。

ここに謹んで花_先生のご冥福をお祈り申し上げるとともに、哀悼の意を表します。

(工学研究科・工学部)

塩川二郎名誉教授(工学部)逝去



本学名誉教授塩川二郎先生は、8月6日(金)にご逝去されました。享年86歳でした。

先生は、昭和21年9月大阪帝国大学工学部応用化学科をご卒業になり、同年10月同大学文部教官に任ぜられました。昭和36年5月大阪大学より工学博士の学位を授与され、昭和36年11月大阪大学工学部講師、昭和40年2月同助教授を経て、昭和42年4月同教授に就任され、応用化学第1講座(無機工業化学)をご担当、昭和57年7月からは2年間、大阪大学評議員を務められ、さらに環境保全委員、学生生活委員を歴任し、大学の発展に寄与されました。昭和62年3月停年により退官され、同大学名誉教授の称号を授与されておられます。また、先生は大阪大学退官と同時に同年4月近畿大学教授として、私学の教育と研究指導体制の充実にご尽力され、平成6年3月にご退職、同年5月からは日本希土類学会名誉会員・顧問を務めてこられました。

この間、先生は長年にわたり広い視野と長期的な展望のもとに学生の教育、研究並びに後進の指導育成に努められ、多数の人材を養成して社会に送り出されました。先生の厳格かつ適切なるご指導を受けた卒業生は、各方面で活躍しておりますが、とりわけ応用化学の分野で独創的な仕事を開拓していることは、先生のご指導の賜物といえます。

先生は、我が国における希土類の化学とその関連分野での先駆的研究者であり、その業績は国内・国外で高く評価されています。まず希土類の原鉱処理に関する研究を行い、簡便な分離法を見い出されました。次に希土類元素の相互

分離法を研究され、新しいイオン交換法および溶媒抽出法を提案されました。特に、先生が開発されたイオン交換法は高純度酸化ランタンの製造に有効で、業界でも実施されるなど優れた実績を残しておられます。また希土類金属製錬の研究も行なわれ、ミッシュメタル合金工業化の基礎を築かれました。さらに希土類化合物の広範な研究にも着手され、中でも2価のユウロピウム化合物に関する研究はその独創性を高く評価され、その成果は米国の無機化学の教科書にも引用されております。この希土類化合物の研究をさらに発展させた蛍光体、磁性材料、水素吸蔵合金薄膜、化学センサ、触媒等新しい機能性材料の開発にも力を注がれ、これらの業績により、近畿化学工業会昭和36年度化学技術賞、電気化学協会昭和56年度武井賞、日本化学会昭和57年度学会賞、昭和63年11月紫綬褒章、電気化学協会平成3年度功績賞、平成6年4月勲二等瑞宝章を授与されました。また、新しい視点に立脚した無機工業化学の教科書を編纂されたのをはじめ、学生のための指導書を15編、編集・出版、これらに加えて先生の研究分野に関する著書6編、その他4編を上梓して、いずれも版を重ね、学術分野において大きく貢献されました。

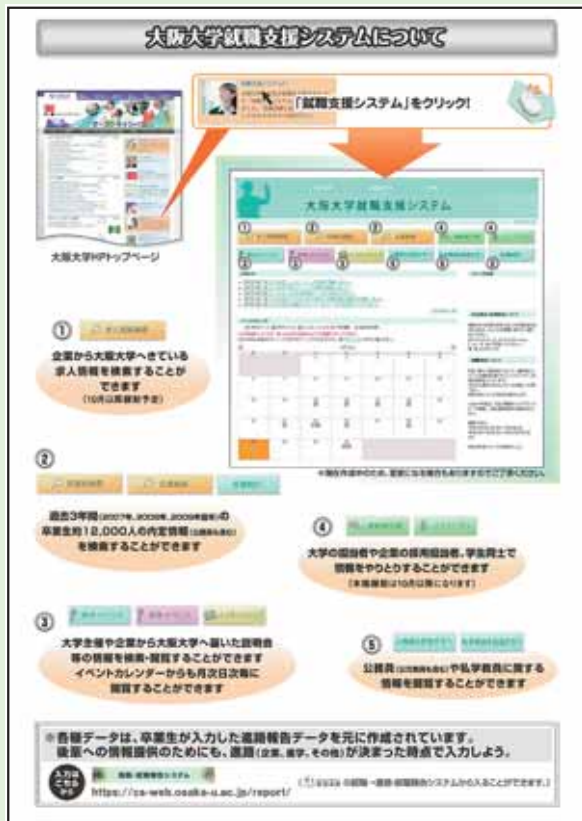
一方先生は以上のような、教育・研究活動にご尽力されるとともに、日本希土類学会会長、大阪工研協会会長、日本化学会副会長・同近畿支部長、電気化学協会副会長・同関西支部長・同化学センサ研究会会長・同溶融塩委員会委員長など数多くの役職を歴任され、同分野の発展に多大の貢献をなされました。また、科学技術庁資源調査会専門委員、金属鉱業事業団発電機用超伝導材関係委員会委員長、大阪通産局近畿地域技術開発推進懇談会委員、山田科学振興財団評議員、泉科学技術振興財団理事、日本工学アカデミー理事なども務められ、我が国の科学技術の向上発展に貢献されました。

以上のように、教育、研究、大学の運営・発展はもとより学会、各種学術団体の進歩発展、国際学術交流の促進並びに我が国の学術の発展に多大な貢献をされました塩川二郎先生のお姿を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表しますとともに心よりご冥福をお祈り致します。

(工学研究科・工学部)

就職支援システム及び進路・就職報告システム

平成21年度より、「KOAN」の就職力テゴリーに「就職支援システム」及び「進路・就職報告システム」を設け、この度「就職支援システム」を改訂（リニューアル）しました。 利用できる者：本学に在籍する学生、教職員



「就職支援システム」

利用できる機能は、以下のとおりです。

過去の阪大生の内定先データ（2007年度～2009年度）の閲覧

インターンシップ、就職ガイダンス、会社説明会（学内・学外）等の情報提供。

公務員、私学教員を目指す学生向けの情報提供

阪大生の採用を希望する企業等とのコミュニケーションの場の提供

就活生同士の情報交換の場の提供

大学からの就活に関する情報掲示板 など

求人情報検索の運用開始（10月より運用開始）

「進路・就職報告システム」

就職内定者、進路未定者、その他に関わりなく、学生が報告（入力）。この報告（入力）により、大学が現状を把握し、大学で学ぶ後輩たちへの就職支援として活用され、今後のキャリア支援に役立てると共に、各種統計調査にも対応できることになります。

報告時期：進路・就職（内定）先が決まり次第

報告（入力）先：KOAN の就職カテゴリの「進路・就職報告システム」

※ KOAN を利用した報告（入力）が出来ない場合、就職ガイドブックに添付の様式 1 を学部等の就職担当係に提出してください。

(学生部キャリア支援課)

平成22年度適塾記念講演会 緒方洪庵生誕200周年記念講演会 - 洪庵の学問を育んだもの -

大阪大学及び適塾記念会では、緒方洪庵及び門下生の業績を顕彰するとともに、事業の一つとして毎年記念講演会を開催しており、本年は緒方洪庵の生誕200周年記念講演会として下記のとおり開催いたします。皆さまのご参加をお待ちしております。

日 時：平成22年11月24日(水) 14:30～16:30
会 場：大阪大学中之島センター10階 佐治敬三メモリアルホール
(大阪市北区中之島4-3-53 TEL 06-6444-2100)

主 催：大阪大学、適塾記念会

プログラム：

講演1「洪庵の学問を育んだ心」

放送大学教授 大阪大学名誉教授 多田 羅 浩 三

講演2「洪庵先生と大坂」

大阪歴史博物館長 大阪大学名誉教授 脇 田 修

受講料：無料(定員190名)

お申込みはFAX・メール・お電話で受け付けております。

(FAX・メールによるお申込みは、お名前・ご住所・電話番号を必ずご記入ください。)

お申込み先・お問い合わせ先：大阪大学企画部広報・社会学連携事務室

TEL 06-6879-7016 FAX 06-6879-7156

E-mail ki-kousyagaku-renkei@office.osaka-u.ac.jp

(企画部広報・社会学連携事務室)



第51回大阪大学まちかね祭

大阪大学豊中キャンパスで開催されるまちかね祭では例年、日頃のクラブ・サークル活動における成果の発表やステージでのライブ、スポーツ大会、研究室開放、模擬店などの企画が行われ、本学学生だけでなく学外からの多くの来訪者で賑わっています。

51回目を迎える今回のまちかね祭では、「本気(マジ)かね!!」をテーマに、より一層の盛り上がりを目指します。まちかね祭への皆様のご参加をお待ちしております。

開催期間：11月5日(金)～11月7日(日) 10:00～

開催場所：大阪大学豊中キャンパス(豊中市待兼山町)

アクセス：阪急電車宝塚線「石橋駅」下車、徒歩15分 大阪モノレール「柴原駅」下車、徒歩10分

詳しくは、まちかね祭ホームページ「第51回まちかね祭」(<http://www.machikanesai.com/>)でご確認ください。

お問い合わせ先：大阪大学大学祭中央実行委員会

豊中市待兼山町1-10 大阪大学学生部学生交流棟気付

TEL/FAX: 06-6857-1806 Mail: info@machikanesai.com



大阪大学総合学術博物館 第12回企画展
「線の表現力」
アートの諸形態、須田国太郎《能・狂言デッサン》から広がって

会 期：2010年10月27日[水]～2011年1月8日[土] 10:30～17:00 入場無料

日祝、12月29日[水]～1月3日[月]は休館 ただし11月7日[日]は開館

会 場：大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館

主 催：大阪大学総合学術博物館・大阪大学附属図書館 共 催：大阪大学大学院文学研究科

特別協力：芦屋市立美術館 協 力：大阪大学21世紀懐徳堂



開催趣旨

原始の岩窟壁画の時代から、人類は“線”を刻みつけることでコミュニケーションをしてきました。組みあわされた複数の“線”は、言葉を伝える文字となる一方、世界を写しとり、それを表現する絵画へと発展します。中国や日本では、絵画の基本的な要素である「画之六法」の二番目に「骨法用筆」があげられるなど、“線”の存在が重視されます。また、西洋の絵画でも“線”の存在がいかに重要であるかは言うまでもありません。さらに“線”による表現は、現代アートの世界でも多種多様な試みがなされてきています。

この展覧会では、大阪大学附属図書館に寄贈された、日本近代を代表する洋画家・須田国太郎（1891 - 1961）の《能・狂言デッサン》を中心として、日本の近現代美術における“線”による表現をごらんいただきます。モノの形象を画面に再現する写実的な“線”、それ自体の美しさを主張する“線”、日本画と洋画の“線”の違いなどを紹介します。そして須田国太郎が終生、熱中した能や狂言の舞台スケッチを公開し、写実的でありながらも、演者の動きとともに“線”が加速し、運動を追跡する素描へと変容していくことを示します。最後に、モノの再現を解き放たれ、運動体と化した“線”が、抽象絵画もふくめた新しいアートの表現へと進んでいくことを示します。

展示構成

第1章 “線”は自分の歌を歌い出す―具象化への意志と美しき“線”―

第2章 運動の軌跡をえがきとめる―須田国太郎《能・狂言デッサン》―

第3章 “線”は別の歌を歌い出す―抽象化への疾駆、さらに新しい表現へ―

ワークショップ

11月6日[土] 13:30～15:00

中村貞夫（画家・宝塚大学講師）「描線を楽しもう―1本の線で描く―」

ピカソが得意にした一筆描きの素描をみんなで楽しみましょう。あなたの描いた“線”が会期中、1階ロビーのインスタレーションを飾ります。画用紙、鉛筆は当館で用意しますが、その他、スケッチブック、筆、ペンなど、ご持参歓迎です。

定員40名（先着順）

ミュージアムレクチャー

11月7日[日] 13:30～15:00

【第27回】中村貞夫（画家・宝塚大学講師）「線描の軌跡」

11月27日[土] 13:30～15:00

【第28回】上野正章（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究員）

「愚直な音楽―ジョンケージによる図形楽譜の試み―」

12月4日[土] 13:30～15:00 / 15:15～16:30

【第29回】天野文雄（大阪大学名誉教授）「能と絵の出会い―須田国太郎 能・狂言デッサン再考―」

【第30回】須田寛（JR東海相談役）「能 と父・須田国太郎」 天野・須田両氏による対談あり

12月11日[土] 13:30～15:00

【第31回】加藤瑞穂（芦屋市立美術館主任学芸員）「行為の痕跡：1950年代 具体 作品の線」

3階セミナー室にて開催。いずれも聴講自由、30分前より受付開始。定員60名。

大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-20 Tel 06-6850-6284 <http://www.museum.osaka-u.ac.jp/>



INTERVIEW

田 中 護

総務部人事課企画第三係 係長

総務部人事課の田中さんは、7年ほど前から箕面市の小学生にサッカーの指導をされています。練習は主に土、日に行われ、現在は小学校3年生、4年生のチームを中心に指導しています。趣味でサッカーをする人は多いかもしれませんが、「サッカー指導者」としての顔を持つ田中さんにお話を伺いました。

サッカー指導のきっかけは？

もともと運動は好きでテニスや野球をしていましたが、実はサッカーを昔からしていたわけではなく、阪大で働き出してから始めました。「当時参加していた学生主体の阪大のサッカーサークルにいたメンバーに誘われて、小学生への指導に参加したのがきっかけです」と振り返る。

サッカーを指導するにあたって大事にしていること

技術の指導よりも、人間形成の一助に関わることを大事にしたいと語る。「サッカーを通じて、第一に挨拶することの大切さや、礼儀を学んでほしいと考えています。また、サッカーから、リスペクトの精神を培ってくれたらと思います。少年（少女）サッカーには、イエローカードやレッドカードのほかに、【グリーンカード】というカードがあります。このカードはゲーム中にぶつかって倒してしまった相手に手を貸して起こしたり、審判がたまたま見過ごしてしまった反則を自ら申告するなどのフェアプレーに対して教育的側面から提示されるものです。子どもたちには、グリーンカードを出してもらえよう人間に成長してほしいと思っています。」

また、「いつも真剣であること」を大事にしているという。



「叱るときも喜ぶときも真剣です。指導の9割くらいは叱ったり、注意したりが占めますが、子どもの成長を感じられた時には、喜びで指導の苦勞も吹っ飛びます。」

指導を通してうれしかったこと

昨年担当していた6年生からプレゼントされた記念撮影アルバムには、田中コーチへの感謝のメッセージであふれており、「いつも真剣」に取り組んできたことがよくうかがえる。

7年前、最初に指導した6年生が大学生くらいの歳になってきた。毎年3月に開催される卒団式では、中学生・高校生になった卒業生が訪れ、田中さんをはじめとするコーチ陣と「本気の」勝負をする。卒業生がチームのためにコーチとして帰ってきてくれることはとてもうれしいという。

自分の成長、今後の楽しみ

子どもと真剣に向き合えば、向き合うほど、我慢が必要な場面も多い。指導を通じて自分が成長させてもらったと感じることも多く、「おかげで忍耐強くなりました」と語る。卒業生が阪大生となって、再会し、昼休みに一緒にサッカーするのが今後の楽しみとのこと。



子どもとのふれあいから学んだこと

子どもとのふれあいから学んだことはコミュニケーションの大切さ。仕事でも、それを実感している。「仕事上の仲間との対話のみならず、スポーツ活動などを通して得た仲間の多彩な考え方やつながりを大切に、これからも自分自身、成長していきたいと思っています。」

タイ、再び微笑みの国へ

バンコク教育研究センター 杉 山 香 里

タイと言えば、この春の騒乱は記憶に新しいことかと思えます。3月中旬、赤いシャツに身を包んだ反政府組織の集団がデモ活動を開始してから、5月下旬に治安部隊との衝突が終息するまで、2か月以上も緊張状態が続きました。今もなお、全面的な解決には至っていないものの、街は活気を取り戻しつつあり、微笑みの国、タイが戻ってきたようです。

バンコク教育研究センターに赴任して約1年、各部局から留学プログラムの紹介や調査研究のため、タイに来られた多くの方に、本センターを訪問いただきました。タイは本学への留学生数が中国、韓国に続き、95名（平成22年5月時点）と多く、また研究者間の交流が盛んであり、本学と最も関係の深い国のひとつです。上述の騒乱が激化している期間は本センターへの来訪も途絶えてしまいましたが、治安が回復し始め、街が復興し、再びタイに来ていただけるようになりました。9月4日に本センターが主催しました。バンコク留学プログラム総合説明会には、関係部局のご協力を得て、先生方、職員の方にお越しいただき、無事に開催できたことを嬉しく思っています。

タイに出張で来られる方を迎え入れることは、赴任して初めてタイを訪れた私にとっても、この国のことを知るよい機会となりました。今回は訪問された方のご滞在のアレンジなどを通じて学び、経験したタイ、特にバンコクのことを紹介させていただきたいと思います。

■ 常夏の国、タイ



タイでは一年中街中で見られる
ブーゲンビリアの花

の度合いに差はあるものの一年を通して温暖な気候のため、いつでも色鮮やかな花や南国特有の果物を楽しむことができます。

■ タイという国

タイを訪れて、まず気がつくことは、至るところに国王

の肖像画が飾られているということです。屋外のみならず、個人宅にも飾られているということであり、国民の国王に対する敬意がうかがえます。また、紙幣と硬貨にも国王が描かれています。タイでは硬貨を落とした場合も、踏みつけてはいけないと言われるのはこのためです。さらに、公園や駅など公共の場所で朝8時と夕方6時の1日2回、国歌が流れ、その間直立して傾聴することも国民の愛国心の表れと言えます。

橙色の袈裟を身にまとった僧侶を見かけることも仏教国、タイの特徴のひとつです。特に、朝は托鉢にまわる僧侶をよく見かけます。僧侶は女性に触れてはいけないなど、戒律を守る必要があるそうです。

これらの光景はタイを始めて訪れた方にとっては奇異に感じられると思いますが、滞在先のことを知り、その慣習に従うことも、大切だと思っています。

■ 近年発達してきた鉄道交通



街の中心部にあり地下鉄と直結している
チュラロンコン大学の商業ビル

下鉄が2004年に開通したことにより、道路状況は多少改善されたと言われます。

それでもなお、バンコクでは渋滞がひどく、車で移動をする時は訪問先との時間調整に悩まされます。大学間学術交流協定校で、タイで最も有名な大学のひとつであるチュラロンコン大学は街の中心部にあるため、鉄道で訪問することができますが、バンコクは大阪のように至るところ



通勤時間帯のエアポート
レールリンク駅の様子

に路線が開通しているわけではないので、訪問先によっては渋滞を覚悟して車で移動せざるを得ない場合もあります。

スワンナプーム国際空港とバンコク都内の移動は、今までは車に依存していましたが、今年8月末に鉄道が開通しました。エアポートレールリンクと呼ばれるその鉄道は、空港と本センターの最寄り駅を約20分で結びます。将来的には鉄道駅でのチェックインも可能になるということです。開通以後、旅行者だけではなく、通学・通勤にも利用され始めているようで、今後乗客数が増加すれば、この路線も交通渋滞緩和の一助となるかもしれません。

■ 国際都市バンコクのことは

バンコクは外国人観光客、居住者の多い都市です。タイの公用語はタイ語ですが、街の中ではタイ人と外国人のあいだの英語でのやりとりをよく耳にします。タイ人の英語は抑揚に特徴があるため、聞き取りづらいこともあります。簡単な会話程度であればためらうことなく英語を話す人が多く、比較的外国人にとって過ごしやすい環境であると思います。

また、日本語を話すタイ人がたくさんいることにも驚かされます。日系企業の就職口があり、またアニメなどサブカルチャーが広まっているためか、タイ人の日本語への関心は高く、第二外国語として高等学校や大学で日本語を専攻したり、卒業後に日本語学校へ通う方は多いようです。

先述の留学プログラム総合説明会では、本学同窓生に日本語—タイ語通訳として活躍していただきました。将来の留学生をリクルートするにあたって、本学への留学体験談を現地のことばで伝えることができる同窓生の協力は、今後不可欠となりそうです。

■ 手軽な観光



私立大学内の木曜市のような

出張でタイを訪れた方は、タイの文化に触れる機会が少ないと思いますが、合間の時間にタイの文化を感じることできます。そのひとつが、屋台式の小売店の集り、つまり市場（タイ語でタラートと言います）です。タラートはタイの各所で見られ、それぞれ開催日時、扱っている商品などに特徴があります。観光地として有名な市場としては水上市場や週末市場などがありますが、本センターから徒歩10分ほどの距離にある私立大学の中で開催されている市場は、手軽に訪れることができます。その市場は木曜日だけ開催されるため、在留邦人のあいだでは木曜日の市場、『もくタラ』と親しまれていて、朝6時頃から昼過ぎまで、野菜、鮮魚から衣類や日用雑貨まで様々な屋台が立ち並びます。

また、タイ観光の王道である王宮を観光することができなかった場合も、その前に飾られているタイの守り神を帰



スワンナプーム国際空港に設置されている守り神、ヤック

国前に見ることができません。ヤックと呼ばれるその守り神の巨像は、スワンナプーム国際空港の出発ロビーに12体設置されており、帰路につく人々を待ち構えているかのようにも見えます。地元紙によると、到着ロビーの分かりづらい場所に設置されていたこれらの像を昨年、空港利用者の目につきやすいように出発ロビーに移動したということです。

■ 伝統的な暮らし

長年にわたってタイを見て来られた先生方からは、タイの生活もこの20年あまりで近代化し、随分と変わったということをお聞きします。確かに、子どもたちが塾に通っていたり、街を歩く人が携帯電話で話をしている光景は先進国と変わらないように思われます。

バンコクでの赴任生活でタイの昔ながらの暮らしを体験する機会は少ないですが、タイの現首相の実姉で翻訳家のJane Vejajivaさんの著作“the happiness of Kati”の中で知ることができました。この本の中では、祖父母と暮らす9歳の少女Katiの自然と調和したタイの昔ながらの生活が美しい文章で描かれています。日本語版『タイの少女カティ』も出版されているそうです。タイの伝統的な暮らしに興味のある方にはお勧めしたい著書です。



“the happiness of Kati”
(2006年) Jane Vejajiva

■ 最後に

この1年間、訪問いただいた先生方、職員の方との懇談や訪問先大学等への随行を通じて、大阪大学の様々な分野の取り組みについて見聞きし、学ぶことができました。これらは、海外拠点での勤務を通じてこそ、経験できたことであり、このような機会をいただけたことに感謝しています。

また、個人的なレベルにとどまらず、今年度で5周年を迎えるバンコク教育研究センターとしても、皆様とのネットワークを保ち、広げていくことで、支えられているのだと実感しています。

タイにご出張される際は、微力ながら情報提供などの支援をさせていただきますので、是非お知らせください。引き続き、本センターの活動にご協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。

クィーンズランド大学(オーストラリア)



The University of Queensland (Australia)

クィーンズランド大学は、1909年に設立された、オーストラリア屈指の総合大学です。クィーンズランド州で唯一、世界の大学のトップ50位内に位置し、オーストラリアの学問を主導する *Group of 8* や、国際的な大学間ネットワークである *Universitas21* に属するなど、大学間交流や国際交流の面でも世界をリードしてきました。

ブリスベン川が流れる緑豊かな St Lucia のメインキャンパスのほか、Ipswich や Gatton、Herston などにもキャンパスがあり、2009年現在、学部学生、大学院生などあわせて40,512名が広大なキャンパスで学んでいます。留学生も110カ国の8,813名が在籍しています。

それぞれがいくつかの School から構成される文学部、法律経済ビジネス学部、建築情報工学部、健康科学部（医学、歯学、薬学など）、資源農業獣医科学部、理学部、社会行動学部（心理学、教育学、ジャーナリズムなど）の7つの大きな学部（Faculty）を擁し、なかでもユニークな資源農業獣医科学部は、オーストラリア国内だけでなく、国外からも多くの学生が集う学びの場となっています。

本学文学研究科・文学部はクィーンズランド大学全学と



1985年に部局間学術交流協定を締結し、以来、双方の多くの学生が交換留学生として互いの大学で学び合い、成果をあげてきましたが、このたび、本学人間科学研究科・人間科学部と連携して大学間学術交流協定を締結しました。今後は多くの研究領域で幅広い学術交流が展開するものと期待されます。

[クィーンズランド大学 コンタクトパーソン
渋谷勝己（文学研究科・教授）]

ウェブサイト：<http://www.uq.edu.au/>

編集後記

今年の夏は暑さが厳しく、本当に秋が来るのかと心配しましたが、10月に入り、日中はともかく、朝晩は過ごしやすいい日が増えてきました。みなさんそれぞれの秋をいかがお過ごしでしょうか。

さて、10月といえば、10月1日から創立80周年記念ラッピングを施したスクールバスが3キャンパスを巡回して

いるのをみなさんお気づきでしたでしょうか。キャンパス内はもちろんですが、私が見かけた中央環状線走る姿もなかなかの存在感でした。また、数学に明るい方はバスの背面に記された数式にも注目してみてください。数式で表された「原点へ・未来へ」を見つけることができます。

（柿木）

ボランティアサークル フロンティア

ボランティアの窓口になるサークル



はじめまして。ボランティアサークルフロンティアです。
突然ですが、「人の役に立ってみたい!」「ボランティアを始めてみたい!」「障がい者や子供と関わってみたい!」

「でも、どうしたらいいのかわからない・・・。」

そんなあなたは是非一度、フロンティアに来てみてください。

私たちは普段、ボランティア活動を通じて、目の見えな
い方、耳の聞こえない方、知的障がいの方、車いすの方な
ど様々な人と接しています。施設に行っても障がい者と接す



るって、ものすごく敷居の高いことだと敬遠されがちです
が、ちゃんとした窓口さえあればすごく簡単で、同じ気持
ちを持つ仲間がいたらめっちゃ楽しい!! そう思いません
か!? そんな世界がフロンティアにはあるんです!!

フロンティアでは点字や手話の勉強、障がい者の施設や
遠足に行く、介護をする、献血のお手伝いをするなど、障
がい福祉を中心とした様々な活動をしています。でも、フ
ロンティアでボランティアを始める方法はめちゃくちゃ簡
単です!! BOX(私たちの部室です)に行く!! それだ
けです」

また、フロンティアには100人を超える団員がいます。
フロンティアではたくさんの仲間に出会えます。

つまり、活動はとりあえずめっちゃ楽しい!! しかも団
員はみんながみんなめっちゃおもしろい!! 楽しもうと思え
ば思うだけ楽しめる空間。それがフロンティアです。

団長 占部 翔大(工2年)

コメント

障がい福祉ボランティアを「敷居の高いもの」
と思っていませんか? そんなことはありません。
相手の方が楽しんで、自分自身も楽し
める。そんな時間がここにはあります。



練習場所: 豊中キャンパス 仮設サークル棟(地図参照)

練習日時: HP 参照

部員数: 153人

連絡先: 占部翔大 Cerberus.1013.v.v@ezweb.ne.jp

ホームページ

http://www.geocities.jp/handai_frontier/index.html

トピックス

平成22年度大阪大学防災訓練を実施しました



ドクターヘリへ要救助者を搬送する
医学部附属病院高度救命救急センター医師



吹田キャンパスからドクターヘリで
到着した鷲田総長による挨拶・訓辞



屋上に取り残された要救助者を
吊り上げる防災ヘリ（総合図書館）

安全衛生管理部では、学生・教職員の防災意識向上を目的に毎年キャンパス単位での防災訓練を実施しています。今年度は9月1日の「防災の日」にあわせて、去る8月31日(火)に豊中キャンパスにおいて、地震による火災、建物倒壊等の災害が発生したことを想定した大規模な防災訓練を行いました。

今回の訓練は2部構成で、第1部では豊中キャンパス各部局による避難訓練を、第2部ではグラウンドにおいて全学的な防災訓練を実施しました。第2部では、豊中市消防本部、大阪市消防局航空隊、大阪府保健医療室医療対策課、大阪府池田土木事務所、大阪府豊中保健所、大阪府豊中警察署等の関係行政機関にご協力をいただき、防災ヘリ及びドクターヘリの着陸・救助訓練、トリアージ訓練、消防はしご車による高層建物救助訓練、高層建物からの緊急脱出のための降下訓練、消火器による初期消火訓練、非常食の炊き出し訓練等を実施しました。

特に今年度は、豊中キャンパスグラウンドが大阪府の広域避難場所及び防災ヘリの着陸拠点に指定されていることを踏まえ、実際のヘリの着陸が安全かつスムーズに行われるよう、グラウンドにおいて防災ヘリ及

びドクターヘリの着陸・救助訓練を行いました。総合図書館では、屋上に取り残された要救助者をヘリからロープを降ろし消防隊員が抱えたまま吊り上げた後、ヘリをグラウンドに旋回させ、安全に着陸・避難させる訓練を行いました。

当日、ドクターヘリに搭乗し、医学部附属病院から駆けつけてくださった鷲田総長の挨拶を抜粋します。「非常時、災害時は日常のシステム自体が壊れてしまう、あるいは停止してしまうので、ひとりひとりの動きをいかにうまく秩序だったものにしていくか、その仕組みの設計が大事である。きちんと全体を見渡して、機転を利かせた動きをすることが大事である。体で覚えないと機転は利かせられないし、咄嗟に動けない。参加者にはとにかく体を動かして大汗をかいてほしい。」

災害は、いつ、どこで発生するか分かりません。日頃からわれわれ自身で災害に備えることが大切です。

最後に、今回の訓練の企画・実施にご協力いただいた関係行政機関、地域住民の方々、学内関係部局、そして残暑厳しい中訓練に参加いただいた学生、教職員の方々に厚くお礼申し上げます。

(安全衛生管理部)

阪大 NOW No.120 2010 10月号

2010年10月20日発行

編集 大阪大学広報・社会学連携室
発行 大阪大学企画部広報・社会学連携事務室 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL: 06(6879)7017 FAX: 06(6879)7156
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp/>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせにつきましては、下記までお寄せ下さい。
E-mail: ki-kousyagaku-kouhou@office.osaka-u.ac.jp